

奈良県^{こせ}御所市

巨^こ勢^せ山^{やま}古墳群 V

平成17年(2005年)1月

御所市教育委員会



例 言

1. 本書は、土砂採取事業に伴う事前調査として、御所興産株式会社の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市室・西寺田地内に所在する巨勢山371号墳・407号墳・408号墳・409号墳の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、第1期（対象：巨勢山371号墳・407号墳・408号墳）と第2期（対象：巨勢山409号墳）に分けて行った。調査期間は、第1期は平成9年（1997年）10月15日から平成10年（1998年）3月31日まで、第2期は平成10年10月12日から12月1日までである。
3. 調査は、御所市教育委員会 技術職員 木許 守が担当し、調査補助員として以下の諸氏が参加した。（所属は断らない限り当時）
太田宏明（現・河内長野市教育委員会）・鬼頭 彰・布谷依子・深谷 洋（現・名古屋見晴台考古資料館）・川口奈穂子・荻野亜衣・荻山和絵（以上、関西大学）・相見 梓・阪本晋通・風間厚徳（以上、奈良大学）・上山泰史（龍谷大学）
また、現地調査および整理作業を通じて藤田和尊（御所市教育委員会）の協力があつた。
4. 本書の作成にかかる整理作業は、現地調査参加者のほか、藤村藤子・尾上昌子・榎原静代・藤井静代・中久美子・濱慎一・東野茂樹・廣瀬一郎・森香奈子が参加した。
5. 本書の執筆・編集は木許が行った。
6. 遺物の製図は、主として藤村が担当し、一部を鬼頭・濱・木許が担当した。遺構の製図は木許が担当した。また写真撮影は遺構・遺物とも木許が行った。
7. 出土遺物のうち、土器については観察表を本文末に付した。遺物番号は、本文・挿図・図版・観察表のそれを統一した。挿図における出土遺物実測図の縮尺は、1/3を基本にしたが、一部1/2にしているものがある。
8. 引用・参考文献は、第1章の遺跡分布図のうち本文中でふれ、番号を付した遺跡に関わる文献を同章末尾に掲げ、その他本書を通じては、第6章「まとめ」の末尾に一括して掲げた。
9. 本書で用いた「北」は「座標北」である。
10. 現地調査および本書刊行にかかる費用は、御所興産株式会社がすべて負担した。関係各位にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

本文目次

例言

第1章 位置と環境	1
第2章 巨勢山371号墳	6
第1節 位置と墳丘	6
第2節 主体部1	12
1. 形状	12
2. 遺物出土状態	14
3. 出土遺物	16
第3節 主体部2	19
1. 形状	19
2. 遺物出土状態	20
3. 出土遺物	27
第3章 巨勢山407号墳	38
第1節 位置と墳丘	38
第2節 横穴式石室	39
1. 墓壇	41
2. 玄室	41
3. 羨道	44
4. 前庭部	44
第3節 遺物出土状態	47
1. 古墳築造時の遺物	47
2. 追葬時の遺物と追葬棺の配置	49
3. 古墳に関わらない遺物	52
第4節 出土遺物	53
1. 土器	53
2. 馬具	58
3. 鉄器	61
4. 金銅装製品・銀製品・鉄製品	62
5. 鉄釘	63

第4章 巨勢山408号墳	66
第1節 位置と墳丘	66
第2節 横穴式石室	68
1. 墓域	69
2. 玄室	69
3. 羨道	72
4. 前庭部	75
5. 閉塞施設	76
第3節 遺物出土状態	76
1. 玄室床面 奥壁付近の土器	77
2. 玄室床面 奥壁付近の馬具	80
3. 玄室床面 左側壁玄門付近の土器	80
4. 玄室床面付近 西半の鉄釘	81
5. 攪乱層その他の出土遺物	81
第4節 出土遺物	82
1. 土器	82
2. 馬具	87
3. 不明鉄製品	96
4. 鉄釘	96
第5章 巨勢山409号墳	101
第1節 位置と墳丘	101
第2節 主体部1	103
1. 形状	103
2. 遺物出土状態	106
3. 出土遺物	107
第3節 主体部2	107
1. 形状	107
2. 遺物出土状態	110
3. 出土遺物	111
第6章 まとめ	113
文献註	116

挿 図 目 次

図1	巨勢山古墳群と周辺の遺跡 (S.=1/50,000)	3~4
図2	今次調査地の位置と地形	7~8
図3	巨勢山371号墳 墳頂部出土土器 (S.=1/6)	9
図4	巨勢山371号墳・370号地点 墳丘および地形測量図 (S.=1/250)	10
図5	巨勢山371号墳 墳丘断面図 (S.=1/120)	11
図6	370号地点・墓道断面図 (S.=1/200)	12
図7	巨勢山371号墳 主体部1 平面・立面図 (S.=1/30)	13
図8	巨勢山371号墳 主体部1・2 横断面図 (S.=1/50)	14
図9	巨勢山371号墳 主体部1 縦断面図 (S.=1/50)	14
図10	巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土土器 (S.=1/3)	16
図11	巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土鉄器・石製品 (S.=1/3)	18
図12	巨勢山371号墳 主体部2 平面・立面図 (S.=1/30)	21~22
図13	巨勢山371号墳 主体部2 縦断面図 (S.=1/50)	23
図14	巨勢山371号墳 主体部2 遺物出土状態1 (S.=1/4)	23
図15	巨勢山371号墳 主体部2 遺物出土状態2 (S.=1/10)	25
図16	巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土土器 (S.=1/3)	28
図17	巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土土器 (S.=1/3)	29
図18	巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具1 (S.=1/3)	31
図19	巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具2・鉄器 (S.=1/3)	33
図20	巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土馬具 (S.=1/3)	34
図21	巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土ガラス玉 (S.=1/2)	37
図22	巨勢山407号墳 墳丘 測量図 (S.=1/200)	38
図23	巨勢山407号墳 東側周溝 断面図 (S.=1/50)	39
図24	巨勢山407号墳 墳丘・横穴式石室 断面図 (S.=1/90)	40
図25	巨勢山407号墳 横穴式石室 (S.=1/60)	45~46
図26	巨勢山407号墳 墳丘 遺物出土状態 (S.=1/15)	47
図27	巨勢山407号墳 追葬面 遺物出土状態 (S.=1/30)	50
図28	巨勢山407号墳 墳丘 出土土器 (S.=1/3)	53
図29	巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土土器 (S.=1/3)	54
図30	巨勢山407号墳 石室内 追葬面出土土器1 (S.=1/3)	55

図31	巨勢山407号墳	石室内 追葬面出土土器 2 (S.=1/3)	56
図32	巨勢山407号墳	石室内攪乱層・束刷溝 出土土器 (S.=1/3)	57
図33	巨勢山407号墳	石室内 攪乱層出土馬具 1 (S.=1/3)	59
図34	巨勢山407号墳	石室内 攪乱層出土馬具 2 (S.=1/3)	60
図35	巨勢山407号墳	石室内 攪乱層出土鉄鍔 (S.=1/3)	63
図36	巨勢山407号墳	初葬面・攪乱層 出土鉄器・銀製品など	63
図37	巨勢山407号墳	石室内 攪乱層出土鉄釘 (S.=1/3)	64
図38	巨勢山408号墳	墳丘 測量図 (S.=1/200)	66
図39	巨勢山408号墳	墳丘・横穴式石室 断面図 (S.=1/90)	67
図40	巨勢山408号墳	横穴式石室 (S.=1/60)	73~74
図41	巨勢山408号墳	閉瘞石 (S.=1/60)	76
図42	巨勢山408号墳	石室床面の遺物出土状況 (S.=1/50)	77
図43	巨勢山408号墳	玄室奥壁付近 遺物出土状態 1 (S.=1/15)	78
図44	巨勢山408号墳	玄室奥壁付近 遺物出土状態 2 (S.=1/5)	79
図45	巨勢山408号墳	玄門部付近 遺物出土状態 (S.=1/15)	80
図46	巨勢山408号墳	玄室 床面出土土器 1 (S.=1/3)	83
図47	巨勢山408号墳	玄室 床面出土土器 2 (S.=1/3)	84
図48	巨勢山408号墳	玄室 床面出土土器 3 (S.=1/3)	85
図49	巨勢山408号墳	玄室 床面出土土器 4 (S.=1/3)	86
図50	巨勢山408号墳	玄室 床面出土土器 5ほか (S.=1/3)	87
図51	巨勢山408号墳	玄室 床面出土馬具 1 (S.=1/2)	89
図52	巨勢山408号墳	玄室 床面出土馬具 2 (S.=1/2)	91
図53	巨勢山408号墳	玄室 床面出土馬具 3 (S.=1/2)	92
図54	巨勢山408号墳	出土鍔 想定復原図 (S.=1/4)	93
図55	巨勢山408号墳	玄室 床面出土馬具 4ほか (S.=1/3)	94
図56	巨勢山408号墳	出土鉄釘 1 (S.=1/3)	97
図57	巨勢山408号墳	出土鉄釘 2 (S.=1/3)	98
図58	巨勢山408号墳	出土鉄釘 3 (S.=1/3)	99
図59	巨勢山409号墳	墳丘 測量図 (S.=1/200)	101
図60	巨勢山409号墳	墳丘 断面図 (S.=1/100)	102
図61	巨勢山409号墳	主体部 1 平面・立面図 (S.=1/30)	104
図62	巨勢山409号墳	主体部 1 断面図 (S.=1/30)	105
図63	巨勢山409号墳	主体部 1 棺外出土土器 (S.=1/3)	108

図64	巨勢山409号墳	主体部 2	平面・立面図 (S.=1/30)	109
図65	巨勢山409号墳	主体部 2	断面図 (S.=1/30)	109
図66	巨勢山409号墳	主体部 2	出土遺物 (S.=1/3)	112

表 目 次

表 1	巨勢山371号墳	主体部 2	出土ガラス玉計測表	36
表 2	巨勢山408号墳	出土脚金具計測表	95	
表 3	巨勢山371号墳	出土土器観察表	117	
表 4	巨勢山407号墳	出土土器観察表	123	
表 5	巨勢山408号墳	出土土器観察表	129	
表 6	巨勢山409号墳	出土土器観察表	136	

図 版 目 次

図版 1	巨勢山371号墳ほか	航空写真 (東上空から)
	巨勢山371号墳	主体部 1 (南から)
図版 2	巨勢山371号墳	主体部 1 棺外遺物 (須恵器) 出土状態
	巨勢山371号墳	主体部 1 棺外遺物 (鉄鍔) 出土状態
図版 3	巨勢山371号墳	主体部 2 (南から)
	巨勢山371号墳	主体部 2 棺内遺物 (ガラス玉)
図版 4	巨勢山371号墳	主体部 2 棺内遺物 (馬具・須恵器) 出土状態
	巨勢山371号墳	主体部 2 棺外遺物 (馬具・須恵器) 出土状態
図版 5	巨勢山371号墳	主体部 2 棺外遺物 (馬具) 出土状態
	370号地点東	墓道の堆積土
図版 6	巨勢山407号墳 (手前) と巨勢山408号墳	
	巨勢山407号墳	石室 (羨道側から)
図版 7	巨勢山407号墳	石室 (奥壁)
	巨勢山407号墳	石室 (玄門部)
図版 8	巨勢山407号墳	石室 (玄室左側壁)
	巨勢山407号墳	石室 (玄室右側壁)
図版 9	巨勢山407号墳	石室 (奥壁と右側壁のコーナー部分)
	巨勢山407号墳	石室 (奥壁と左側壁のコーナー部分)

- 図版10 巨勢山407号墳 石室（袖石と玄室前壁）
巨勢山407号墳 石室（袖石と右側壁のコーナー部分）
- 図版11 巨勢山407号墳 墳丘東周溝肩部付近の遺物（須恵器）出土状態1
巨勢山407号墳 墳丘東周溝肩部付近の遺物（須恵器）出土状態2
- 図版12 巨勢山407号墳 石室内追分面遺物出土状態
巨勢山407号墳 石室内追分面遺物出土状態（右側壁付近）
- 図版13 巨勢山408号墳 石室（羨道側から）と奥壁付近の出土遺物
巨勢山408号墳 石室（奥壁）
- 図版14 巨勢山408号墳 石室（玄門部）
巨勢山408号墳 石室（奥壁と左側壁のコーナー部分）
- 図版15 巨勢山408号墳 石室（奥壁と右側壁のコーナー部分）
巨勢山408号墳 石室（袖石と右側壁のコーナー部分）
- 図版16 巨勢山408号墳 石室（玄室右側壁）
巨勢山408号墳 石室（羨道右側壁）
- 図版17 巨勢山408号墳 石室（羨道左側壁）
巨勢山408号墳 閉塞石（玄室内から）
- 図版18 巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物出土状態
巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物（須恵器）出土状態
- 図版19 巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物（馬具）出土状態
巨勢山408号墳 石室内玄門付近の遺物（土師器）出土状態
- 図版20 巨勢山409号墳 全景（東から）
巨勢山409号墳 主体部1（南から）
- 図版21 巨勢山409号墳 主体部1 土層断面と遺物出土状態
巨勢山409号墳 主体部1（北から）
- 図版22 巨勢山409号墳 主体部1 墓壙発掘状態（東から）
巨勢山409号墳 主体部2（東から）
- 図版23 巨勢山371号墳 墳頂部出土土器
巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土土器
- 図版24 巨勢山371号墳 棺外出土鉄器・石製品
巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土土器1
- 図版25 巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土土器2
- 図版26 巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具・鉄器
- 図版27 巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土馬具
巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土ガラス玉

- 図版28 巨勢山407号墳 墳丘 出土土器
 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土土器
- 図版29 巨勢山407号墳 石室内 追葬面出土土器1
- 図版30 巨勢山407号墳 石室内 追葬面出土土器2
 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層・東周溝出土土器
- 図版31 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土馬具
- 図版32 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土鉄鎌
 巨勢山407号墳 石室内 初葬面・攪乱層 出土鉄器・銀製品など
- 図版33 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土鉄釘
- 図版34 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器1
- 図版35 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器2
- 図版36 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器3
- 図版37 巨勢山408号墳 玄室 床面出土馬具1
- 図版38 巨勢山408号墳 玄室 床面出土馬具2ほか
- 図版39 巨勢山408号墳 出土鉄釘1
- 図版40 巨勢山408号墳 出土鉄釘2
- 図版41 巨勢山408号墳 出土鉄釘3
- 図版42 巨勢山408号墳 出土鉄釘4
- 図版43 巨勢山409号墳 主体部 1 棺外出土土器
- 図版44 巨勢山409号墳 主体部 2 出土遺物

本 文



第1章 位置と環境

御所市は、奈良盆地の南西部端に位置する。大きく分ければ、市域の北半は低平な盆地部を形成し、南半は丘陵地となっている。西側の市境は、葛城山から金剛山に連なる山地となって、大阪府域と接している。南は、風の森峠を介して、西流して紀淡海峡に注ぐ吉野川に貫かれる五條市域と接している。

このような地理的な環境から、御所市域は、古代から、大和から河内や紀伊に至るルート上の一つとして重要な位置を占めてきた。現在は市域のほぼ中央を東西に国道309号線が、南北に国道24号線が整備され、それぞれ大阪方面、五條・吉野・和歌山方面への交通の便に供している。現在のこれらの国道の位置が、厳密に古代の道そのものに重なるのではないが、これらに平行したルートが古い時代の街道として利用されていたことは間違いない。

その意味で、この国道309号線と国道24号線の交差点付近は、古代以来現在もなお交通の要衝にあたるが、今回報告する巨勢山古墳群は、まさにこの交差点の南東に広がる巨勢山丘陵上に占地する群集墳である。

さて、御所市域を中心とする歴史的環境については、これまでも御所市文化財調査報告書においても繰り返し記述されてきた。ここでは、巨勢山古墳群を巡る古墳の分布状況を整理しておきたい。以下、古墳名称末尾に付した番号は、図1の遺跡番号に一致する。

御所市域における前期の古墳としては、西浦古墳(2)やオサカケ古墳(3)が知られており、最近では巨勢山419号墳(4)が調査された。また、近辺地域においては旧新庄町域の寺口和田13号墳(5)も前期古墳として知られていた。しかしこれらの古墳には、特に早い時期に調査されたものがあり、また総じて墳丘規模もあまり大きいものでは無かったことから、南葛城は前期古墳の希薄な地域であると概括されてきた。

そのような状況のなかで、平成12年(2000年)に鴨都波1号墳(6)の発掘調査が行われた。鴨都波1号墳は、その上層の堆積土が整地されて水田として利用されていたため、古墳の痕跡が地表面に現れず、その存在自体がまったく知られていなかった。当該地が弥生時代の拠点的大集落として著名な鴨都波遺跡の範囲内にあたるため、開発行為に伴う発掘調査を実施したところ、はじめてその存在が明らかになった。

鴨都波1号墳の墳丘は、長辺20m、短辺16m程の小規模な方墳であったが、粘土層を主体部とする埋葬施設から豊富な副葬品が出土した。木棺内では三角縁神獸鏡1・漆塗り杖状木製品1・緑色凝灰岩製紡錘車形石製品1・鉄剣1・玉類があり、木棺外では、三角縁神獸鏡3・方形板葺短甲1・碧玉製大形紡錘車形石製品1のほか、漆塗り靱・鉄鏃・鉄槍・鉄刀・鉄剣・鉄斧・鉋などが出土した。鴨都波1号墳の築造時期については、このような副葬品や陸で出土した土器から総合的に考え、前期中葉とみている。

この鴨都波1号墳を含む鴨都波遺跡第15次調査を契機にして、この近辺に弥生時代以来連続として継続する墓域の存在を想定できるようになった(木許2001)。古墳時代に関しては、鴨都波1号墳に先行するとみられる山本山古墳や、後続するとみられる西浦古墳を位置づけることができるようになり、さらに、検出された包含層出土の遺物から、その後も後期に至るまでこの近辺に古墳群が営まれたと想定している。

さて、このような前期の状況に対して、中期前半に、視覚的には墳丘規模において隔絶する室宮山古墳(7)が築造される。室宮山古墳は、巨勢山丘陵の北辺に位置し、この丘陵から延びてきた尾根の端部を切断して墳丘を形成するものである。墳丘規模238mの威容を誇る。

大形前方後円墳は、その後やや規模を縮小させながらも、掖上鍬子塚古墳(8)が築造され、旧新庄町域には、屋敷山古墳(9)、北花内大塚(飯豊陵)古墳(10)、二塚古墳(11)が中期から後期に引き続いて系譜的に築造されている。

御所市域では、このような流れとは別に、榎野権現堂古墳(12)、新宮山古墳(13)、水泥北古墳(14)、水泥南古墳(15)が、巨石を用いた横穴式石室墳として、巨勢谷に築造される。また、地形的にはこの谷には含まれないが、巨大な石室の存在が再確認された條ウル神古墳(16)は、やはり巨勢谷の勢力と関連する可能性が高く、注目される。

このような大形横穴式石室墳の系譜とは、さらにまた一線を画した状況で、終末期古墳も散見される。金剛山東麓のハカナベ古墳(17)や、巨勢山古墳群に含まれる巨勢山323号墳(18)を挙げることができる。また、葛城山や二上山の東麓地域には、旧新庄町域の神明神社古墳(19)、旧當麻町域の兵家古墳、鳥谷口古墳などがある。これらの古墳の周辺には、先行する群集墳などが存在する場合も多いが、これらの主体部が切石造りの横穴式石室もしくは横口式石槨で特に精巧な造りになっている場合が多く、一般的な群集墳から継続・発展して築造されたと考えにくい。これらの古墳は集団墓の1基との位置づけではなく、先行する古墳群と切り離して、個々の古墳が個別の事情でその所在地を選地したと考えられることが多い。

一方、中期後半から後期を中心とする首長墳の上のような動向の元に、この地域においても群集墳が盛んに造営される。本書で報告する古墳が含まれる巨勢山古墳群(1)は、総数700基に及ぶ大形群集墳である。室宮山古墳の南背後の丘陵に造営される地理的な位置から、巨勢山古墳群の造営が開始する背景にはこの大形前方後円墳との間に有機的な関連が想定されている(白石1973)。

群集墳はこのほか、独立丘陵上に占地する石光山古墳群(20)のほか、葛城山・金剛山の東麓に、御所市域から旧新庄町域、旧當麻町域の一部に至るまで、多くの群集墳が造営されている。それらは、当然ながら、古墳群によって造営開始の時期や古墳築造のピークになる時期が異なっており、埋葬施設のあり方も一律ではない。この地域に所在する群集墳の分析は、その造営集団に直結する問題を含んでおり、今後に向けて重要な課題になっている。



1. 巨勢山古墳群
2. 西浦古墳
3. オサカケ古墳
4. 巨勢山 419 号墳
5. 寺口和田 13 号墳
6. 鴨都波 1 号墳
7. 室宮山古墳
8. 掖上鎌子塚古墳
9. 新庄屋敷山古墳
10. 北花内大塚 (飯豊陵) 古墳
11. 二塚古墳
12. 桶野権現堂古墳
13. 新宮山古墳
14. 水尻北古墳
15. 水尻南古墳
16. 條ウル神古墳
17. ハカナベ古墳
18. 巨勢山 323 号墳
19. 神明神社古墳
20. 石光山古墳群

図1 巨勢山古墳群と周辺の道跡 (S. =1/50,000)

四 文獻註

1. 網干善教『小磯古墳』（『奈良県文化財調査報告（郷土文化財編）』第3集、1960年）
網干善教『御所市小磯第2号墳』（『奈良県文化財調査報告（郷土文化財編）』第4集、1961年）
久野勇雄『大和巨勢山古墳群（境谷支群）—昭和48年度発掘調査概報—』、1974年、奈良県教育委員会
千賀 久・田中一広『巨勢山古墳群（ミノヤマ支群）発掘調査概要Ⅰ』（『奈良県道跡調査概報（第2分冊）1982年度』、1983年）
田中一広『奈良県御所市巨勢山古墳群調査概要Ⅱ』（『奈良県道跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984年）
田中一広『巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報』（『奈良県道跡調査概報（第2分冊）1983年度』、1984年）
藤田和尊『奈良県御所市室 巨勢山境谷10号墳発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告』第4集、1985年）
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年）
藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年）
2. 梅原末治『大和御所町付近の道跡』（『歴史地理』第39巻第4号、1922年）
3. 高本 一『琴柱形石製品の新例』（『考古学雑誌』第28巻第6号、1938年）
4. 藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅲ』（『御所市文化財調査報告書』第25集、2002年）
5. 高本 一『金跡山古墳に就いて—地輪に関する資料—』（『大和志』第4巻第5号、1937年）
伊藤勇輔『寺口和山古墳群第2次発掘調査概報』（『奈良県道跡調査概報（第1分冊）1980年度』、1982年）
6. 御所市教育委員会『鴨部波1号墳調査概報』、2001年、学生社
7. 梅原末治『大和御所町付近の道跡』（『歴史地理』第39巻第4号、1922年）
秋山日出雄・網干善教『室大墓』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊、1959年）
泉森 峻・河上邦彦『室大墓古墳前方部張出部の調査』（『青陵』No18、1971年）
関川高功『御所市室大墓古墳外堀』（『奈良県道跡調査概報（第2分冊）1988年度』、1989年）
木許 守・藤田和尊『室宮山古墳範囲確認調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第20集、1996年）
藤田和尊・木許 守『台風7号被害による室宮山古墳山上遺物』（『御所市文化財調査報告書』第24集、1999年）
8. 網干善教『鑿子塚古墳』（『御所市史』、1965年）
植本智夫『御所市鑿子塚 前方部周濠発掘調査概報』（『奈良県道跡調査概報1977年度』、1978年）
南葛城地域の古墳文化研究会『奈良県御所市掖上鑿子塚古墳測量調査報告』、1986年
木許 守『掖上鑿子塚古墳第2次発掘調査報告』（『御所市文化財調査報告書』第14集、1992年）
9. 岩谷文則・久保哲正・大山真光『新庄屋敷山古墳』、1975年
10. 河上邦彦『新庄町飯倉段外堤の調査』（『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』（『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年）
土生田純之『壇口丘陵外堤の調査』（『唐津郡紀要』第32号、1980年）
11. 上田宏策・北野藤平・伊達宗泰・森浩一『大和二塚古墳』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第21冊、1962年）
12. 佐藤小吉『権現堂古墳』（『奈良縣史蹟勝地調査報告書』第3回、1916年）
河上邦彦『後・終末期古墳の研究』、1995年、雄山閣
13. 天沼俊一『桶宿の石棺及石塚』（『奈良縣史蹟勝地調査報告書』第1回、1913年）
奈良県教育委員会『新宮山古墳』（『奈良県指定文化財』昭和54年度版、1979年）
14. 網干善教『水泥混雑文石棺古墳及び水泥石塚穴古墳の調査』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14冊、1961年）
河上邦彦『水泥石塚穴古墳』（『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』（『奈良県文化財調査報告書』第30集、1978年）
15. 網干善教『水泥石塚文石棺古墳及び水泥石塚穴古墳の調査』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第14冊、1961年）
16. 御所市教育委員会『巨勢山古墳群範囲確認調査—現地説明会資料—』（2002年）
御所市教育委員会編『古代葛城とヤマト政権』（2003年、学生社）
17. 坂 靖編『南郡道跡群Ⅰ』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第69冊、1996年）
18. 藤田和尊編『巨勢山古墳群Ⅱ』（『御所市文化財調査報告書』第6集、1987年）
19. 泉森 峻ほか『新庄町 寺口千塚・新池支群 発掘調査報告—付 神明神社古墳発掘調査概要—』（『奈良県道跡調査概報（第1分冊）1981年度』、1983年）
20. 白石太郎・河上邦彦編『葛城・石光山古墳群』（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第31冊、1976年）

第2章 巨勢山371号墳

第1節 位置と墳丘

巨勢山371号墳・407号墳・408号墳・409号墳の立地する尾根は、巨勢山丘陵の主稜線から北西に延びる支尾根にあたる。371号墳の所在する地点は、その尾根がひとたび鞍部となって再び高まった地点に相当し、ここから北方向にも尾根が分かれる分岐点ともなる。なお、371号墳の南東に接する鞍部付近に、巨勢山370号墳として遺跡地区に登録されている平坦面があるが、後述するように、調査の結果、この場所は自然地形の平坦面であることが判明した。本書ではこれを370号地点と呼ぶ。

巨勢山古墳群では、古墳が立地している尾根自体が、谷間への土砂の流出のために自然に削られている地点が多い。その場合には、円墳であっても古墳の谷筋に平行する側の辺は、コンターラインが直線的になってしまっている。この巨勢山371号墳についても、特に古墳の東側にあたる斜面は土砂の流出のため急傾斜になっており、墳丘にもその土砂流出の影響が及んでいる。程度の差はあるが、古墳の西側や北北西側の谷に向かう斜面についても、やはりこのような土砂崩落の影響を受けている。したがって、本墳の墳丘形態を考える際には、尾根線上の、比較的土砂流出の影響の少ない地点からやや復元的にみる必要がある。

図4の測量図に示したように、墳頂部から南東方向へは、標高228.00m付近に傾斜変換点があって、ここから傾斜が急に緩やかになる。また、北西方向への尾根線上では225.00～225.25m付近のコンターラインの間隔が広くなり、北方向への尾根線上では226.50m付近のコンターラインの間隔が広がっている。これらの地点が古墳の基底部にあたる墳丘端とみられる。尾根の高い側と低い側では、最大3m程の比高差があるが、地形に合わせて墳丘を形成した結果と思われる。

これらの墳丘端を示す尾根線上でのコンターラインの流れが円弧を描くことから、本墳は円墳であると判断でき、また、この位置を通る円を復原すると直径21mの数値を得ることができる。

墳丘は、自然地形を最大限に利用して築造されている。墳丘の下半は地山を削り出して成形し、上部に盛土を行っている。盛土はそれほど厚くなく、最大で40cm程の厚みを検出した。盛土の上位は流出して幾分低くなっているようだが、墳頂部で検出した主体部の深さなどから見て、極端に下がっているとは考えにくい。墳頂部の現状の高さは、築造時のそれをおおよそ保っていたと思われる。

発掘調査を開始した直後に、墳頂部の表土のほぼ直下から須恵器製の破片が多数出土した。その付近で62片を採集し、ほかに同一個体とみられる4片を墳丘斜面で採取した。図3に示したものはその一部である。ほとんどの破片が互いに接合することはできなかったが、そこには壺以外の器種は含まれず、また胎土や焼成のあり方からみれば同一個体と判断できるものであった。破片の分量は、その1個体分の1/4に満たない程の数である。土器を観察すると、その外面にタタキ痕がみられ、内面には当て具の痕跡が残っている。当て具の痕跡の上にはヨコナアが施されるが、これをす

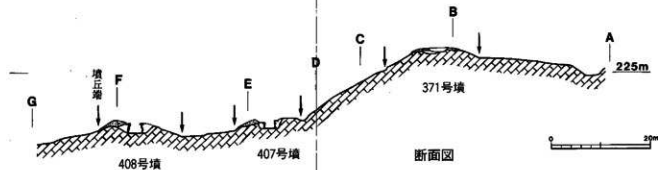
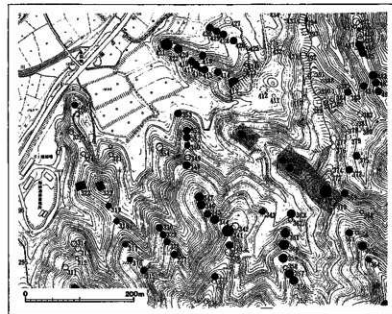
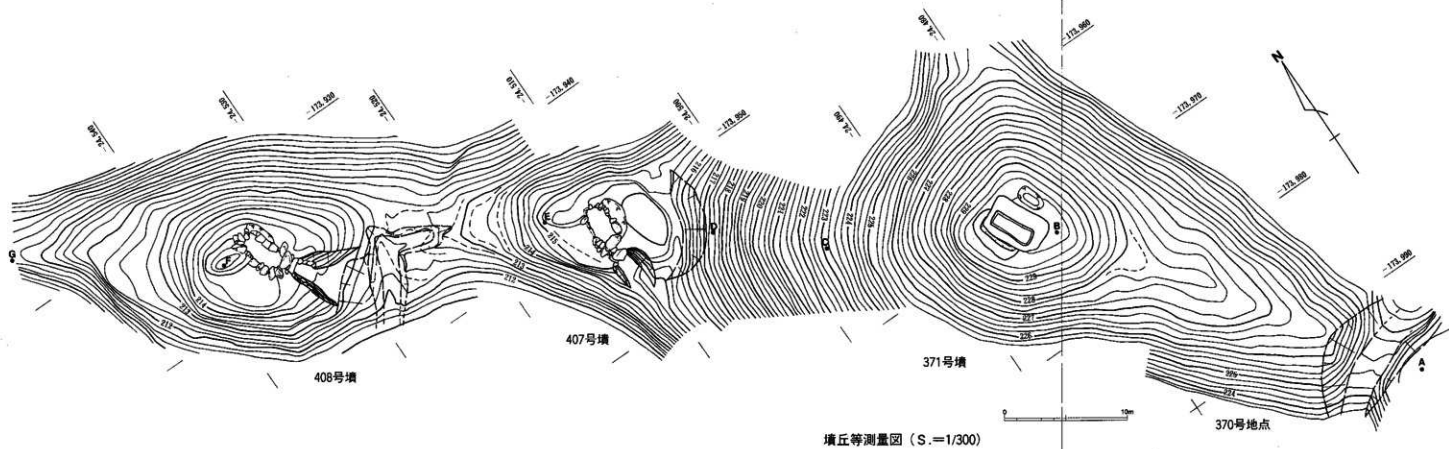


図2 今次調査地の位置と地形

り消すまでには至っていないものである。

墳丘上祭祀に関わる遺物とも考えられるが、本墳には、後述するように、初葬と追葬の2回の埋葬が行われており、その出土位置からだけではこの土器がいずれの埋葬に伴ったものか判断しにくい。仮に古墳築造時の埋葬に伴って墳頂部に破砕された甕の破片が蒔かれたものであれば、追葬の埋葬施設である主体部2の墓域埋土にその破片の幾らかは混入すると考えられる。しかし、実際には主体部2の埋土中には1片の破片も含まれていなかったことから、この甕は主体部2が埋め戻された後にこの場所に置かれた可能性が高い。内面のあて具の痕跡を完全にすり消さないことから土器自体に新しい要素を見いだすことができ、このこともこのような想定を支持している。

この甕は互いに接合することができない状態で出土していることから、1個体のものがここで割れて細片化したというよりも、元々破砕された土器がここに蒔かれた可能性が高い。そして、この土器が帰属する主体部を上のように考えることができるなら、追葬にあたる埋葬においても、墳丘上において土器を破砕するなどの行為が執行された可能性を考えることができる。なお、その際に破砕された土器は、主体部2の「遺物出土状態」の項で後述するように、棺内埋土中から出土した高杯(17-14)もあったと考えられる。

さて、図4の周辺地形測量図に示したように、371号墳の南東側には、ほぼ平坦面に近い緩やかな傾斜面がある。さらにその南西には検出最大幅6.2m、同深さ180cmに及ぶ掘り割り状の遺構を検出した。この平坦面に近い地形をなす地点は、遺跡地図に巨勢山370号墳として登録されているもので、当初古墳の存在を前提にして調査を行った。

発掘調査の進捗過程で、371号墳を含めたこのような周辺の地形が、370号地点を前方部、南西側の掘り割りを前方部前面の周溝とする前方後円墳となる可能性も考えられたので、それをも視野に入れて発掘調査を進めた。

しかし、結果的には、まず370号地点の両側は、土砂の崩落が激しい東側だけではなく、それがあまり顕著ではない西側においても自然と先細りになって前方部状を呈さないばかりか、単独の古墳としての形状もなさないこと、図6の土層断面図に示したように370号地点は表土直下が地山になり、盛土はまったく検出されなかったこと、そしてその地山上には埋葬施設の痕跡がまったく無かったことなどから、当該地は自然地形の平坦面であると判断された。

掘り割り状の遺構については、掘削の時期も不詳で解釈に苦しむが、巨勢山古墳群では、条件の

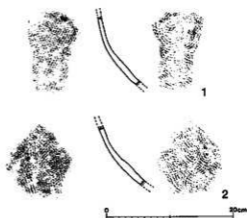


図3 巨勢山371号墳 墳頂部出土土器 (S=1/6)

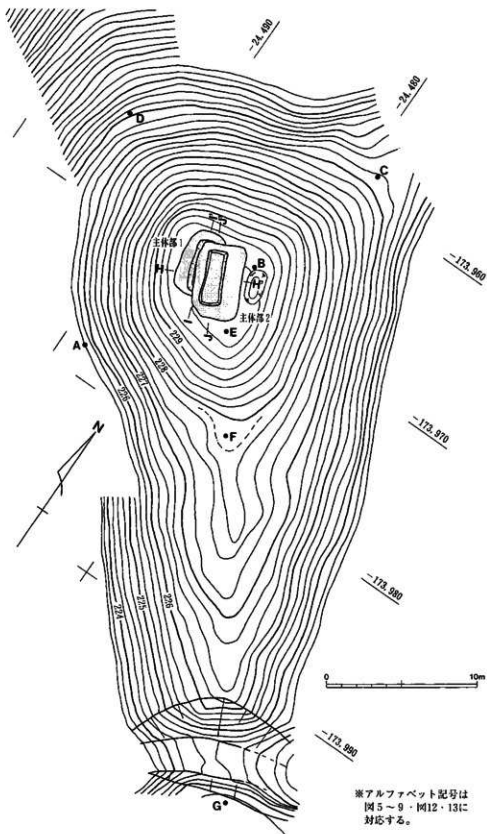
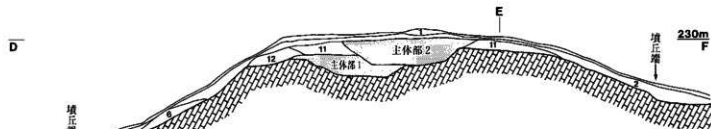
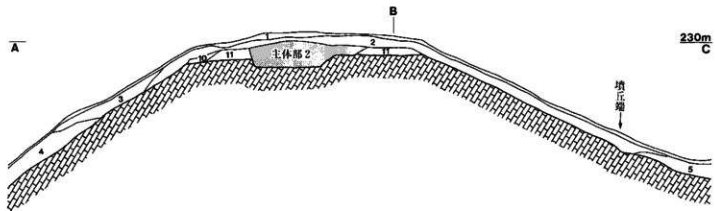


図4 巨勢山371号墳・370号地点 墳丘および地形測量図 (S=1/250)



※アルファベット記号は、図4に対応する。



註

- | | | |
|-----------|-------------------|-----------|
| 1. 表土 | 5. 暗黄褐色砂礫 | 9. 黄褐色砂礫 |
| 2. 黄灰色砂質土 | 6. 黄褐色砂礫(砂粒を多く含む) | 10. 黄褐色砂礫 |
| 3. 黄灰色砂礫 | 7. 黄褐色砂質土 | 11. 赤褐色砂礫 |
| 4. 暗黄灰色砂礫 | 8. 暗黄灰色砂質土 | 12. 赤褐色砂礫 |
- (11層より礫が大きい)

墳丘盛上

図5 巨勢山371号墳 墳丘断面図 (S-1/120)



図6 370号地点・墓道断面図 (S=1/200)

良い地点においては、このような比較的大規模に地山を掘削した墓道が検出されている。本例においても、古墳時代のもつとすれば、墓道である可能性が高い。その場合には、斜面を斜めに登る道が付けられ、何らかの事情でこの地点において尾根を横切る道となったのであろう。いずれにしても尾根の両側の斜面では、土砂の自然流出によってこれらの遺構が残存することは希である。

巨勢山371号墳の築造時期は、後述するように、初葬棺にあたる主体部1出土遺物から、MT15型式期の中でも比較的古い段階と考えられ、追葬の時期は、主体部2出土土器から、同じMT15型式期の中でも新しい段階と考えられる。

第2節 主体部1

1. 形状

前述のように巨勢山371号墳が立地する地点は、より高所から下ってきた尾根が2方向に分岐する箇所にあたっている。本墳の埋葬施設は、木棺直葬の主体部が2基検出されたが、いずれもその主軸は高所から下ってくる尾根の方向に合わせているらしい。

2基の主体部のうち、墳頂部のやや西側に寄っている主体部1が初葬棺で、その東で、墳頂部のほぼ中央に構築されたものが追葬棺にあたる主体部2である。主体部2は、その墓塚が掘削される際に、主体部1の東側辺を壊しつつ築かれたものである。2基の主体部のこのような位置関係からは、主体部1が構築された際には東側にスペースを空けており、追葬が予定されていたと考えられるが、主体部2を構築する時点では、当然それが追葬棺であることは意識されていたのであろうが、すでにある埋葬施設の位置については、あまり考慮することなく墳頂部のほぼ中央に墓塚が掘られたといえよう。

さて、主体部1の墓塚の上端は、墳丘盛土を除去した後の地山面で検出した。墓塚の規模は、それぞれ最大で、長さ4.30m・幅2.50m・深さ0.6mを測る。墓塚底のレベルは全体にほぼ同一で平坦である。また、特徴的なことは、墓塚の西側辺に沿って段が造られていることである。墓塚内を完固するのではなく、この辺についてのみ、墓塚の上端から20~30cmの深さに幅15~20cmの平坦面を

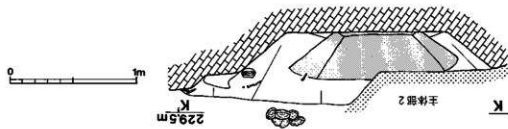
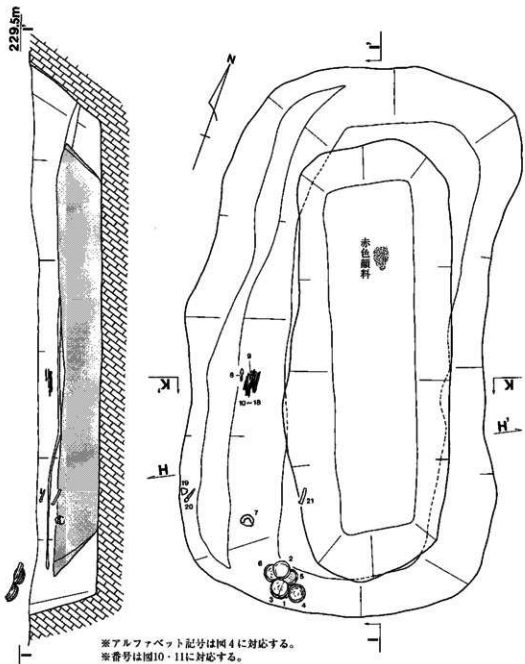
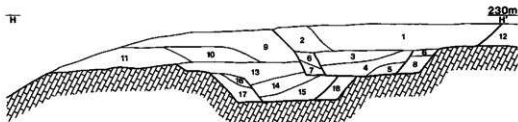


図7 巨勢山371号墳 主体部1 平面・立面図 (S-1/30)



註

- 1. 暗黄褐色砂質土
- 2. 暗褐色砂礫
- 3. 暗黄褐色砂礫
- 4. 暗赤褐色砂礫
- 5. 黄褐色砂質土
- 6. 暗褐色砂礫
- 7. 暗赤褐色砂質土
- 8. 暗赤褐色砂礫

埋土
主体部
2

- 9. 黄褐色砂礫
- 10. 赤褐色砂礫
- 11. 赤褐色砂礫
(礫が比較的大きい)
- 12. 赤褐色砂礫

墳丘盛土

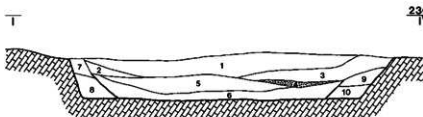
- 13. 黄灰色粘質土
- 14. 赤灰色砂礫
- 15. 赤褐色砂礫
- 16. 黄灰色粘質土
- 17. 暗赤褐色砂礫
- 18. 暗赤褐色砂礫

埋土
主体部
1

※アルファベット記号は、図4に対応する。



図8 巨勢山371号墳 主体部1・2 横断面図 (S.=1/50)



註

- 1. 黄灰色粘質土
- 2. 赤褐色砂質土
- 3. 暗黄褐色砂礫
- 4. 赤灰色砂質土
(赤色顔料)
- 5. 赤灰色砂礫
- 6. 赤褐色砂礫
- 7. 暗黄褐色粘質土
- 8. 暗赤褐色砂礫
- 9. 赤黄褐色砂礫
- 10. 暗赤褐色砂礫

※アルファベット記号は、図4に対応する。

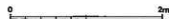


図9 巨勢山371号墳 主体部1 縦断面図 (S.=1/50)

設けているものである。棺の搬入の便に供したものとと思われる。

棺は、舟形木棺を直葬したものと思われる。棺の主軸は、棺底で採ればN-21度-Eに向けている。検出上端での長さ南北3.45m・榑東西1.27mを測る。棺底では長さ2.7mを測る。幅は南北の小口部でそれぞれ若干異なる。北側は0.69m、南側は0.57mとなって、北側の小口の方がやや幅が広い。棺底のレベルは、ほぼ一定である。また、「遺物出土状態」の項で後述するように、棺底中軸付近の北小口寄りに赤色顔料の分布が認められ、この位置が被葬者の顔面であるとすれば、埋葬頭位は北向きになり、棺の形状とも合致する。

2. 遺物出土状態

棺内からの出土遺物はなかった。ただし、棺内底の中軸付近で棺の北小口寄りの地点に、20×15 cm程の範囲に赤色顔料を検出した。その位置や分布範囲の大きさから判断すれば、被葬者の顔面に塗布された顔料であった可能性が高いと思われる。

副葬品はすべて棺外で検出したものである。検出した遺物のレベルからみて、墓室内に棺を搬入した後、棺を埋め戻していく過程で何段階かに分けて副葬されたいが、図7に示したように、それらはいずれも、棺の西側辺の外側にあたる地点に偏って出土している。ただし、この主体部の事例に限って言えば、墓室の東側付近に上層から掘られた主体部2があり、仮に東側付近に当初は副葬品が置かれていたとしても、攪乱されている可能性も考えられる。

しかし、もし現状に見るような墓室の西側付近への副葬品の偏在が、副葬当時の状態を示しているとすれば、このことは墓室の形状にも関係する可能性が考えられる。すなわち、「形状」の項でも述べたように、墓室の西側の長側辺には段が造られている。この段が棺の埋葬などを含む一連の葬送儀礼に必要なものであったとすれば、埋葬を行った人々は、墓室の西側に参列していたと想定される。参列者のそのような立ち位置から、副葬品の位置が自ずから決定したと考えることもできるだろう。

さて、鉄鍬(11-8~18)・鉄鎌(11-21)・須恵器甕(10-7)は、検出した棺の上面に近いレベルで出土した。

鉄鍬は、12個体以上が束ねられた状態で出土した。いずれも鋒を北に向けていた。前記の棺内の赤色顔料が被葬者の顔面に塗布されたものであったとすれば、弓矢は、棺外にありながらも被葬者に平行して置かれ、鋒を被葬者の頭の方に向けていたことになる。「出土遺物」の項でも述べるが、鉄鍬はほとんどが同型の長頭鍬であるが、(11-8)・(11-9)は鍬身部の形状が異なっている。特に平棧式の(11-8)は、副葬の時にも他と区別されていたようで、やや離れた位置に置かれていた。

鉄鎌(11-21)や須恵器甕(10-7)も同様のレベルで出土した。甕(10-7)は体部の約1/2が出土したものである。これに接合されるべき破片は全く出土しなかったので、この甕は意識的に割られて、破片の一部がここに置かれたものとみられる。

これらの遺物は埋葬の過程で、棺が墓室内に埋められていき、それがほぼ見えなくなった時点で、副葬されたものである。特に甕については葬送儀礼に使用された土器が、この時点で割られて副葬されたと考えられるかもしれない。

次に、刀子(11-20)・砥石(11-19)・須恵器蓋杯(10-1~6)は、墓室の掘り込み面かそれよりやや上位のレベルで検出されたものである。すなわち、墓室が完全に埋め戻された時点で副葬された遺物である。

刀子(11-20)と砥石(11-19)は、墓室の南西コーナー付近で互いに近接して出土した。明らかに1セットが意識された出土状態である。

須恵器は、杯蓋3個体と杯身3個体が集められた状態であった。墓室の南小口付近で出土した。上記の刀子および砥石よりさらに上位のレベルで検出された。刀子などを取めた後、さらに墓室上に土を盛り上げた後に置かれたものである。

これらの蓋杯には、身に蓋が被せられた状態のものではなく、蓋と身の別にかかわらず、内面を上に向けた状態で置かれていた。特に(10-1)と(10-3)は、いずれも杯蓋であるが、やはり内面を上に向けて(10-3)の上に(10-1)が重ねられていた。

3. 出土遺物

①土器

巨勢山371号墳主体部1の出土遺物はすべて棺外で検出したものである。そのうち、須恵器について図10に示した。これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表(117~118頁)に記したので参照されたい。

(10-1~6)の杯蓋・杯身は一塊となって出土したもので、(10-7)の風のみやや離れて出土した。杯蓋・杯身は「遺物出土状態」の項で記したように、身に蓋を被せた状態ではなかった。

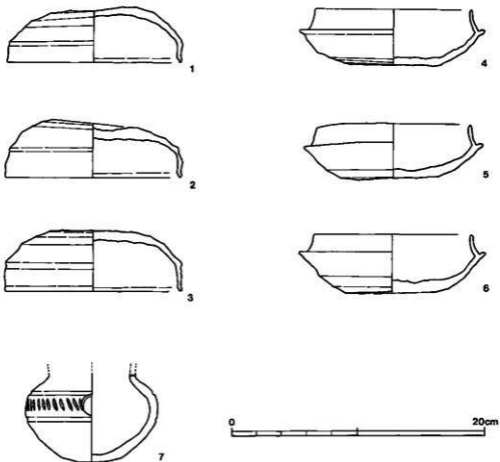


図10 巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土土器 (S=1/3)

焼成や胎土のあり方を観察すると、図示状態の左右、すなわち(10-1・4)、(10-2・5)、(10-3・6)がセットとして制作されたとみられるが、焼成前の器形の歪みが生じており、必ずしも口径がうまく合わない。

杯蓋は、いずれも口径が14cm程である。また、天井部と口縁部の境界となる稜が強く突出しないで、口縁端部先端がやや丸く内面に段がある。天井部も高く膨らまないで全体的には扁平な感じを受ける。一方の杯身は、あまり内傾しない比較的長いたちあがりで口縁端部は丸い。底部はやはり下方に膨らまないで全体の形状は扁平な感じがする。

甕(10-7)は、体部の1/2程が出土したものである。肩部の張りが比較的緩やかで、体部最大径の割に頸部下端の径がやや大きい。

これらの諸特徴はMT15型式(田辺1966、以下須恵器の「陶邑編年」に関しては同書による)に該当しようが、杯身の口縁端部が丸いことや、杯蓋の天井部と口縁部の境界の稜があまり突出しないことなどの点は、より新しい要素とみられるかもしれない。しかし、これらの土器は、同じ古墳の追葬施設にあたる主体部2の棺内から出土した土器より、層位的に下層で検出したものである。後述するとおり、主体部2の土器もMT15型式にあたりとみられるが、両者の様相にはかなりの違いがある。ここでの層位的な新古が実際にはどれほどの時間差に対応するのか不明であり、また、土器の諸特徴の差異は、例えば製作地の違いなども絡む可能性があるので、単純に時期差に対応するとも言えない側面があって、問題は複雑である。このことに関しては主体部2の「出土遺物」の項で再度述べるが、上記の主体部1出土土器については、MT15型式期に併行するとみられ、ここでは、主体部2出土土器との層位的な関係から、その中でも比較的古い段階に位置づけておく。

②鉄鍬およびその他の鉄器・石製品

鉄鍬は棺外に一括して副葬されたものである。鍬身部で10個体を数えるほか、基部を中心として関部を残すものが(11-18)のほか図示していない別個体があって、それらが他のいずれとも接合し得ないので、少なくとも合計12個体の副葬があったと考えられる。(11-18)などのみが鍬身部が遺存しないのは不自然と言えるかもしれないが、この12個体の鉄鍬が一束となっていた出土状況や、墓塚埋土中に直接置かれて土を被せられた副葬状態および他の鉄鍬にも両端が劣化して遺存しなかったものがあることを考えると、鏽による劣化が偶然早くに進行して鍬身などが残らなかったと考えるのが妥当であろう。なお、現状では(11-16)と(11-17)が鏽着しており、(11-9)も図示していない別個体の基部と鏽着している。

(11-8)は、腸扶三角形鉄鍬である。鍬身は両丸造で、寛被部の関は台形関で左右に段を有している。鍬身部の最大幅2.7cmを測るが、逆刺の一方を欠損しており、元の最大幅はさらに1~2mm程度大きいものと思われる。茎の先端も欠損しており現存長は10.3cmになっている。現状の重量は13.7gである。

(11-9)は長頸鍬で、鍬身部は長三角形で平造、逆刺を有する。寛被関部の形状は、状態が良

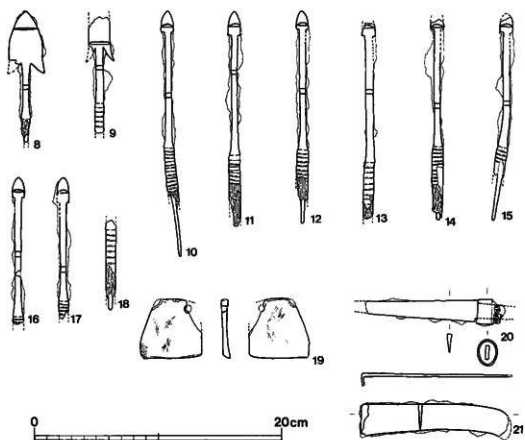


図11 巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土鉄器・石製品 (S.=1/3)

くなく判りにくい。台形闊かとみられる。逆刺の一方および鋒・茎の先端を欠損している。

上記の2個体のはかは、いずれも同工の長頸鎌である。鎌身は三角形で鎌身闊部は角闊である。片丸造となっている。茎に矢柄の一部が残っているために観察するのに制限が生じるが、箆被部の闊は台形で前後左右の全面に段を有するとみられる。おおよそ元の長さを保っているものは、(11-10)が19.2cm、(11-12)が16.4cmを測る。鋒を僅かに欠損している(11-15)は残存長15.8cmである。それらの現状での重量は、(11-10)15.3g、(11-12)13.1g、(11-15)14.6gである。

砥石(11-19)・刀子(11-20)は互いに近接して出土した。砥石(11-19)は、紀ノ川流域で採取されたとみられる泥質片岩が使われている(註)。元は一辺4.7~5.0cm程の台形に近い不整形な方形を呈していたとみられるが、図示状態左図の右上部が欠損している。この破損部に両側穿孔による円孔の一部が残っている。円孔の最大径は復原径5mmを測る。また、破損によって生じた面以外は側面も含めて使用されて摩滅し、各面とも平滑になっている。このため全体の厚みは均一ではなく、よく使用された箇所は薄くなっている。厚みは3~6mmを測る。

刀子(11-20)は、鋒および茎の先端を欠損している。現存長は11.0cmを測る。闊部に鉄製の黄

金具を有している。貴金具は把頭側が腐食しているが現状で幅1.5cm程を測る。厚みは約1mmある。長径2.1cm、短径1.6cmの楕円形の筒状を呈するが、鉄板のつなぎ目が肉眼では観察できないことから、鍛接技法によって接合した筒を貴金具として木製の把の上から嵌め込んだものと考えられる。

刀身の刃部最大幅は1.7cmで、鋒にいくに従って漸次幅を狭めている。背幅は4mmである。関の形状は、把の木質が残り上記の貴金具もあって観察しにくい。僅かに垣間見る様子では、両側でそれぞれ直角の段を有するとみられるが、定かではない。

鉄鎌(11-21)は、鋒を欠損している。背幅2mm、長さは現状で11.8cmを測る。鋒の破損部の状況からみて元の長さはこれより極端に長くなるものではない。全体に刃部が緩やかに内彎して、鋒付近でややその彎曲の度合いを増すものとみられる。基部は約8mmを直角に折り曲げている。基部付近に木質などの遺存は観察できない。

(註) 榎原考古学研究所 共同研究員 奥田尚氏のご教示による。

第3節 主体部2

1. 形状

墳頂部に2基存在する主体部のうち、追葬棺にあたるものである。墳頂部では、まず地山面から主体部1が掘られ、これが埋め戻された後に墳丘を構成する盛土が行われている。主体部2の墓竈はこの盛土面に掘削されている。これを元の高さまで埋め戻した状態が古墳の墳頂にあっている。

主体部2の墓竈は、墳頂部のほぼ中央に掘削されるが、主体部1の墓竈の東辺を切っている。主体部1は墳頂部でも西に偏った位置に造られていることから、当初から追葬を予定していたとみられるが、主体部2の構築時には、先行する主体部の位置はあまり考慮されなかったらしい。

墓竈の規模は、それぞれ最大で長さ4.87m・幅3.22m・深さ0.7mを検出した。主体部2の墓竈も、主体部1の墓竈と同様に、墓竈斜面の一部に段が設けられていた。主体部1の場合には西側辺にあったが、主体部2においては、東側辺から南小口にかけての位置に造られていた。段は、検出した墓竈上端から15~20cmの深さの位置で、幅30~60cmの平坦面を設けるものである。

墓竈底のレベルは、南小口の方が北小口より、約8cm高くなっている。さらに図13の縦断面図に示したように、南小口側付近には、墓竈を掘り抜いた後に、第17層とした暗赤褐色砂礫が置かれており、この土の上に木棺が安置されたものと考えられた。つまり、棺底が接するレベルで言えば、墓竈の南側は、北側に比べて約16cm高くなっている。

棺は刳抜き式の舟形木棺を直葬したものとみられる。棺の主軸は、棺底で採ればN-24度-Eに向けている。検出上端での最大長さ3.60m・最大幅1.42mを測る。検出できた深さは、最大33cmである。本来の棺はさらに深かったのであろうが、棺の上端部は崩れていたものと思われる。棺底で

の規模は、長さ3.30m・南小口部幅1.12m・北小口部幅0.93mを測る。

このように、主体部2においては、墓墳底の南半分に置土をして嵩上げしていたこと、棺の規模において南小口部が北小口部より広いことから、被葬者の頭位は南を向けていたと考えられる。なお、このことは、「遺物出土状態」の項で後述する、ガラス玉などの頭部の位置を推定できる遺物の出土位置と合致している。

2. 遺物出土状態

①棺内の遺物

主体部2の棺内埋土を除去していく過程で、図13の棺内堆積土の縦断面図に示したように、第7層として、赤色顔料が混じる土の堆積を認めた。このレベルは検出し得た棺上端の直下にあたり、最終的に検出した棺底より約20cm程高い位置である。このような検出位置から考えれば、この赤色顔料は、本来棺蓋に塗布されていたものと考えられる。

また、この赤色顔料が棺の北半分においてのみ検出されたことについては、棺蓋の半分だけが赤く塗られていたと考えるよりも、おそらく棺蓋の崩壊の過程を物語っているものと思われる。つまり、本来は、棺蓋全体に赤色顔料が塗布されていたものが、棺蓋の南半分の崩壊は、部分的に進行していき、レベル差を持ちつつブロック的に棺蓋が崩壊したのに対して、南半分は一挙に面的に崩落したと考えれば、検出したような状態になるだろう。

さて、棺内の底には、中軸付近のやや南小口に寄った地点で、12.5×9.0cm程の狭い範囲に有機質に起因する黒色土を検出した。また、この黒色土のすぐ西側の、棺底の中軸上でガラス玉63個体(21-1~63)が出土した(図12・14)。ガラス玉は、一箇所に集中しているものの、不規則に散在しているものも多かった。しかし少なくとも16個体は緩やかな円弧を描いて並んだ状態で検出され、このことから副葬時には一連のものになっていたことが判る。多くのガラス玉は、径8mm前後から9mm程度のものであるが、(21-1)は径12mmを超えておりこれだけがやや大きい。その出土位置は、原位置を動かずに並んで検出された16個体の列に対向する位置にあたり、ガラス玉分布範囲の東西方向のほぼ中央に位置している。これらのガラス玉が首飾であれば、原位置を動かずに検出された玉の列は、仰臥状態の被葬者の首の下側に回された部分と考えられ、散らばっていた玉は、首の側面から上部にかけての部分に回されていたものが、身体および繋いでいた糸の腐朽のために、原位置を移動して散在的になったと考えられよう。そうであれば、やや径の大きい(21-1)は、連の中央にあって被葬者の喉付近を飾っていたと考えるに相応しい出土位置であるといえる。

ところで、このようなガラス玉の出土位置から、被葬者の頭位は南向きであったことが判る。そして、このガラス玉のすぐ東側に、前記の有機質起因の黒色土が見られたのである。ガラス玉の出土状態に関して上のようになるとすれば、この有機質とは被葬者の身体の一部であった可能性が高い。木棺内に土が流入する前の、まだ空間が保たれている段階であれば、例えば頭部などが

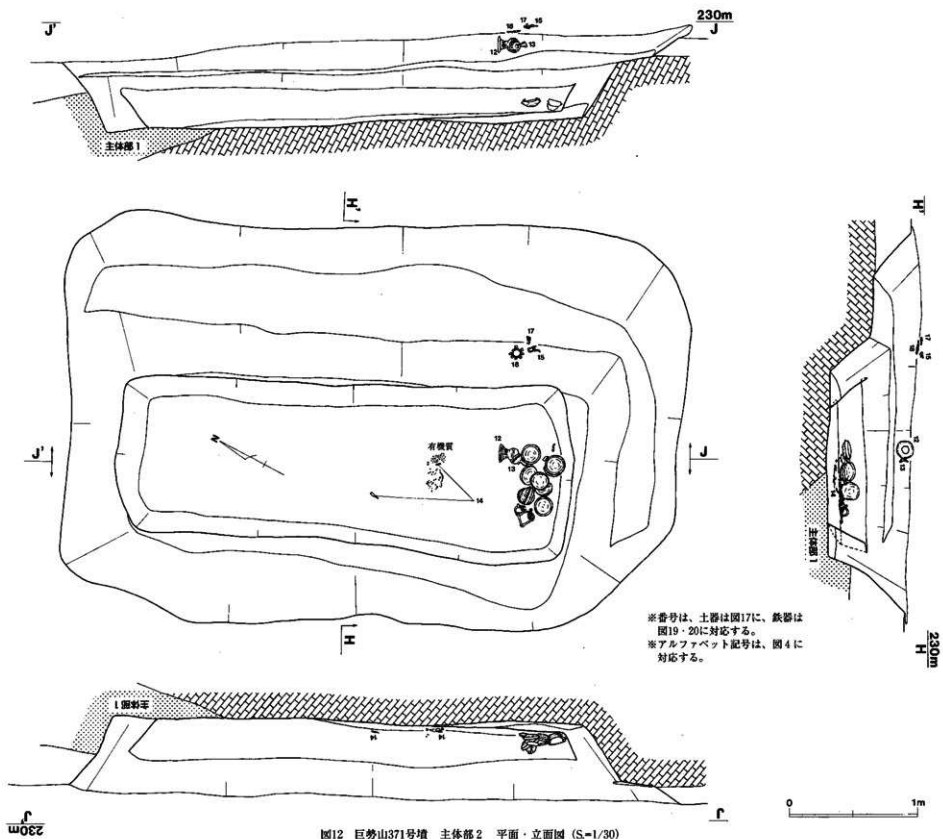
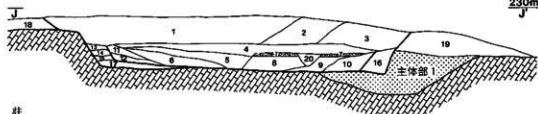


図12 巨勢山371号墳 主体部2 平面・立面図(S-1/30)

230m



註

- | | | |
|---------------------|-------------|-------------|
| 1. 暗黄灰色砂質土 | 8. 明黄灰色砂礫 | 15. 暗赤褐色粘質土 |
| 2. 黄褐色砂質土 | 9. 黄褐色砂質土 | 16. 暗赤褐色粘質土 |
| 3. 暗黄褐色砂礫 | 10. 暗赤褐色砂質土 | 17. 暗赤褐色砂礫 |
| 4. 暗黄褐色砂礫 | 11. 暗赤褐色砂質土 | 18. 赤褐色砂礫 |
| 5. 暗赤褐色砂礫 | 12. 黄灰色砂質土 | 19. 赤褐色砂礫 |
| 6. 黄褐色砂質土 | 13. 暗黄褐色粘質土 | 20. 暗赤褐色砂礫 |
| 7. 赤灰色砂質土
(赤色顔料) | 14. 暗褐色粘質土 | |
- 墳丘盛土

0 2m

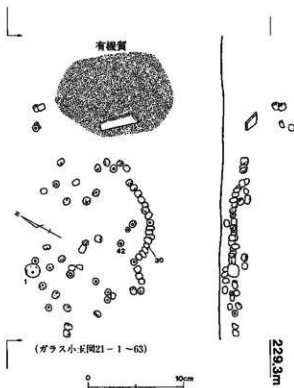
図13 巨勢山371号墳 主体部2 縦断面図 (S=1/50)

僅かに転がって移動した可能性も考えられよう。

この黒色土の近辺からは、刀子 (19-14) も出土した (図12・14)。ただし、黒色土の近辺で出土したものは刃部の破片である。ここから北に約60cm離れた地点で茎部を含む破片が出土した。この2片は、現状では接点を持っておらず接合ができない。分量や状態から本来は同一個体であると判断したものである。ガラス玉の出土位置を被葬者の首付近とすると、刀子の茎部の破片は、被葬者の左腰付近に置かれたと想定できる。しかし、それがなぜ破片になっており、別の破片は頭部付近から出土するのだろうか。2片に分かれた刀子の破片が元は同一個体であったとの理解が正しいとすれば、副葬に際して意識的に刀子を2片に分ち、それぞれを被葬者の腰付近と頭部付近に置いたとも考えられるが、実態は定かではない。

棺内の遺物は、このほか、南小口、すなわち被葬者の頭部側の小口に置かれた須恵器蓋杯 (16-1~11) と馬具 (18-1・19-2~13) があつた。

須恵器蓋杯は、杯蓋5個体・杯身6個



(ガラス小玉同21-1-63)

図14 巨勢山371号墳 主体部2 遺物出土状態1 (S=1/4)

体が一箇所に集めて置かれていた。「出土遺物」の項で述べるように、それらを個別に見ると本来セットとして製作されたと考えられるものもあるが、杯蓋(16-5)と杯身(16-6)以外は、蓋と身の区別にかかわらず内面を上に向けて置かれていた。杯蓋(16-5)と杯身(16-6)は、身に蓋が被られた状態になっており、しかも立位状態になっていて、(15-8)に入り込んで止まっていた。当初、このような不自然な出土状態から、これらの土器は本来は棺外遺物で土砂の流入と共に棺内に流れ込んだ可能性も考えたが、これらの土器が基本的に棺底で検出されたことや、(16-5)と(16-6)自体も身と蓋が合わさった状態で、副葬後の大きな移動を考えることは困難である。ここでは、棺内小口部に折り重なるように置かれた蓋杯の最上位に置かれた(16-5)と(16-6)が、土砂の流入に押されて、または、後述するような下に置かれた有機質の馬具の腐朽によって安定を崩して倒れ込んだ結果として、出土状態のような立位になったと理解した。

これらの須恵器蓋杯の一群の西側に、鉄製素環鏡板付轡が置かれていた。また、図15下に示したように、須恵器蓋杯の一群を取り上げると、その下から辻金具や鉸具などの馬具類が出土した。これらの馬具は棺底に置かれていたもので、轡と辻金具・鉸具などは同一レベルでの出土である。

轡(18-1)は、鏡板に銜・引手・別造りの立間装着された状態で検出された。ただし立間に關しては腐朽が進行しており、痕跡が残っていたにすぎない。また、引手の先端には別造りの瓠形の引手壺が付けられていたがやはり遺存状態が良くなく、一方のそれは円環部分が傍らに遊離して出土した。轡は、銜の喰金で屈曲した状態で出土しており、小さく折りたたまれた状態で副葬されたい。

轡の東側に、12cm×7cm程の範囲に有機質に起因する黒色土の分布があり、この黒色土の上下に(19-9)～(19-12)の4個体の方形金具があった。(19-9)は黒色土の下側に検出されたもので、その他は黒色土の上側にあった。これらは、辻金具を構成する方形の脚金具とみられ、有機質は元は革ベルトであったと考えられるが、有機質の腐朽により原形が不明で、脚金具の使用の状態も判らなくなっている。

黒色土が分布する範囲の東側には辻金具(19-5～8)・鉸具(19-3)があり、それらから25～30cmの間隔を空けて、鉸具(19-2)が出土した。鉸具(19-2)は、多くを欠損していたが、これは副葬後の腐朽によるためと考えられる。

辻金具(19-5～8)や、鉸具(19-3)とその脚金具(19-4)は、元より共造りの製品ではないにも関わらず、互いに接した状態で出土した。このことは、これらが革ベルトなどの有機質のものに装着された状態で副葬されたことを示している。

これらの点を踏まえれば、ここに副葬された轡は、頭絡となる革ベルトに辻金具や鉸具が装着された状態であって、一部の有機質は黒色土と化して残存していたものと想定できる。やや離れて出土した(19-2)についても、出土遺物の項で述べるように、(19-3)と同工・同大の製品であったことが判るので、頭絡に2個の鉸具が用いられたと考えるのが妥当である。

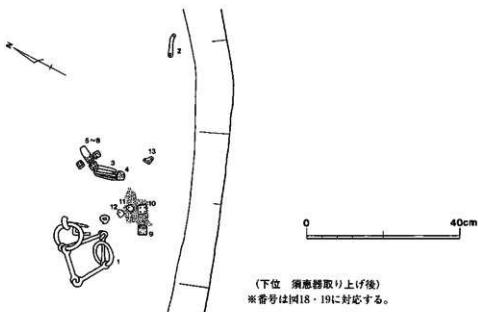
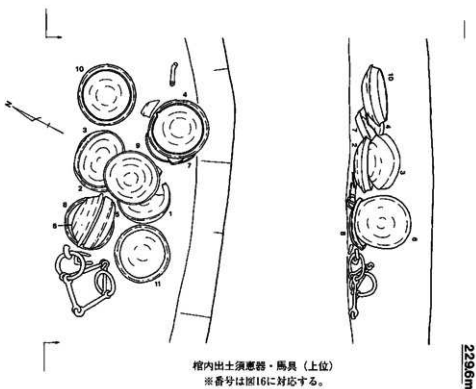


図15 巨勢山371号墳 主体部2 遺物出土状態2 (S=1/10)

②棺外の遺物

棺外遺物については図12に示したように、棺外遺物はすべて墓墳を完全に埋め戻した後に、その埋め戻し土の上面に置かれていたものである。また、図示したもの以外に、これらよりもレベルとしては上位の位置に、「位置と墳丘」の項で述べた須恵器甕（3-1・2）のほか、後述する高杯（17-14）が破砕された状態で置かれていたと考えられる。

須恵器甕（17-12）と高杯（17-13）は、棺の中軸線上にあたる地点に、口縁部を北に向けて横たえて置かれていた。甕は口縁部を僅かに欠損するもののほぼ完形である。高杯は口縁部と脚裾部の一部を欠損しているが、その破断面は比較的新しい。これらの土器が出土した位置は、現状では表土に近い地点であることから、このような欠損は比較的最近に生じた可能性が高い。すなわち、この2個体の土器がここに置かれた時は、共に完形品であったと考えられる。

土器についてはこれらの他、（17-14）として示した高杯脚部がある。この土器の出土状態は図示し得なかったが、棺内埋土に混じって出土したものである。（17-14）は、3片の破片を接合したもので、それでも裾部の1/3程にしかならない。しかし、土器の型式からは主体部2出土のその他の土器と併行すると考えられることから、単なる混入と言うよりは、墓墳埋め戻し後に、完形の土器とは別にこのように割られた状態の土器がその上面に蒔かれて、その後棺蓋の腐朽によって周辺の土と共に土器の破片が棺内に流入したと考えることもできる。棺内の別々の場所から出土した3片が接合したという事実もまた、このことを裏付けていると思われる。なお、このような扱われ方をした土器として、（3-1・2）の甕があることは既述のとおりであるが、この甕の破片は棺の内外を含め墓墳内からは出土しなかった。同様に墳丘上に蒔かれた土器であっても、主体部の直上とそうでない位置によって、このような差異が生じると理解できる。

次に、土器以外の遺物として、完形で出土した甕（17-12）・高杯（17-13）とほぼ同様のレベルでその東側の位置で出土した馬具の一塊があった。

図12には、鞍（20-15）・鉸具（20-17）・雲珠（20-18～29）の出土状態を示している。これらの馬具が出土したレベルは、上の2点の須恵器と同様にほぼ現表土に近い位置にあたり、これらの他、近接した地点で鉸具（20-16）が発掘調査開始直後に表土化した土層から出土した。その出土位置を図12の出土状態の図に記録し得なかったのは遺憾であるが、その位置やレベルから本来は、他の馬具と同様の位置に置かれていたと考えられる。

また、雲珠（20-18～29）は、円環部の周囲に、黄金具および方形ないしは爪形の脚金具が配置された状態で検出された。黄金具が少なくとも5個体分と脚金具7個体分が残っていた。元来は1個の脚金具に1個の黄金具がセットになって使用されたと考えられるが、自然の腐食によっていずれも元の個数を保っていない。脚金具は7個体が残存したが、円環の周囲には8個体分の脚金具が取り付けられる間隔で配列されていた。空白となる1個体分のスペースには、黄金具が残っていた。このことから、脚金具は元は8個体で使用されており、1個体分は、錆などによる劣化のために残

らなかったものと理解される。

そして、このような雲珠の出土状態は、この雲珠がここに置かれたときに円環部と脚部および貴金具が革ベルトなどの有機質によって繋がれていたことを示している。雲珠にベルトが装着されていたとすれば、その同じ場所に一對の鞍が出土しているので、その一端はこの鞍に繋がっていた可能性が高い。さらに鞍の存在から元は木製の鞍が存在したことが想定できるので、ここには、鞍から雲珠および尻繫の一式が連結された状態で置かれたと考えられる。

ところで、以上の墓壇埋土上面の遺物は、埋め戻された棺の中軸から東側に偏っていると言えることができる(図12)。

主体部2の墓壇は、「形状」の項で記したように、東側長側面に段が形成されている。墓壇のこのような状態は主体部1墓壇の西側の長側面と同様である。そして、先に主体部1の出土遺物が墓壇内棺外の西側辺付近に偏在していることについて、墓壇内のこの段と関係している可能性を考えた。つまり、墓壇内の段が、棺の埋葬を含む一連の葬送儀礼に必要なものであれば、そのときの参列者は、主体部1墓壇の西側にいたとも想定され、参列者のそのような立ち位置から、主体部1の副葬品は、棺の西側に偏在した可能性も考えられると理解した。

主体部2の、長側面の一方に段を伴うという形状と、出土遺物がその側に偏在するというあり方は主体部1に共通する。異なっているのは、主体部1の棺外遺物が、棺の埋め戻しの過程で数度にわたって取められたのに対して、主体部2の棺外遺物は、棺の埋め戻しが完全に終了してから一度に土器と馬具を置いていることである。

すなわち、主体部1の場合には、棺の埋め戻しの最初から最後まで、副葬品を取める行為が墓壇の西側から行われているので、西側にそのような行為を行った参列者がいたと想定したが、主体部2では、遺物の出土位置からだけではそのような想定をするにはやや無理がある。しかし、同じ古墳での主体部1と主体部2の関係であり、墓壇に段を有する形状とその段の方向に対応する遺物の偏在との共通点を重視すれば、主体部2の場合においても、墓壇に段がある東側に、埋葬行為を行った参列者がいたと理解するのは、あながち無稽なことではなからう。

3. 出土遺物

①土器

出土遺物のうち須恵器は、棺内出土のものと、元は棺上部に置かれたものがある。それらは出土地点ごとに図16と図17に分けて示した。これらの形態や調整・分量を始めとする詳細は、観察表(118～122頁)に記したので参照されたい。

図16に示した杯蓋・杯身は棺内小口部に一括して副葬されていたものである。すでに「遺物出土状態」の項で述べたように、身に蓋が被せられた状態であったものは、杯蓋(16-5)と杯身(16-6)のセットのみであった。その他は蓋と身の区別にかかわらず内面を上に向けて出土した。

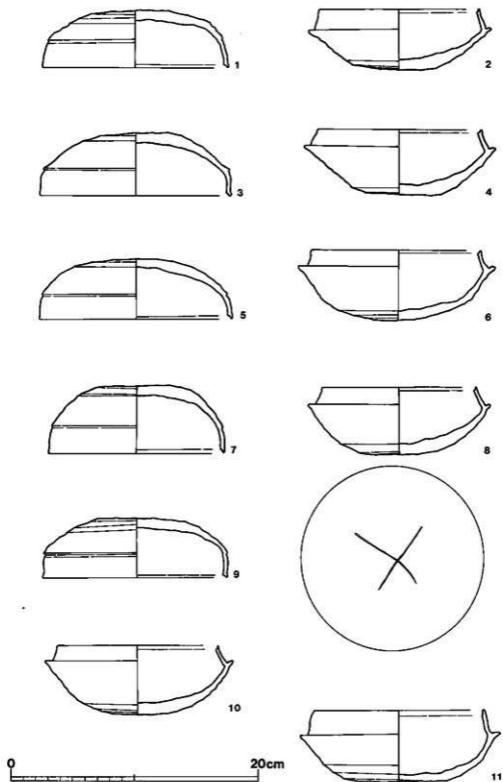


图16 巨势山371号墳 主体部2 棺内出土土器 (S=1/3)

この(16-5・6)は、焼成や胎土のあり方からみて、当初からセットとして制作されたものと考えられる。このような観点から本来セットで制作されたとみられるものは、(16-1・2)と(16-3・4)があるが、他のものはいずれと組み合わせてもうまく合わない。

さて、これらの蓋杯を見ると、端部の調整や形状は多少のパラエティーがあるものの、おおむね共通する。蓋杯は、口径14~15cm程度で口縁端部が面をなし端面の中央が凹線状に窪んでおり、天井部と口縁部の境界となる稜は僅かに突出するものが多い。ただし、(16-7)は、口縁端部は内面に段をなすタイプで、天井部と口縁部の境界も凹線に近い。全体の形状は天井の低いものが多いが、この(16-7)はむしろ丸みを持って膨らんでいる。

杯身は、比較的内傾するたちあがりで、その端部は面をなしているものが多い。全体の形状は、底部が狭いながらも平らなものが多いが、(16-6)・(16-8)・(16-10)は、丸く下方に膨らんだ感じがする。口縁部の形状および調整については(16-11)は例外的で、たちあがりやや内彎しつつ内上方にのび、端部は丸く内面に弱い段を有するものである。調整技法からすれば一見して異質な感じがするが、このことはこの土器の製作段階におけるロクロ回転方向にも対応している。土器の表面に見える砂粒の動きから判断したロクロ回転方向は、観察表に記したとおりであるが、ここでのロクロ回転方向は基本的に左廻りであるのに対して、(16-11)のみが右廻りである。

次に、図17に棺上部出土土器および棺内埋土に混じて出土した土器を掲げた。

盃(17-12)は体部径の割に頸部が太く短い。高杯(17-13)は杯部が口径の割に深く、脚部はやや長脚になって一段の方形スカシを4方に配置している。これら土器は棺の埋め戻しの最終段階に、棺上部にあたる位置に一部の馬具と共に置かれたものである。

高杯(17-14)は、棺埋土に混じて出土した。高杯の脚部の一部である。残存部分から短脚の高杯であったことが判る。脚部の3方にスカシを配置している。

棺の内外から出土したこれらの土器を須恵器編年に照らして考えれば、MT15型式期に併行しようが、特に棺内出土の蓋杯は先行する埋葬施設に伴った蓋杯との編年上の関係が問題になる。

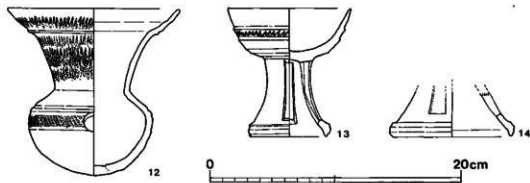


図17 巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土土器 (S.=1/3)

主体部1に伴って出土した土器については既述のとおりで、図10に示してある。主体部2出土土器との違いに注目して見ると、杯蓋は天井部と口縁部の境界の稜があまり突出しないで、口縁端部先端が丸く内面に段がある。杯身のたちあがり口縁端部が丸い。また製作時のロクロ回転方向は、主体部2出土の土器が左廻りが多かったのに対して、主体部1出土のそれはすべて右廻りである。

このような形態上の特徴を比較すると、主体部1出土土器の方が型的に後出するものであるかに見える。またロクロ回転方向は、漸次的とはいえ左廻りから右廻りに転換するとされており、この点からも主体部1出土土器の方が新しい要素を持っていることになる。しかし、発掘調査の結果からは主体部1と主体部2の層位的な先後関係は明らかで、主体部1が先行しているのは既述のとおりである。

ここで注目されるは、主体部2出土土器のうち、図16の蓋杯の中でもやや異質な感じがするとした(16-11)である。(16-11)は、口縁端部の形状などに他の土器より後出する要素を持っており、また、これのみが製作時のロクロ回転方向が右廻りであった。一般に一括資料中の最新の要素を持つ個体によって遺構の年代を考えるとすれば、この(16-11)を比較資料とするべきであろう。その場合には主体部1出土土器との間に型的な矛盾は生じない。

ただし、この場合は層位的な先後関係が実際の時間としてはどの程度の隔たりがあるのか不明である。ここでは、主体部2出土土器は、主体部1出土土器との層位的な関係から、MT15型式期の中でも比較的新しい段階に位置づける。しかし、例えば各土器の入手の時期が異なるとすれば、副葬時の層位は必ずしも製作の時期を反映しないことになる。また、ここでの土器細部の形状や調整の異同は、時期差よりもむしろ製作地ないしは工房・窯などの違いを反映する可能性も考えておかなければならない。

②馬具およびその他の鉄器

図18～20に、馬具を始めとする出土鉄器を出土地点ごとに配列して示した。図18・19は棺内出土遺物、図20は棺上の遺物である。以下、図に従って記述する。

(18-1)は素環鏡板付轡である。図17は、上半に阿素環鏡板付轡の現状を図化した。鏡板や銜・引手はそれぞれが連結された円環部分で屈曲しており、そのままの状態では錆着している。この図示状態は出土状態に一致し、木棺直葬の棺内で検出された本例の場合、ほぼ副葬時の状態と考えてよい。一方、同図下半に示したものは、これらを伸展した状態を復原図化したものである。

鏡板・銜・引手はそれぞれよく残っていたが、引手壺は部分的に欠損していた。また立間となって頭絡に繋がる何らかの金具が一方の鏡板に錆着していたが、断片が残るのみで全形が窺えない。なお、取り上げ後写真撮影に至る期間の間に銜の劣化が急速に進行し、図版に掲載した写真では、その銜部分で分離した状態になっている。

鏡板となる環状部の径は8.6～8.7cmで、ほぼ正円を呈する。環状部は、断面形が径1cmの円形の

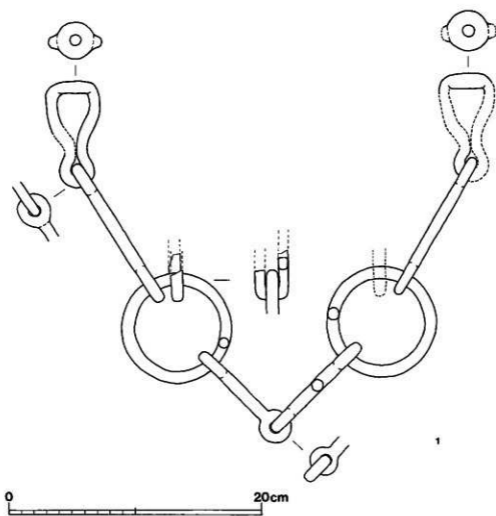


图18 巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具1 (S.-1/3)

鉄棒を曲げて円環を形づくっている。その際の鉄棒の緊ぎ目は肉眼では観察できない。このほかの部位で鍛接技法によるとみられる箇所はいずれも同様である。

銜は2連式である。銜の鉄棒の断面形は径1cmの円形で、噴金外径は2.3~2.6cm、銜先輪外径は2.5cmを測る。銜の、環状部を含めた全長は両者とも9.7cmである。銜先輪と噴金の方向について、図示状態で右側の銜は平行するが、左側の銜は直交するように取り付けられている。

引手の鉄棒の断面形は径0.9~1cmの円形で、その両端を円環とする。円環部を含めた全長は、図示状態右側が12.3cm、同左側が12.7cmを測る。引手壺は別造りの瓢形のそれが取り付けられている。引手壺は遺存状態があまり良くなく、図示状態右側のもは円環部分が傍らに遊離して検出された状態であった。比較的残りの良い図示状態左側のもで法量を記す。長さ8.5cm、最大幅4.4cmを測る。円環部は外径3cm、内径0.9cmである。

(19-2)・(19-3)は鉸具である。同工・同大のもので、いずれも外面全体に黒漆を塗布している。残存状況は、(19-2)は約1/4を欠損しており、器形に歪みもある。

U字形の輪金はその先端をやや薄く仕上げ、ここに別造りの鉄棒の両端を貫通させた後、その端を潰して固定している。刺金は、下端を折り曲げてこの基部となる横棒に巻き付けている。残存状態の良い(19-3)の法量を記す。長さ6.5cm、幅3.6cmを測る。輪金・刺金の断面形はいずれも円形で、輪金は径0.6cm、刺金は径0.5cmである。

(19-4)~(19-13)は、辻金具などの脚金具になる爪形板もしくは方形板である。

(19-4)は、他のものとは異なり、これのみが四隅のうち隣り合う二隅を丸く切り欠いて爪形になっている。また比較的鉄頭径の大きい鉄が3箇所被打たれ、外面は全体に黒漆が塗布されている。長さ2.1cm、幅2.3cm、鉄頭径0.7cmを測る。この脚金具は、鉸具(19-3)の基部に接して検出された。この出土状態から、この脚金具は、鉸具の基部に巻き付いて折り返され二重になった革ベルトを束ねて留める機能を担っていたと考えられる。(19-4)が他の脚金具と形状が異なるのは使用された部位の違いによるものである。

(19-5)~(19-8)は、出土状態から1セットの辻金具であることが判る。いずれも外面全体に黒漆が塗布されている。

(19-5)は形状が異なっている。全体が長細いが、図示状態下半の方形部と、上半の両隅を切り欠いた脚部に分けられる。この下半の方形部の周囲に、(19-6)~(19-8)の3個体が接して配置された状態で検出された。(19-5)は、長さ4.5cm、幅2.3cmを測る。他の3個体は長さ2.5cm、幅2.0cm程である。鉄頭径は0.5~0.7cm程になっている。

(19-9)~(19-13)はまた別の辻金具を構成するものであろう。ただし、その出土状態はばらばらで、元の使用状態を推定することはできない。(19-13)は外面に黒漆が塗布され、その他の4個体は鉄地板の上から金銅板を覆って装飾されている。金銅板は裏面に1mm程折り返して留められている。ただし、(19-9)には外面の金銅板の上に漆様の黒色物が付着している。これが漆であ

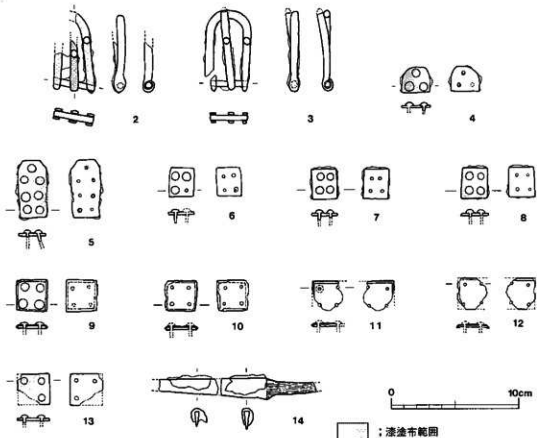


図19 巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具2・鉄器 (S=1/3)

るとすると、金銅板の上からさらに漆を塗っていることになり、特別な感じがする。出土状態を見ると、これらの脚金具の周囲には10cm程の狭い範囲に有機質起因の黑色土がみられた。(19-9)のみがこの黑色土の下で検出されていることから、ここに副葬時には漆塗りの有機質の物品が置かれており、これが腐朽する過程で、その漆が(19-9)に付着したと考えるのが妥当であろう。

法量は、必ずしも全体が残っていないものも多いが、それぞれ1辺2.5cm程の正方形を呈する。

(19-14)は刀子である。上記の馬具とは異なり、棺内の中軸付近で被葬者により近い位置で検出された。図示のように、刀身部と茎部に分かれており現状では接点を持っていない。その出土位置も約60cm程離れていたため、同一個体であることに疑いがないではないが、法量や状態から同一個体と判断した。

茎には把の木質が残存している。鬩の形状は斜鬩である。刃部最大幅は1.7cmを測り、鋒に向けて漸次細くなっている。刀身部には、外面に黒漆が塗布された鞘の痕跡が残っている。鞘の材質は有機質のものに見えるが、その物の劣化と外面の漆のために肉眼で観察しがたく、定かではない。

次に、図20として掲げた、棺上部出土のものについて記す。

(20-15)・(20-16)は鞍である。(20-16)は発掘調査開始直後に表土化した土層から出土したもので、その出土位置を図12の出土状態の図に記録し得なかったが、その位置やレベルから本

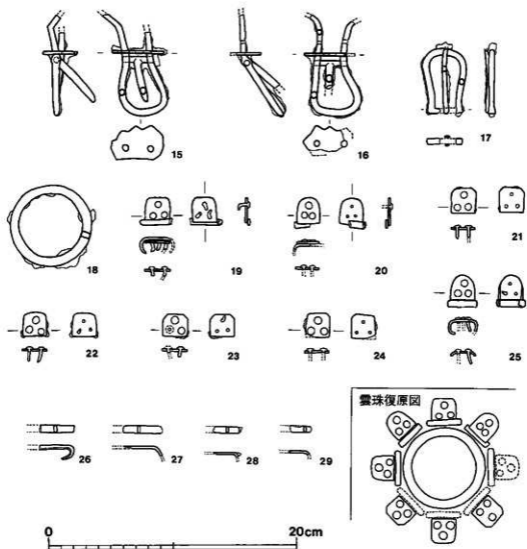


図20 巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土馬具 (S.-1/3)

来は、図20に示した他の馬具と同様の位置に置かれていたと考えられる。

これら2個体の鞍は同工・同大の製品である。共に脚部の一部を欠損しているが全体の構造を知るには十分である。

双方とも脚と輪金を一体造りにする。座金具を貫通した脚は、鞍の後輪などに打ち込まれ、先端を左右に曲げて固定するものである。脚には僅かながら木質が残っている。座金具から脚の屈曲点までの長さは、(20-15)で知ることができ、1.7cmを測る。この長さは鞍の後輪などの厚みに相当するとみられよう。輪金の形状は基本的にU字形であるが、頭部を曲げる際に側面にも丸みを持たせているので、長さの割に横幅の広いものになっている。輪金の断面形は径0.5cmの円形を呈する。

座金具は厚さ2mm程の鉄板である。下辺は直線的であるが、上辺を鋸歯状に切り取って装飾性を

持たせている。刺金はT字形である。輪金の幅が座金具付近で狭く、この部分に刺金の基部を差し込むことで固定される。

(20-17) は鉸具である。断面形が0.5cmの円形を呈する1本の鉄棒を曲げて、輪金および基部が造られている。ただし基部の多くを劣化のために欠損しており、基部と輪金側面との接合部の観察ができない。輪金の形状は、側面の中程で外側に屈曲し、上位が丸味をもっている。刺金は、輪金の基部を腐食によって欠損しているためにこれとは遊離していたものの、原位置を保って出土した。断面形は1辺3～4mmの方形を呈する。輪金への取り付けは明確ではないが、輪金の基部に刺金的一端を巻き付けたものと考えられる。

(20-18) ～ (20-29) は、雲珠の円環部分のおよび脚金具・貴金具である。鉄製で、金銅装や漆塗りなどの装飾は施されていない。いずれも1箇所出土し、出土状態からは元は革ベルトなどが装着された状態であったとみられることは、「遺物出土状態」の項でも既述した。

円環部は、外径が6.4～6.5cmのほぼ正円形をなす。断面形は長辺0.6cm、短辺0.4cmの方形を呈する。脚金具は7個体が残っているが、その平面形は一様ではない。ほぼ方形を呈する(20-19)・(20-22)・(20-24)、1辺を丸く仕上げた爪形を呈する(20-20)・(20-25)、外側の2隅を切り欠く(20-21)・(20-23)である。貴金具は、厚さ2mm、幅0.5cmを測り、両端を曲げて革ベルトなどを固定するものである。

さて図20右下に、これらの円環金具と脚金具・貴金具が組み合せて雲珠を構成している状態を復元的に図示した。もっとも当該遺物は、有機質の部分や金属部分でも劣化のために一部の脚金具などを失っていたが、基本的に使用時の状態もしくは革ベルトなどを装着した状態を保って出土した。復原図の作成にあたっては、その出土状態に即して作図したことは言うまでもない。

検出した脚金具は7個体で、貴金具は脚金具に鑄着するものを含めて少なくとも5個体がある。しかし、出土時において円環の周囲には、8個体分の脚金具が取り付けられる間隔で配列されていた。実際には7個体が遺存し、1個体分のスペースには、貴金具が残っていた。このことから、脚金具は元8個体が使用されており、1個体分は、鏽などによる劣化のために残らなかったものと理解した。復原図の、図示状態で中心頂部に位置するのは(20-19)で、右廻りに20～25までが配置されていた。

③ガラス玉

ガラス玉は、合計63個体を検出した。これらは元は棺内で1連になっており、被葬者の首元を飾っていたと考えられる。大きさは8mm前後から9mm程度のものが基本であるが、(21-1)は径12mmを超える。出土状態からも連の中央に位置したものと考えられる。

色調はいずれも紺色であるが、(21-30)・(21-42)は緑色を呈している。玉の穿孔は貫入法による。各個体の量法は、ノギスで計測した。計測値を表1にまとめる。

表1 巨勢山371号墳 主体部2出土 ガラス玉計測表

遺物番号	径(長径mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	遺物番号	径(長径mm)	厚み(mm)	孔径(mm)
(21-1)	12.22	10.75	1.75	(21-33)	8.20	6.20	2.15
(21-2)	8.65	6.40	2.10	(21-34)	7.25	5.10	1.65
(21-3)	8.70	6.75	2.35	(21-35)	7.85	6.45	1.80
(21-4)	9.25	7.25	2.15	(21-36)	7.70	6.00	1.55
(21-5)	-	6.50	2.00	(21-37)	7.80	6.65	2.20
(21-6)	8.55	6.45	2.25	(21-38)	7.40	5.50	1.80
(21-7)	8.65	6.70	2.00	(21-39)	7.40	6.40	1.75
(21-8)	8.55	6.25	1.85	(21-40)	7.45	5.45	2.15
(21-9)	8.65	5.60	2.30	(21-41)	5.75	4.40	1.50
(21-10)	8.35	6.05	1.40	(21-42)	6.85	4.20	2.05
(21-11)	8.45	6.15	2.15	(21-43)	8.00	7.45	1.15
(21-12)	8.55	5.70	2.20	(21-44)	8.20	5.05	2.10
(21-13)	7.90	5.45	1.95	(21-45)	8.35	5.40	1.95
(21-14)	8.15	6.65	1.95	(21-46)	8.40	5.25	2.40
(21-15)	8.80	4.90	2.65	(21-47)	8.10	5.20	2.35
(21-16)	7.85	5.35	2.15	(21-48)	8.10	7.35	2.40
(21-17)	7.90	5.85	2.20	(21-49)	9.10	6.20	2.80
(21-18)	8.10	6.20	2.10	(21-50)	10.00	6.50	2.30
(21-19)	8.10	4.80	2.20	(21-51)	8.35	5.40	2.00
(21-20)	7.75	5.05	2.25	(21-52)	8.85	6.25	2.10
(21-21)	7.75	6.20	1.95	(21-53)	9.55	5.10	4.00
(21-22)	7.45	4.90	2.10	(21-54)	7.70	6.55	1.80
(21-23)	7.50	4.25	2.30	(21-55)	9.20	5.05	2.10
(21-24)	8.35	4.30	2.25	(21-56)	8.50	6.25	2.15
(21-25)	7.60	3.80	2.10	(21-57)	8.20	6.45	2.35
(21-26)	7.80	3.90	2.50	(21-58)	9.00	6.30	2.30
(21-27)	8.25	5.30	1.95	(21-59)	8.10	6.45	2.55
(21-28)	7.80	4.55	1.95	(21-60)	8.10	7.00	2.00
(21-29)	8.55	5.50	1.85	(21-61)	9.20	5.10	2.30
(21-30)	6.90	5.65	1.95	(21-62)	8.50	6.50	2.50
(21-31)	7.55	4.95	1.60	(21-63)	8.25	5.50	2.60
(21-32)	7.95	4.80	2.05				

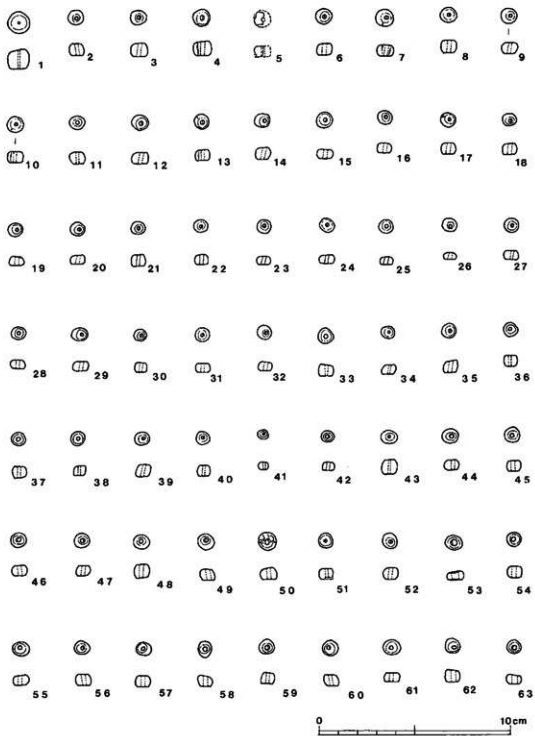


図21 巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土ガラス玉 (S.=1/2)

第3章 巨勢山407号墳

第1節 位置と墳丘

巨勢山371号墳が所在する地点から北西に延びる尾根上に、巨勢山407号墳・408号墳が所在する。図2に示したように、371号墳と407号墳の直線距離は30m程であるが、その比高差は15mもあって、この2古墳の間は地形的にも分断されている感がある。一方、407号墳と408号墳は、墳丘頂部間の直線距離はやはり30m程であるが、墳丘基底部での比高差がほとんどない。地形的にまとまったところに立地しており、一見していわゆる小支群の景観をなしている。

407号墳の墳丘は、東から西に急斜面となって下る尾根が、ひとたび緩やかな傾斜になる傾斜変換点に寄せて造られている。図23の断面図に示したように、東側に立ち上がる斜面は、その下端をカットして、明確に墳丘の区画を行っている。この墳丘の区画ないし墳丘端に関しては、407号墳が立地する地点の尾根も、その南北すなわち谷側に向けて土砂の流出が著しく、古墳の墳形も判り難くなっている部分が多い。しかし、このカット面の下端の形状や、それに対応する部分の墳丘裾部の形状を見れば、407号墳が円墳であることが判る。

図22の墳丘測量図にも示したように、東側のカット面の下端に沿って幅70~80cmの平坦面があり、これを扶んで西側が墳丘の立ち上がりになる。この東側墳丘端の高さは標高215.75m付近である。一方、古墳の西側の墳丘端は、215.50~215.75付近でコンターラインの間隔が急に広がって

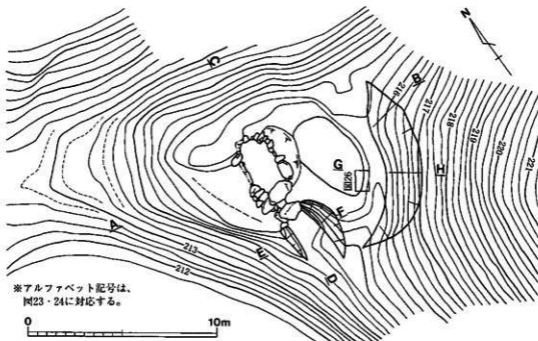


図22 巨勢山407号墳 墳丘 測量図 (S.=1/200)

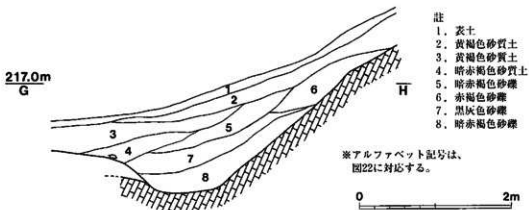


図23 巨勢山407号墳 東側周溝 断面図 (S₁=1/50)

いる地点とみられる。これらの位置を基準にすれば、本墳は、直径13mの円墳であることが判る。

墳丘は、東側の斜面下端を含めて地山を削りだして成形した後、墓壇を穿って、そこに横穴式石室を構築しつつ、盛土によってこの石室を多い隠すようにして築造されるものである。盛土が墳丘内外のいずれの方から先に積まれるかとの規則性はあまり明確ではない。墓壇の高さまでが埋め戻された後は、石室石材の高さにしたがって墳丘も積まれていったのであろう。

巨勢山407号墳の築造時期は、後述する東側周溝層部付近で原位置を保った状態で検出した須恵器の一群やその他の遺物から、MT15型式期であると考えられる。

第2節 横穴式石室

巨勢山407号墳の主体部は、右片袖の横穴式石室である。石室の開口方向は、主軸をN-10度-Eと東にやや振るが、おおよそ南向きである。羨道部も含めて石室の構築に用いられた石材の石種は、いわゆる花崗岩で、周辺古墳群でみられる横穴式石室に用いられる石材として、一般的かつ普遍的なものである。採用された石材は、丸味を持った自然石に近いものが多く用いられている。

石室内は盗掘などの攪乱を被り、玄室中央の大部分では、その攪乱が床面下におよび初葬面の多くを失っていた。しかし、奥壁から1m弱の範囲に盗掘などの攪乱の及んでいない箇所があった。この部分の初葬床面によって、奥壁側から玄室中央部の方向に傾斜する土層の堆積（図24-10層）があり、この層の上面付近で土器が多く出土した。それらは古墳築造時のものに比べると一見して新しいものであるので、この面に追葬面を認めることができる。なお、この10層が玄室中央部に向けて傾斜するのは、同層を形成した土が奥壁側から流れ込んだことを示している。天井部付近に比較的早い段階で隙間が生じて土砂の流入があったと考えられる。

玄室の石材についてはその上部を失っており、右側壁の中央付近は特に残存状況が悪かった。しかし、一方で、天井石は羨道部に、玄室前壁になる1石のほかもう1石の計2石が残っていた。また、このような天井石のレベルからみれば、奥壁についてはほぼ元の天井石付近までが残存してい

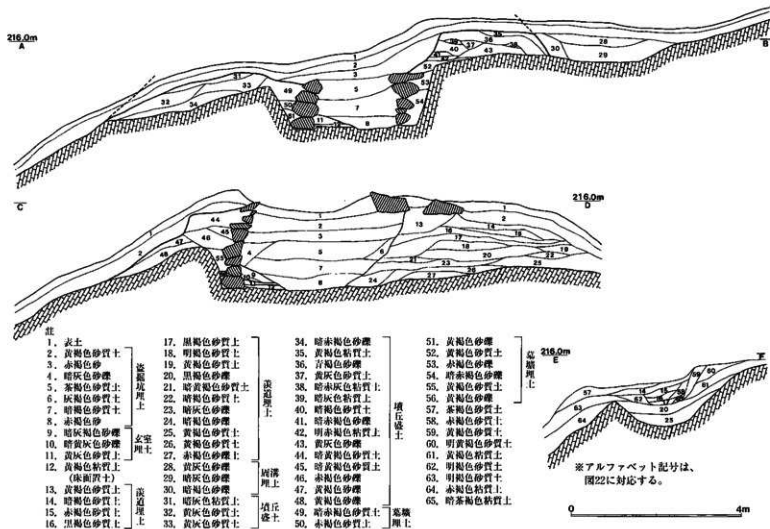


図24 巨勢山407号墳 墳丘・横穴式石室 断面図 (S=1/90)

たと思われる。近代以降も石材を求めての掘削が盛んであった巨勢山内墳群にあっては、後述する巨勢山408号墳と共に、石室の残存状況がかなり良好な事例と言える。

また、羨道部の前面では、墳丘をU字形に掘り込んだ墓道上の前庭部が比較的良好な状態で検出されたことから、羨道についても大きな掘削や破壊は及んでいないとみられる。羨道の構造は、後述するように石積みが簡易で、もろく崩れ易いために先端部分の幾らかは自然崩壊している可能性があるが、壁面から遊離して崩落した状態で出土した石材はほとんどなかったことから、やはり、現況が石室構築時の状態にかなり近いものと思われる。比較的大振りの安定した石材を羨道の基底石に用いた左側壁の残存部分を基準にすると、羨道を含めた石室の全長は5.62mとなる。

なお、407号墳の初葬に用いられた棺は、石室内の掘削層などから、多くの鉄釘が出土していることから、組合せ式木棺であったと考えられる。

1. 墓塚

墓塚は、地山面から掘り込まれていた。墓塚の平面形は、石室の平面形状と同様におおよそ矩形を呈している。その幅は、奥壁部付近の上端間が最も広く4.3mを測り、玄門部付近では4.0mとなる。羨道部分は幅約2.5mと狭くなっている。墓塚の掘方は、羨道の前面にある前庭部の掘方に繋がっている。深さは、奥壁部で1.1m、玄室中央付近では東側で1.45m、西側で1.0mである。

墓塚法面の傾斜角度は、比較的に急で上端から下端まで直線的に掘られている。玄室石材の後ろ側から墓塚斜面までの距離は狭く、下端部では、石材の背面が墓塚の斜面に当たっている状態がほとんどであった。すなわち、特に石室の下半については石室の内側から石材を積み、その後、裏込めの土を墓塚内に埋め戻したものである。なお、裏込めは土のみを用いており、石材はなかった。

また、石室基底石を据えるための据え付け穴は、6～8cmと浅いものであったが、ほとんどの箇所でも認められた。

2. 玄室

玄室の床面の規模は、長さ3.48m、奥壁幅1.78m、最大幅1.95m、玄門部幅1.80mを測る。玄室の中央付近がやや膨らむ胴張り形を呈している。玄室部分は天井石が失われていたので、玄室の高さは厳密には不詳である。しかし、奥壁から左側壁にかけての部分に残っていた石材の最高所の標高が216.0m付近になり、一方、玄室前壁になる石材の最高所の標高が216.2m付近になることから、この前後に天井石の下端が位置していた可能性が高い。また、後述するように奥壁の現状での最上位付近では、それより下位の石材に比べてより小さな石を用いており、天井石までのレベルを調節しているとみられることから、かつて天井石がこの付近に架橋されていたと考えられる。そうであれば、床面からの玄室の高さは、2.1m程になる。

玄室各壁の構築順序は、石積みの各段によってコーナー部分の噛み合わせが異なっている場合も

多く判然としない。基底石の状況に関しては、奥壁の位置を決めた後、左右の側壁の基底石を置いている。袖石の基底石は右側壁の側面に当てられていることから、袖石の位置は右側壁に合わせて決められたことが判る。

床面の構造は、墓竈に石室石材の据え付け穴を設置後、石室基底石を配置し、おそらく石室の構築が完了した後に、2～3cmの厚みで黄褐色粘質土を敷いて支室の床面を形成している。なお、この土は羨道部には認められなかった。

また、支室床面の中央付近は攪乱されていたが、残存部分から床面のレベルはほぼ一定していたとみられる。ただし、羨道部分から羨門部を経て前面の墓道に至るまでは緩やかな傾斜になって、標高を上げている。このことは、石室内への雨水などの流入をまねくことになるが、この対策としての排水溝などの特別な施設は、まったく設けられていなかった。

奥壁・側壁の石積みについては、各壁に用いられた石材は大小があり、縦方向の長さも一律ではないため、各段の横方向のラインは必ずしも通っていない。各段でこれを辿っていくと高低差があって、同じ壁面内でも上段のラインが下段のラインに収束していく箇所も少なくない。このため、各壁の石積みは何段で積んでいるとの表現ができない状態である。

ただし奥壁と両側壁のコーナー部分については、右側壁とのコーナーでは両者の各段の高さが比較的良好に合致し、両壁の高さを揃えながら一連の工程として構築していったことが窺える。しかし、一方の左側壁とのコーナーではそのような各段の高さの調節が明確ではない。

このコーナー部分では石積みの上半部で、奥壁と側壁の両者に共有するように架けられている石材が観察された。奥壁は、このような石材の積み方をしている箇所より上位を明確に持ち送っているため、支室内の、特に奥壁付近の景観は上半と下半に二分されている。また上半部は奥壁と両側壁のコーナーが明確でなくなり、この付近に限っては竊窿式に近い外観を呈していたと思われる。

次に各部位ごとに石積みの特徴を記述する。

①奥壁

奥壁に使用された石材は、大きいものは横50cm・縦40cm程度、小さいものは横25cm・縦20cm程度以下の大きさである。さらに極小のものは、石材の間に噛み合わせて隙間を埋めるのに使われている。主として使われる石材に大小があることは、石積みの各段の高さが揃わない結果になっている。ただし全体としてはより大きい石材を下位に用いる傾向があるらしい。

石積みは基底石から4段目までをほぼ直立に立ち上げて、5段目から上位を持ち送って前方にせり出すように積んでいる。すなわち奥壁の構築はこの直立した下位と、持ち送りした上位の2段階に分かれている。また、奥壁と両側壁のコーナー部分について、この上半部では石材が両壁に共有するように架けられていた。右側壁とのコーナーでは4段目から上位が、左側壁とのコーナーでは5段目から上位が、それぞれの側壁と共有されている。

残存していた最上位付近の石材は、さらに小形のものを用いられている。このような小形の石は、

天井石までの高さを調節する目的で用いられたとみられるので、天井石に接していた石材などは転落しているのであろうが、元の奥壁の高さは最上位より極端に高いとは思えない。また、この高さは、残存した玄室前壁となる石材の最高所の位置ともおおよそ合致するものである。

②右側壁

右側壁に用いられた石材は、奥壁や左側壁に用いられたそれに比べて、一見して大振りなものが多い。しかし、やはり奥壁と同様に、石材の大きさには大小があつて、大きいものは横80cm・縦50cm程度、小さいものは横30cm・縦20cm程度以下の大きさである。これらの石材を適時組合せながら積んでいくため、奥壁付近と袖石付近では同じ高さでも石積みの段の数が異なっているが、注目されるのは、奥壁付近の4段目上面と袖石付近の3段目の上面がほぼ同一のレベルになるように調整されていることである。この高さは、奥壁の、直立して立ち上がる下半部の上面の高さとほぼ一致している。つまり、奥壁の構築に際しては、下半部と上半部の2段階に分かれることを想定したが、右側壁の構築においても、この作業工程の単位に連動していたとみられる。

ただし、奥壁の状況と異なるのは、壁面の持ち送りのあり方である。すなわち、図25のc-d断面図や天井方向の見上げ図に示したように、右側壁の石積みは基底石の上ののせた2段目から上位を持ち送っている。このような石積みの方法は、次に記述する左側壁の状況ともやや異なっている。

③左側壁

左側壁に使用された石材に大小があることは、奥壁や右側壁と同様である。

左側壁の石材使用法として特徴的なこととして、右側壁の袖石に対応する箇所、横85cm・縦50cm前後・縦50cm程度の一際大きな石材を使っていることがあげられる。このような石材を3段に積み、この上に横70cm・縦25cmのやや小形の石材を積んで、袖石と同様に4段積みとして玄室の前壁となる天井石を支えている。

この箇所から奥壁までの間は、横60cm・縦30cm程度の大きな石材と、横40cm・縦30cm程度以下の小さな石材を取り混ぜて積んでいるが、基底石には横60cm・縦40cm程度の相対的にやや大きい石材を使っている。ただし上位でも横方向に100cmを超える石材が使われているので、部位による石材の使い分けはここでも規則的ではない。

壁面の持ち送りは、残存部の下半では顕著ではない。床面から70cm程の高さはほぼ直立に立ち上げて、石積みの3段目ないし4段目より上位を持ち送っている。この状況は、基底石上の2段目から持ち送りを行っている右側壁の場合とは異なっている。一方、奥壁は下半を直立して立ち上げて上位を持ち送る構造になっているので、この点では奥壁と共通していると言える。しかし、奥壁の持ち送りの床面から110cm程の高さのところから行われるのに対して、左側壁は70cm程のやや低い位置から行われており、奥壁の石積みの作業単位と連動しているわけではない。むしろ右側壁と同様に、奥壁の場合より下位から持ち送りを行うことが意識されていたと思われる。

④袖部

袖部の基底石は、玄室側から見た場合には、まず幅20cm程の小さな石を右側壁に当てて置き、これに並べて幅70cm程の石材を置いている。基底の石の高さはこの2石で合わせたうえで2段目を積んでいる。2段目に用いられた石材は羨道側から見ると幅90cm程もあるやや大形のものであるが、断面形が三角形のものであるので、上面での水平を得るために、玄室側から見ると下側に2石を詰めて安定を図っていることが判る。この上に3段目・4段目を積んで、玄室の前壁となる天井石を支えている。3段目と4段目は基本的に1石で構成されるが、この間に生じた隙間は小さな割石を詰めて補っている。また、4段目は羨道側にせり出した状態で持ち送られている。

3. 羨道

羨道は、基底部での長さを見れば、右側は1.5m、左側は2.05mが残っており、天井石については、玄室の前壁となる1石のほか1石の計2石が構築された状態を検出した。

玄門部での羨道の床面幅は、1.14mである。石材の大きさは、右側壁の袖石および左側壁のそれに対応する石として用いられた石材より外側は、両壁とも玄室のそれよりも小振りな石材が使われている。ただし、羨道左側壁の基底石は、玄室の基底石を置く作業に引き続いて行われたらしく、大きさにほとんど差はない。しかし、この羨道左側壁を構成する石材は、右側壁に比べても特に小さいものが用いられている。一方の羨道右側壁の基底石は、袖石基底石の南に接して置かれた石材は、横方向にやや大きい袖石の2段目を支える構造になっているので、袖石基底石と同程度の大きさの石材が選ばれている。これより開口部側の2石は、基底石としてはかなり小さめの石で、据え付け穴も浅く不安定な感じがする。両側壁とも、基底石から上位は、人頭程度以下の石材を積んでいくが、天井石の安定を図るためであろうか、最上部付近で逆に大きな石材を使っていることが判る。羨道右側壁では横90cm・縦45cm程度の石材が、天井石の直下に用いられていた。

羨道部の石積みは、玄室のそれに比べると、小さい石材を使っているためか却って乱雑になっている。残存した石材のなかには上下の石材とうまく噛み合っておらず、上からの荷重が十分にかからない状態のものもあった。羨道部の先端部分の石材は、おそらくそのようなややもろく崩れやすい状態で、幾らかは自然崩壊したものもあったと思われる。しかし、この部分の埋土中に崩落した石材がほとんど出土しておらず、特に左側壁の基底石は比較的大きな石材が用いられていることから、現状の最も外側の基底石の位置が元の羨門部にほぼ一致すると考えられる。

なお、おそらく当初は羨道から前庭部にかけての地点が、石および土によって塞がれていたものと思われるが、この付近には閉塞施設の痕跡はまったく残っていないかった。

4. 前庭部

石室羨道部の前面で、羨道の幅とほぼ同様の幅でのびる、墓道上の前庭部を検出した。羨門部か

ら長さ3m以上を検出したが、石室の開口部方向にあたる墳丘の南側は、尾根自体が割れて崩落していたために、この前庭部の先端部分の構造などを知ることはできなかった。

この前庭部は、墳丘の外側にまで延びない石室入り口と墳丘端とを繋ぐもので、図24のE-F断面図に示したように、この部分の地山をU字形に掘り込んで切り通しにしたものである。前庭部の掘方の上端は、墓壙の掘方の上端に繋がっていることから、両者が一連の作業工程の中で掘られたと考えられ、したがって、前庭部のプランも古墳築造当初から考えられていたものと理解される。

第3節 遺物出土状態

巨勢山407号墳出土遺物は、石室内出土遺物と石室外出土遺物に分けられる。石室外出土遺物はさらに、東側周溝肩部付近で原位置を保った状態で検出した須恵器の一群のほか、周溝埋土出土のもの、石室内から掻き出された土に混じって出土したものなどがある。一方の、石室内出土の遺物は、追葬面出土のもの、追葬面下の初葬面出土のもの、攪乱層出土のものがある。

これらの遺物には時期差がある。まず、古墳に関わる遺物には古墳築造時と追葬時のものがあり、またこれらとは別に古墳とは直接に関わらない時期のものがある。ここでは、各出土地点ごとではなく、時期別に各遺物の出土状態を記述する。

1. 古墳築造時の遺物

古墳築造時の遺物とみられるものうち、原位置を移動していないものとして、東側周溝肩部付近(図22)出土の須恵器の一群がある。その詳細な出土状況は図26に示した。5個体の杯身が出土し、そのうち4個体は口縁部を下に向けて伏せられた状態であった。北から(28-2)・(28-3)・(28-4)が並べ置かれ、約20cmの間隔を空けて、(28-1)・(28-5)が置かれていた。(28-5)のみが口縁部を上に向けて出土した。このような出土状態や、これらの土器がまったく破損していない状況から、原位置を移動していないと判断したものである。

ところで、本墳から直線距離で約750m離れた巨勢山71号墳(4支群16号墳)では墳丘裾部に須恵器の杯身5個体が口縁部を下に向けて置かれていたことが、報告されている(田中1984)。概報であ

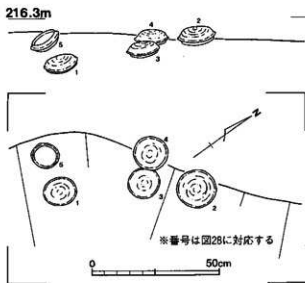


図26 巨勢山407号墳 墳丘 遺物出土状態 (S-1/15)

るために詳細な出土位置についてはわかりにくい。墳丘裾部との記載から、巨勢山407号墳とはやや出土位置が異なるようである。また、巨勢山407号墳の場合は、5個体のうち1個体は口縁部を上に向けて置かれていたことも異なっている。しかし、須恵器杯身5個体を、墳丘の一角におおよそ伏せて並べ置くととの出土状態は、酷似しているといえよう。また、この巨勢山71号墳の横穴式石室は、巨勢山407号墳や後述する408号墳の横穴式石室と石室構造の諸特徴が類似し、同一の「石室系譜の一群」であるとの指摘がある（永井2002）ことも興味深い。

墳丘の一角に置かれた須恵器のあり方が、墳丘上で行われた祭祀行為を示すとすれば、71号墳と407号墳では、同様の祭祀行為が執行されたことを示している。しかも、その2古墳に採用された横穴式石室の特徴が類似することは、これらの古墳を築いた集団が強い関係を有していたことを示唆していると考えられよう。

さて、以上の須恵器の一群のほか、古墳築造期にあたる遺物で、原位置を大きくは移動していないとみられるものに、初葬面出土遺物がある。

巨勢山407号墳の石室内は後の攪乱が著しく、床面も多くが元の状態を保っていなかったが、奥壁付近に僅かに追葬面が残り、その下層に初葬時の床面が残されていた。この部分で、追葬時までに堆積した土を除去したところ、当初の床面上で用途不明の鉄製品（36-5）と、銀製の、鋳飾金具とみられる（36-6）を検出した。残されていた初葬面は面積が狭いこともあって検出できた遺物はこれのみであるが、これらは、巨勢山407号墳においては、初葬に伴うことが層位的に確認できる数少ない遺物である。

なお、用途不明鉄製品（36-5）と同様の形態をなす（36-4）は、玄室内攪乱層である図24-7層から出土した。また、全体の形状は異なるが、「出土遺物」の項に述べるように構造が（36-5）とやや似る（36-2・3）は、（36-4）と同じく玄室内攪乱層である図24-7層から出土した。

初葬に伴うと考えられる遺物は、以上のほか原位置を移動した状態で検出されたものとして、東側周溝埋土出土のものと石室内の攪乱層出土のものがある。

東側周溝埋土出土のものとしては、須恵器広口壺（29-2）を掲げた。口縁部は完周して残存していたが、体部以下は欠損して破片すらも検出できなかった。元は墳丘上に置かれたものが周溝内に転落したものか、あるいは石室内から持ち出されて放置されたものか、出土状態からは判断しがたい。

石室内攪乱層出土のものは、須恵器杯蓋（29-1）のほか、図33-34の馬具・図35の鉄鎌・図36の耳環および不明鉄製品・図37-1-10の鉄釘があった。それぞれの出土層位などを記す。

須恵器杯蓋（29-1）は、図24-2層から出土した。玄室内攪乱層の比較的上位にあたる位置であった。

鉄製素環鏡板付轡（33-1）は、玄室内攪乱層図24-5層で検出した。素環の鏡板はいずれも完周しないで一部を欠損しているが、2個体の鏡板のうち一方には銜と引手が連結された状態で錆着

していた。しかし他方の素環鏡板は2片以上に分離していた。引手も同様に2片以上に分離して出土したが、これらは比較的まとまって出土し、破片となっていたものでも、その特徴的な形状から、この鏡板の一部であることは容易に判断できた。

図34に示した馬具のうち、雲珠(34-4)・黄金具(34-14)は図24-8層から出土した。玄室内の攪乱層にあたり、当初の床面に近い位置での出土である。その他は羨道部の攪乱層出土のものである。鞍(34-2)は図24-27層上面で、鉸具(34-16)は図24-26層で検出したほか、鞍(34-3)・脚金具または留金具(34-5・6・7・8・9・10)・黄金具(34-11・12・13)・鉸具(34-15)は、図24-23層で検出した。

図35には鉄鏃を示している。各々の出土層位は、玄室内攪乱土の図24-7層出土のものは(35-22)、図24-8層出土のものは(34-11・12)である。羨道部の攪乱層出土のものは、図24-23層は(35-1・6・9・14・15・18・24)、図24-26層は(35-2・3・4・5・7・8・13・20)、図24-27層上面で検出したものは(35-10・17・19・21・23)である。

図36の耳環(36-1)は玄室内攪乱層の最下層(図24-8層)から出土した。不明鉄製品(36-2・3・4)は、既述のように、図24-7層から出土した。

図37には鉄釘の実測図を掲げた。「出土遺物」の項で後述するように、鉄釘は身部の太さによって2種に大別される。身部の太い(37-1~10)が初葬棺に伴ったものと考えられる。これらは、玄室内の攪乱層にあたる、図24-7層を中心に出土した。攪乱層の比較的下位にあたる。また、これらの鉄釘の存在から、巨勢山407号墳においては組合せ式木棺が用いられたことが判る。

ところで、上記の馬具や鉄鏃のうち、羨道部の攪乱層から出土した状況を見ると、その出土層位は図24-23層以下の26・27層を中心としている。羨道部には、天井石に至るまで土砂が充填していたが、これらの出土位置は羨道床面に比較的近い、低い位置にあたっている。しかも、同工・同大で一对になる鞍(34-2)と(34-3)がやや離れた位置で、それぞれ27層上面と23層から出土していることから、23層以下は、土質の上では区別できるものの、ほぼ同時に堆積したとみられる。一方、玄室内の攪乱層からも鬘や雲珠が出土していることから、馬具は元は羨道部ではなく玄室内に副葬されたとみられる。このことを併せ考えると、羨道部攪乱層におけるこのような遺物の出土状況から、これらの遺物は、玄室内に多少の土砂の流入があったものの、未だ空間が保たれていた段階に、羨道側から進入した盗掘者によって、玄室内床面の土砂と共にこの位置に掻き出されたものと理解できるだろう。

2. 追葬時の遺物と追葬棺の配置

玄室の奥壁から1m弱の範囲に盗掘などの攪乱の及んでいない箇所があり、この部分の初葬床面によって、奥壁側から玄室中央部の方向に傾斜する追葬面を検出した。

図27に示したように、この追葬面上で2個の花崗岩の石を検出した。これらは東西方向に約

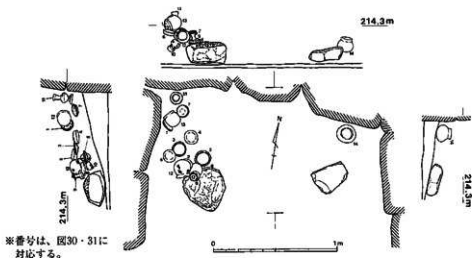


図27 巨勢山407号墳 追葬面 遺物出土状態 (S=1/30)

67cmの間隔を空けて並べ置かれているようであった。石の大きさは、東側のものは長さ約26cm・厚み約10cm、西側のものが長さ約33cm・厚み約15cmである。

出土土器は、この東西の石付近にそれぞれ偏った状態で出土した。東側には、奥壁に近い位置で、土師器壺(31-14)が1個体のみ出土した。図27の右側に立面図を示したように、口縁部を上に向けた状態で置かれており、傾斜がある床面のほぼ直上で検出されたものである。

これに対して、西側の石から倒壁および奥壁寄り、11個体の須恵器と2個体の土師器が一塊となって出土した。これらは、追葬面(図24-10層)に必ずしも接地しておらず、いずれもが5~10cm程度浮いた状態で検出された。奥壁側から、須恵器台付長頸壺(31-11)、同杯蓋(30-7)、土師器甕(31-13)、須恵器杯蓋(30-1)、同杯身(30-4)、同杯蓋(30-3)、同杯身(30-6)、同杯身(30-5)、同杯身(30-2)、土師器甕(31-12)、須恵器高杯(31-9)、同杯身(30-8)、同長頸壺(31-10)を検出した。これらのうち、須恵器杯身(30-8)は同高杯(31-9)の下位で検出され、土師器甕(31-12)・須恵器杯身(30-8)・同長頸壺(31-10)も、同じ地点で上下に重なるようにして出土した。また、土師器甕(31-12)と(31-13)や須恵器杯身(30-1)・同長頸壺(31-10)はいずれも横転した状態で出土した。さらに須恵器杯蓋(30-3・5・7)は口縁部を上に向け、同杯身(30-4)・同高杯(31-9)は口縁部を下に向けて、すなわち倒立した状態で出土した。

なお、これらの土器の一群には、須恵器杯蓋と杯身がそれぞれ4個体ずつの回数が含まれているが、出土状態では身に蓋が被せられたものはなかった。また、「出土遺物」の項で後述するように、それらの蓋杯は胎土・色調・焼成・法量から、4セットとして製作されたと考えられる。図30の図示状態で上下に配列したものがそのセットにあたるが、出土状態ではそれぞれが近辺に存在したのではなかった。このようなあり方から、製作時の蓋と身のセットが、副葬時にも意識されていたと

は思えない状況である。

次に、これらの土器のほか、追葬に伴うとみられる遺物に、鉄釘（37-11-18）がある。これらは、いずれも床面での検出ではなく、攪乱層出土のものである。多くは玄室内の攪乱層（図24-7層）から出土したが、（37-15）のみ羨道部の攪乱層（図24-23層）から出土した。このような出土層位は、前述した初葬棺に伴うとみられる鉄釘と同様である。したがってこれらが確実に追葬棺に伴うものであるとするには厳密さを欠いている。ここでは、身部の細い一群を、太い一群とは区別して、前者を追葬棺に、後者を初葬棺に伴うと考えたものである。しかし、攪乱の及んでいない、奥壁付近の追葬面上に1点の釘も出土しなかったことから、ここに安置された木棺が6枚の板材をこのような鉄釘で繋結した組合せ式木棺であったとは考えにくい。鉄釘（37-11-18）は、出土数の僅少さも併せ考えると、例えば蓋材を固定するためなど、補助的に使用されたものと考えたい。

さて、以上の状況から、この奥壁近辺に追葬棺が存在したことは疑いない。この場合、追葬棺は石室の軸に対してどのような配置をとったと想定できるだろうか。

今、奥壁付近で検出した2個の花崗岩石を棺台であったと考ええると、棺の長軸が石室の主軸に対して併行して置かれたと想定した場合、棺の幅は約1.5m程になる。南側の多くは攪乱によって破壊されていることになるが、この幅に見合う長辺の長さを3m弱程度とすると、玄室のほとんどを覆ってしまう大きさになる。初葬棺やそれに伴う副葬品がなお玄室内に存在したとすれば、この大きさは考えにくい。

そこで、棺の長辺を奥壁に沿わせて、棺の長軸を石室の主軸に対して直交して置かれたと考えよう。

奥壁付近には、土砂の自然流入によって形成された傾斜面（図24-10層）が、初葬面上層に形成されていた。この傾斜は、奥壁側から玄室中央の方向に向けて下がっているため、その低い側のみに2個の花崗岩石を置いて棺台とし、棺底の高さを調整したものと考えられる。

また、大きくは東西に分かれて出土した副葬品は、棺の両小口側に分け置かれていたことになり、その位置が被葬者の頭部側と足部側であったとみれば理解しやすい。この時、出土遺物のあり方に再度注目すると、東側の土師器壺（31-14）が追葬面にほぼ接地して正置された状態で出土したのに対して、西側の須恵器・土師器の一群は、追葬面よりやや浮いており、しかも横転ないしは倒立した状態で出土した土器も多かった点で、対照的な出土状態と言える。西側の須恵器・土師器の一群のこのような出土状態は、これらが棺蓋上に置かれた副葬品であって、棺の腐朽と共に崩落しつつも辛うじてこの位置に止まったものであったことを示している。一方、東側の土師器壺はこの位置に正置され、その後大きく原位置を移動していない状況である。

この時、この土師器壺は棺の内外のいずれに置かれたのであろうか。木棺の痕跡すら残っていない現状では、両者とも可能性が考えられるが、もし、小口部の棺外に置かれたとすると、棺の長軸の長さが最大でも135cm程しかないことになるため、成人を埋葬したとすれば小さい。棺内に置

かれたとすれば、棺長165cm程度が想定でき、棺の規模としてはこの方が相応しいであろう。

このようにこの土師器壺が棺内副葬であったと考えた場合、本来は土器の下面には棺材の厚み分の有機質が存在したことになるが、発掘調査では検出することができなかった。棺材の腐食が緩やかに進行した場合、土器を大きくは移動させることはなかったであろうし、また前述した身部の細い鉄釘が何らかの形でこの棺に使用されたとすれば、棺材の厚み自体が比較的薄いものであったのかもしれない。

次に棺の幅についてどのように考えることができるだろうか。これについては、先の棺台の位置が手掛かりになる。奥壁から玄室中央方向に向けて傾斜する追葬面の低い側に並べ置かれた2個の棺台が、棺底の高さを調節する機能を有していたとすれば、棺の南端はこの石の位置より大きく南になることはないだろう。棺上に置かれた土器の出土位置も併せ考えると、棺の幅は約90cmを想定することができる。

すなわち、追葬面に置かれた棺は、長さ165cm程度、幅90cm程のものが、奥壁に長辺を沿わせるようにして、石室の主軸とは直交して置かれていたと考えることができる。

また、被葬者の頭位については不明であるが、棺内の土師器壺が被葬者の頭部付近に置かれたとすれば、東向きになる。この場合、成人が埋葬されたとすれば、棺の内法も勘案すると、土師器壺は、仰臥状態の被葬者の頭部右側付近に置かれたことになろう。

ところで、一般に追葬棺は、初葬棺が玄室内の一方に偏っている場合には空いたスペースに、玄室の中央付近に置かれた場合には玄室の玄門付近か、羨道部などの入り口に近い位置に安置されるのが通例であろう。しかし、本例の場合には、上記のように奥壁に接するように追葬棺が置かれていたと想定できる点で、やや特異な感を受ける。

ただ、本例の場合には追葬と言っても、「出土遺物」の項で後述するように初葬の時期がMT15型式期に併行するとみられ、一方の追葬面出土土器が飛鳥Ⅰ期（西1986、以下須恵器の「飛鳥編年」に関しては同書による）に併行するので、その間に実年代では約100年程の時間差があることになる。この間に、玄室内に当初置かれた木棺の腐朽がある程度以上進行していたとも考えられる。追葬棺が奥壁付近に置かれたのは、追葬の時点において玄室内を通過して棺を搬入することにさほど支障がなかったと理解されよう。

3. 古墳に関わらない遺物

古墳には直接関わらない遺物が、石室の内外から出土している。図32にそれらの実測図を掲げた。須恵器水瓶（32-1）は石室内の攪乱層（図24-7層）から出土した。玄室の攪乱層としては比較的下位にあたる。奈良時代前半期のものとみられる。

大形の土師器皿（32-2）・（32-3）は東側周溝埋土から出土した。図24-28層にあたり、周溝の埋土の最上層である。土師皿の編年的な位置づけは難しいが、10~11世紀頃のものであろうか。

これらの遺物の所属時期は、本墳に対して行われた盗掘の時期の一端を示しているかもしれない。特に、(32-1) は玄室内にあまり土が入っていない時期に混入したものであることから、最初の盗掘がこの時期に行われた可能性がある。いずれにせよ、本墳周辺は、古代以来近・現代に至るまで山地の利用が盛んな場所で、この巨勢山407号墳もまた、たびたび盗掘や乱掘の災禍を被ってきたものと思われる。

第4節 出土遺物

1. 土器

巨勢山407号墳から出土した土器を、図28～31に掲げた。これらの形態や調整・法量を始めとす

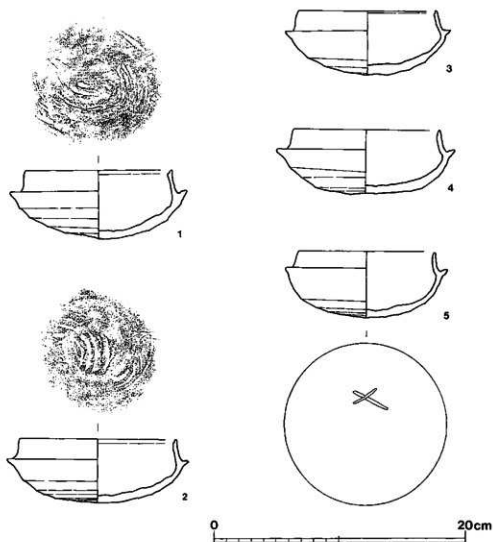


図28 巨勢山407号墳 墳丘 出土土器 (S.=1/3)

る詳細は、観察表（123～128頁）に記したので参照されたい。

図28に示したものは、東側周溝の肩部に並べ置かれた状態で検出した須恵器杯身である。

口縁端部に注目して見ると、内傾する面をなす（28-1）のほか内面に段を持つ（28-2）・（28-3）や、端部が丸く収められる（28-4）・（28-5）があって一様ではない。全体のプロポーションは、底部が平らになる（28-4）などがあるが、扁平な感じがせず底部が丸く仕上げられているものが多い。

これらの土器は、MT15型式に該当しようが、口径が11cm前後のものを含んでいる点や、底部の、やや丸く膨らんだ傾向から、そのうちでも古い段階に位置づけられよう。また、この時期は、これらの土器の上記のような出土状態から、古墳の築造期を示しているものと考えられる。

図29に示したものは、石室内攪乱土出土の（29-1）と東周溝埋土出土の（29-2）である。いずれも原位置を保ったものではないが、杯蓋（29-1）はMT15型式に該当することから、東周溝肩部で検出した土器と同様に、古墳築造期の土器と考えられる。（29-2）の広口壺は、詳細な時期の特定が難しい器種であるが、やはりそれらと同時期と考えて矛盾はない。

図30・31には追葬面でも出土した土器を掲げた。「遺物出土状態」の項で既述したように、埋葬時の状態からすれば木棺の腐朽などによって多少の移動があるかもしれないが、攪乱を受けたものではない。すなわち、これらの土器はほぼ原位置を保って出土した一括資料と見なし得るものである。

器種の構成をみると、須恵器は、蓋杯（30-1～8）・高杯（31-9）・長頸壺（31-10）・台付長頸壺（31-11）があり、土師器は、甕（31-12・13）・壺（31-14）である。

蓋杯（30-1～8）は身に蓋が被せられた状態で検出されたのではない。しかし、これら各4個体の蓋杯は、胎土および色調や焼成のあり方から、4セットとして製作されたと考えられる。図30の図示状態で上下に配列したものが、そのセットにあたる。それらは、口縁部に焼成前の歪みが生じていない場合には、口径も合致する。そして、このように胎土・色調・焼成・法量を基準にして突き合わせてみると、図示したようにヘラ記号も蓋と身で合致する。（30-1・2）と（30-3・4）はいずれも鋸歯文状のヘラ記号が施されている。（30-5・6）と（30-7・8）のヘラ記号は直線文を不規則に重ねているという点で共通している。もっとも、最終的に描かれた記号の形状は、全く異なっており、これが同じ記号であるとするには多少の躊躇がないではない。しかし、こ

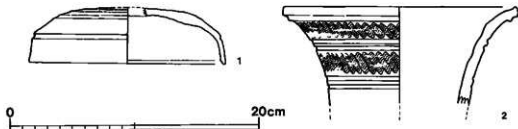


図29 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土土器 (S.=1/3)

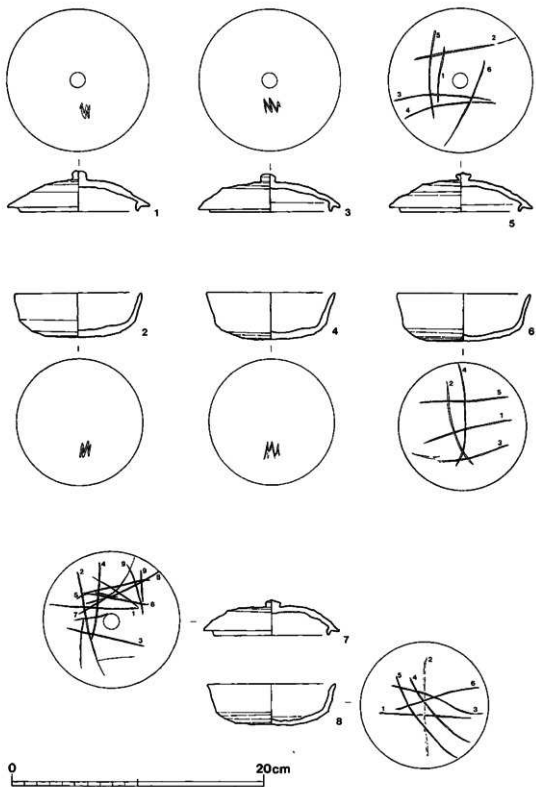


图30 巨势山407号墳 石室内 追葬面出土土器1 (S=1/3)

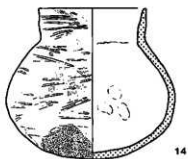
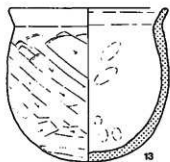
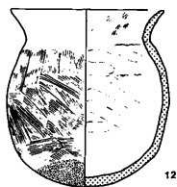
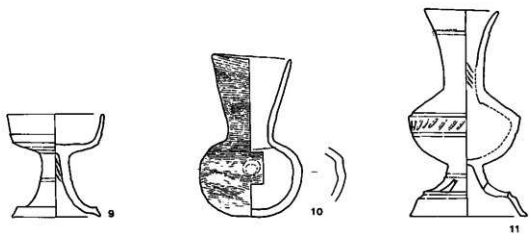


图31 巨势山407号墳 石室内 追葬面出土土器2 (S.-1/3)

ここでは一括資料中の土器であって、胎土・色調・焼成・法量の点で一致する蓋と身であることから、むしろこのような一見して別の記号のように見えるものでも、製作者にとっては、例えば鋸歯文状の記号と同様に「ヘラ記号」としての意味を持ち得たものと理解したい。なお、(30-5~8)の直線文を重ねたヘラ記号に関して、その直線文の切り合い関係から、それが施された順番が一定程度復元できたので、図30の実測図に番号を振って示した。ただ、必ずしも切り合い関係がなくて順序は明確でない場合もあって、厳密には不正確な部分もあるが、一つの想定として提示した。

追葬面出土土器に関して、今一つ特筆するべきこととして長頸甕(31-10)がある。体部全体は丸く作るが、底部は径3cm程を平らにして、正置した時に傾かないようにしている。その体部の上半部に径1.0~1.3cmの円形の窪みがある。この位置は甕において穿孔される位置にあたるが、この場合は孔を開けていない。甕の円孔の器官痕跡ともみられるものである。

さて、図30・31の土器の所属時期を考えるには、言うまでもなく(30-1・3・5・7)の杯蓋に注目するのが妥当である。まず、(30-1)・(30-3)のつまみを見ると、その下端の径がつまみ中位にある最大径より小さくなってややくびれているものの、つまみ頂部が扁平で、宝珠形より乳頭形に近い。また、いずれの蓋も内面のかえりが口縁部よりも下端に突出している。

このような諸特徴は、飛鳥1期に該当するものである。そして、このことは、巨勢山407号墳の追葬の時期を示している。また、当該期の検出例が比較的に少ない土器器類などについては、一括資料として検出された出土状態から、編年的な考察をする際の一資料を提供し得たといえよう。

図32に示したものは、古墳とは直接には関係ないものである。

須恵器水瓶(32-1)は石室内の攪乱層(図24-7層)から出土した。頸部は比較的細く短い。口縁端部はヨコナデによって面を成している。体部は、その最大径を上半に持ち、体部高の割に最大径が大きいものである。高台は下方に突出した断面方形のもので、外脣に大きく張り出さない。このような形態の特徴から、奈良時代前半期のものとみられる。

(32-2)・(32-3)はいずれも口径15cm以上を測かる大形土師皿である。東周溝埋土(図24-28層)から出土した。口縁部を見ると、(32-2)は外反して外上方にのび端部は丸く収められているが、(32-3)はいわゆる「て」字状口縁を呈する。このような「て」字状口縁の土師皿は10~11世紀に多いとされる(松本編1988)。

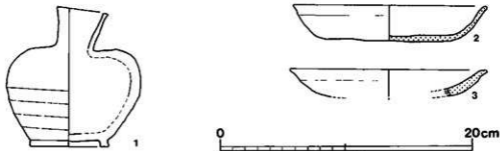


図32 巨勢山407号墳 石室内攪乱層・東周溝 出土土器 (S.1/3)

2. 馬具

図33の鉄製素環鏡板付轡は、石室内の攪乱層（図24-5層）から出土した。図33の上半には出土時の現状を示し、下半には、それを伸展し、また分離して出土したものを組み合わせた状態を復元的に図化したものを示した。

遺存状態は、原位置を大きく移動したもので必ずしも良好ではない。環状の鏡板は2個体とも完周しない。引手は一方は引手壺を失っており、他方の引手は分離して2片以上になり、接合面を持っていなかった。

轡の構造は、2連式銜の鉄製素環鏡板付轡で、銜先輪に、鏡板となる円環を通し、さらにこの輪に遊環を介さずに直接引手の先端の輪を連結させている。引手壺は、先端の円環を鉄棒に対して屈曲させて鍛接するいわゆる「く」字状引手である。

鏡板となる環状部の径は、長径9.4cm・短径約8cmの楕円形を呈する。環状部は断面形が長辺10mm・短辺6mmの方形を呈する鉄棒を曲げて円環を形づくるものである。

銜の鉄棒の断面形は径8mmの円形で、鉄棒のそれぞれの先端に円環を付けている。円環部の断面形は、腐食のために定かではないが円形ではなく方形を呈するとみられる。喰金外径は2.4~2.5cm、銜先輪外径は2.7cmを測る。銜の環状部を含めた全長は進展した図示状態左側が9.1cm・右側が9.3cmである。銜先輪と喰金の方向について、同左側の銜は平行するが、右側の銜は直交するように取り付けられている。

引手の鉄棒の断面形は長辺7mm・短辺5mmの方形で、その両端に円環がついている。円環部を含めた全長は不明であるが、残存部分から判断すれば18~20cm程度かと思われる。

鞞(34-2)と(34-3)は、多少細部の寸法が異なるが、基本的に同工・同大の製品で一对になるものである。輪金は断面形が径5~6mmの円形の鉄棒を丸く曲げて作られている。輪金から屈曲させた基部はやや厚みが薄くなっている。表面の錆化のために観察が難しいが、ここにT字形の刺金の横棒が貫通するらしい。刺金の固定は、回転方向の動きが可能な程度の留め方であったはずである。輪金の基部には、このほかにもう1本の横棒が貫通して固定されている。この横棒に幅8~9mm、厚さ3mmの鉄板の一方の端を折り曲げて固定することで、脚金具としている。なお、脚金具に肉眼では木質などの痕跡は認められない。また、脚の先端の形状ないし構造は欠損して判らない。

伏鉢状の雲珠(34-4)は、やや特異な構造である。この雲珠は、上面から見たときに、平面形が直径8.7cmの円形である。中心部から直径5.8cmの部分半球形につくって鉢部とし、さらに外側には幅1.4~1.5cm程の平らな縁部がつくり出されている。この縁部に尻繫などとなる革ベルトなどを通して固定するための孔がある。穿孔は幅6mm・長さ13~16mmの方形で、これが鉢部の縁に沿って8方向にはほぼ均等に配置されている。このような穿孔を施した後、縁部の外周に沿わせて、幅8

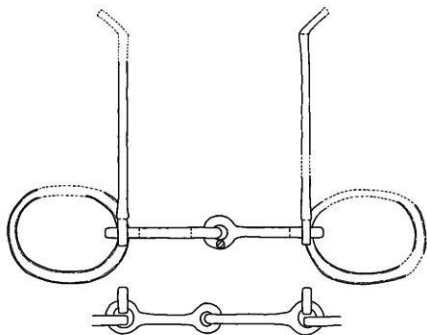
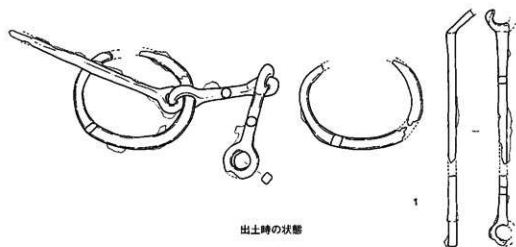


图33 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土馬具1 (S.=1/3)

～9mm・厚さ3mmの円環を上面からのせて、鉄で固定するものである。この外周の円環は革ベルトなどによって外側へ引っ張られる力に対して補強の意味があると考えられる。円環を固定する際に使用された鉄の数は、表面の錆化のために観察または不可能で、正確な数を知ることができないが、観察しうる限りでは、打ち込む位置に規則性はないようである。鉄頭は、径5mm程で、扁平である。

脚金具(34-5)・(34-6)・(34-7)・(34-8)は、この雲珠に伴う可能性がある。ただし、「遺物出土状態」の項で記したように雲珠の本体部分は玄室攪乱層から、脚金具は羨道の攪乱層から出土したものであるので、出土位置は近辺から出土したというものではない。

(34-5)～(34-7)は、本体の鉄板に3鉄が打たれる点で共通しているが、鉄板の形状がや

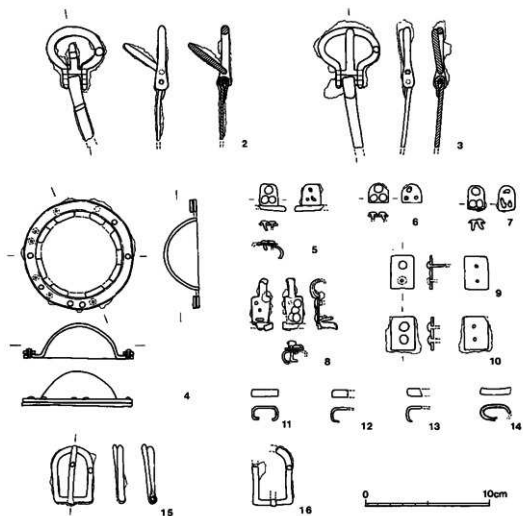


图34 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土馬具2 (S=1/3)

や異なっている。(34-5)は方形に近く、(34-6)・(34-7)は爪形を呈する。また(34-7)は幅に対して長さがやや長い。なお(34-5)には黄金具が鑄着している。

これらの脚金具に対して(34-8)は構造そのものが異なっている。幅1.4cm・長さ2.1cmの方形の鉄板に、幅0.5cmの「C」字形を呈する鉤金具が接続している。おそらく鍛接によるとみられる。方形板には、5鉸が重なり合いながらも打ち込まれている様子が肉眼で観察できる。この鉸によって革ベルトなどの固定を行っていたと考えられる。また、方形板に別造りの黄金具が鑄着していることから、革ベルトなどが付けられていたことが推定できるが、使用時の状態を想定復原することは難しい。例えば2重に折り曲げた革ベルトの先端にこの金具を鉸で留めて、鉤舌を雲珠の穿孔部などに引っ掛けることで、脱着を容易にしていたのであろうか。

方形の留金具(34-9)と(34-10)は、同形態のものである。幅1.8cm・長さ2.6cmを測る。2鉸が縦に配置され打ち込まれている。鉸頭径は6mm程である。

鉸具(34-15)・(34-16)は、同工・同大の製品とみられる。(37-16)は、輪金の一部と刺金の多くを欠損しているが、(34-15)によって全形を知り得る。

輪金は1本の鉄棒を屈曲することで、円頭形のそれがつくられている。基部の一方は、輪金の側面の先端部と鍛接によって接合しているのであろうが、肉眼ではその痕跡は確認できない。刺金はその下端を曲げて、輪金の基部に巻き付けることで固定されている。

3. 鉄鏃

図35に出土鉄鏃のうち図化可能であったものを示した。検出した鉄鏃片とみられるものの総数は41片あるが、そのうち、鏃身部や基部・筥被の関節部などの特徴的な部位を抽出して図示した。図35のほか出土の41片の出土位置は、玄室内の攪乱土出土のものが僅かにあったほかは、その多くが羨道部の攪乱層の比較的下位で出土し、原位置を保ったものはなかった。したがって、現状で鏃身部は10個体分を数えるが、元の副葬数はそれ以上であったとみられ、実数は不明である。

さて、鏃身部の形状が判る10個体のうちにも数型式が存在している。

(35-1)・(35-2)の鏃身は長三角形で逆刺を有するものである。(35-1)は平造、(35-2)は片丸造になっている。(35-1)はそのほとんどを欠損しているが、(35-2)よりもやや大きいとみられる。(35-2)の鏃身の大きさは幅1.2cm・長さ2.9cmである。

(35-3)～(35-10)は片逆刺を有する長頭鏃である。鏃身部の細部の状況は、鏽彫れや劣化による欠損によって必ずしも明瞭ではない。肉眼での観察によれば、刃部からそのまま引き続いて片逆刺状のものをつくるもの(35-3～7)と、刃部と頸部が区別され独立して頸部に片逆刺をつけるもの(35-8～10)がある。鏃身部は、片丸造の(35-3・8・9)・両丸造の(35-5・6)のほか、鏃を有する(35-4・7・10)がある。

鋒から茎先端までが、比較的良好に残っている(35-3～5)の現状での長さ重量を記しておく。

(35-3) は残存長14.2cm・重さ13.8g、(35-4) は残存長13.7cm・重さ12.3g、(35-5) は残存長13.2cm・重さ9.8gである。

(35-11) ~ (35-24) は、頸部や茎の形状がわかるものを示した。筥袂関部に関して、(35-3) ~ (35-6) も含めて見ると、いずれも斜関であるが、(35-5)・(35-11)・(35-12)・(35-21) は左右にのみ段を有し、その他は前後左右に段を有している。

4. 金銅装製品・銀製品・鉄製品

耳環(36-1) は、玄室内攪乱層の最下層(図24-8) から出土した。鉄芯を銅板で覆ったものである。本来はその銅に渡金を施したものとみられるが、肉眼では金の残存を認めることができず、現状では全体が緑青色に変化している。したがって鉄芯銅装の製品であった可能性もある。図示状態左右3.4cm、同上下3.0cmを測る。断面形は径7mmの円形で、重量は22.1gである。

ところで、この耳環の製作方法に関して、鉄芯に対する銅板の巻き付け方法が判然としない。図示状態上部の、鉄棒の小口部にあたる箇所には、円形の銅板を当てており、これを一方の側面を覆う銅板に接合している痕跡が見える。また図示状態下部に、銅板の接合痕跡らしき皺が、縦方向に残っている。しかし耳環の側面には銅板の接合痕跡は認められない。これらの状況から、製作過程をある程度復原することは可能であるが、中央部に残る皺が銅板の接合痕跡とすれば、それを製作過程に位置づけて理解するには至っていない。

(36-2) ~ (36-5) は用途不明の鉄製品であるが、(36-2・3) と(36-4・5) は、それぞれ同様の形態をしている。(36-5) 以外は玄室内の攪乱層(図24-7層) から出土した。(36-5) は、奥壁付近に僅かに残る初葬面で検出された。

(36-2)・(36-3) は、下端を袋状につくり木の棒などを挿入させるようになっている。上端は、「U」字状に屈曲し鉤状になっている。端部が見える(36-2) の長さは4.5cmを測る。袋部の内径は最大5mmである。

(36-4) は、ほとんどを欠損しているが、その特徴的な形状が(36-5)と同様なので、これによって全体形を知ることができる。

(36-5) も、下端を袋状につくり木の棒などを挿入させるようになっている点では、(36-2・3)と同様である。袋状部には木質が遺存している。しかし異なるのは、上半部の形状である。上部は蛇行して細長くのび、先端が蕨手状に屈曲している。その断面形は方形を呈している。(36-5) の長さは8.7cmを測る。袋状部の内径は1辺最大4mmである。

(36-6) も用途の特定が難しいものであるが、中央の孔や裏面に明瞭に残っている木質から、鉄の節金具とみられる。銀製の円盤状を呈し、外径1.6cmを測り、中央に径0.4cmの円形の孔を開けている。裏面に残る木質のために、観察に制限があってこれ自体の構造が不明な点も多い。破断面などから窺い知る情報を総合すると、外周および中央の孔の周囲で銀板を裏面に折り返している。

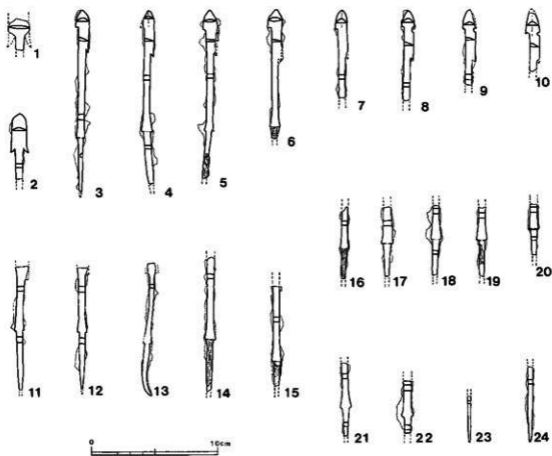


図35 巨勢山407号墳 石室内 撥乱期出土鉄器 (S=1/3)

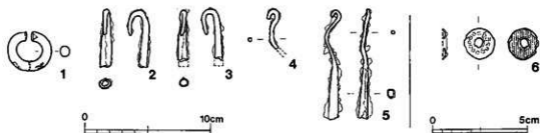


図36 巨勢山407号墳 初葬面・撥乱期 出土鉄器・銀製品など

その際、表面はやや盛り上がり、その中央部分に、裏面側から径約1mmの12個の点を打ち出した列点文を施し装飾性を持たせている。

5. 鉄釘

図37に出土鉄釘のうち、図化可能であったものを掲げた。いずれも断面形が方形になるものであ

るが、その太さによって2種に大別できる。すなわち一辺が0.8～1cm程の(37-1～10)と、一辺が0.5～0.6cm程の(37-11～18)である。いずれもが攪乱層の出土であるために明確ではないものの、2時期の埋葬があることが確実な本墳の場合、初葬棺と追葬棺にそれぞれ伴うものであると考えるのが妥当であろうが、「遺物出土状態」の項で既述したように追葬棺に伴うとみられる(37-11～18)は、蓋材を固定するなど補助的に使用したものと考えている。

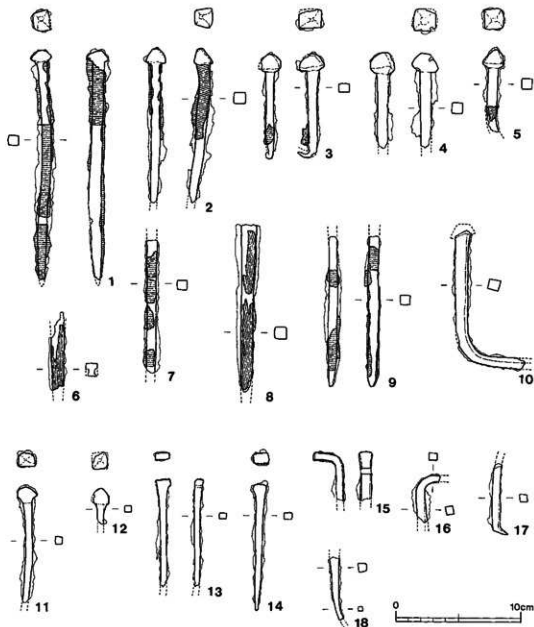


図37 巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土鉄釘1 (S.1/3)

身部が太いものうち、(37-1)は全形に近い唯一例である。頭部と身部との境界は前後左右に段を有する。頭部の形状は、稜線がそれほど明確ではないが、底面が四角形で頂部がやや扁平な角錐台となっている。なお、このような頭部の形状は、身部が太いもので確認されたものはすべて共通しており、身部が細いものでも(37-11・12)についてはほぼ同様であるとみられる。(37-1)の現状での長さは18.0cmを測る。身部先端を僅かに欠いているが、ほぼ元の長さに近いものと思われる。

(37-1)の身部外面には木棺材に起因する木質が残っている。木質が認められるものはこのほか、(37-2・3・4・5・6・7・8・9)があるが、(37-1)は、その木質の木目の方向が頭部先端から6cmのところまで変化していることが注意される。両者とも身部の軸方向に直交するものであるが、互いに約90度振っている。このことは、この釘が2つの木材を緊結していたことを如実に示すものである。木棺において使用された箇所を推定することは難しいが、頭部先端から6cmのところまで木目方向が変化することから、一方の棺材の厚みが5~5.5cm程であったことが判る。

身部が太いものではこのほか(37-10)が、身部が約90度に屈曲している点が他のものとは異なっている。鏝とも思われるが、図示状態の上部に、頭部が欠損した痕跡とみられるものが僅かに残っている。因には頭部を破線で復元的に描いた。ここでは、通有の釘でも、材を貫通した場合には不要な部分をこのように曲げて処理する場合もあったと理解した。(64-3)も、腐食が著しいものの図示状態の下端が屈曲していることが判る。この場合も同様の処理が行われたと考えられる。

(37-11~18)は、身部が細いものである。ほぼ全体が残っている(37-14)は長さ10.1cmを測る。頭部の形状には、上述した底面が四角形の角錐台の形状をする(37-11・12)のほか、延圧して左右に広がっている(37-13・14)がある。また、(37-15)は身部を屈曲させて頭部とするものであるが、やや頭部が長い。図示状態で下半部を欠損して全形が不明なので、あるいは釘以外の鉄器であるかもしれない。また、(37-16)や(36-17)は身部が約90度屈曲している箇所がある。これらは縫の可能性はある。

第4章 巨勢山408号墳

第1節 位置と墳丘

巨勢山408号墳は、巨勢山407号墳の西に隣接して所在する。407号墳との直線的な距離は、墳頂部の中心を基準にすれば約30mであり、比高差もほとんど無い。この2古墳は一見していわゆる小支群の景観をなしている。

408号墳が立地する地点の尾根においても、谷側に下る斜面、すなわち古墳の南北の斜面の土砂の流出が著しく、古墳の墳丘端にまで影響している。このため墳丘の南北の形状は定かではない。しかし、本墳においても尾根線上にあたる古墳東西の墳丘端は比較的明瞭である。

まず西側の墳丘端については、南南東に開口する石室の前庭部先端付近に一致している。また、この地点には、尾根を横切ってのびてくる墓道が検出された。墓道の検出上端の幅は、約2.5mあり、深さは20～25cm程ある。墓道は、南斜面から尾根中央付近まで登った後、東に約90度振って407号墳の方に向いている。屈曲する地点から約5mでとぎれており、その先はいずれの方向に向くのか不明である。巨勢山古墳群では、急傾斜地などではない条件の良い地点においてはこのよう

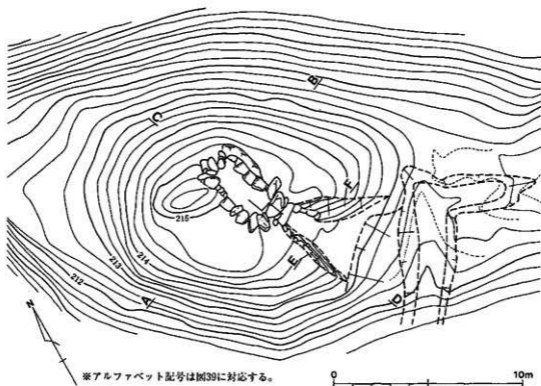
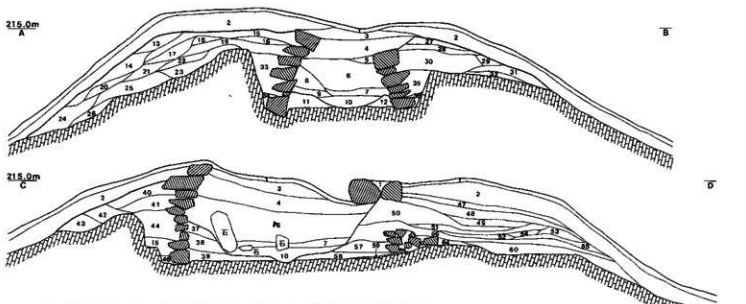


図38 巨勢山408号墳 墳丘 測量図 (S=1/200)



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------------|
| 1. 表土 | 17. 赤褐色砂礫 | 34. 黄褐色砂質土 | 51. 黄褐色粘質砂質土 |
| 2. 黄褐色砂質土 | 18. 暗黄褐色粘質土 | 35. 暗褐色砂質土 | 52. 黄褐色砂質土 |
| 3. 明黄褐色砂質土 | 19. 赤褐色砂質土 | 36. 黄褐色砂質土 | 53. 黄褐色砂質土 |
| 4. 黄灰色砂質土 | 20. 明黄灰色粘質土 | 37. 暗灰色砂礫 | 54. 黄褐色砂質土 |
| 5. 黄灰色砂質土 | 21. 暗黄褐色砂質土 | 38. 黄褐色砂質土 | 55. 黄褐色砂質土 |
| 6. 黄褐色砂質土 | 22. 暗赤褐色砂礫 | 39. 茶白褐色砂礫 | 56. 明褐色砂礫 |
| 7. 黄褐色砂質土 | 23. 黄褐色砂礫 | 40. 明褐色砂質土 | 57. 明褐色砂礫 |
| 8. 黄褐色砂質土 | 24. 暗赤褐色砂礫 | 41. 明褐色砂質土 | 58. 茶白褐色砂礫 |
| 9. 黄褐色砂質土 | 25. 黄灰色砂質土 | 42. 黄褐色砂質土 | 59. 黄褐色砂質土—床面の段上 |
| 10. 黄褐色砂質土 | 26. 黄灰色砂礫 | 43. 黄褐色砂礫 | 60. 黄褐色砂質土 |
| 11. 明褐色砂質土 | 27. 黄褐色砂質土 | 44. 明褐色砂質土 | 61. 黄灰色砂質土 |
| 12. 明褐色砂質土 | 28. 暗黄灰色砂質土 | 45. 暗赤褐色砂質土 | 62. 黄褐色粘質砂質土 |
| 13. 黄褐色砂質土 | 29. 暗黄褐色砂質土 | 46. 暗褐色砂礫 | 63. 黄灰色褐色砂質土 |
| 14. 暗黄褐色砂礫 | 30. 黄褐色砂礫 | 47. 黄灰色砂質土 | 64. 黄褐色砂礫 |
| 15. 黄褐色砂質土 | 31. 黄褐色砂質土 | 48. 黄灰色砂質土 | |
| 16. 黄褐色砂質土 | 32. 黄褐色砂礫 | 49. 淡黄灰色砂質土 | |
| | 33. 暗褐色砂質土 | 50. 黄褐色砂質土 | |

※アルファベット記号は図38に対応する。

図39 巨勢山408号墳 墳丘・横穴式石室 断面図 (S=1/90)

な墓道が検出されることも多い。

さて石室の前庭部の詳細は後述するとおりであるが、前庭部の前面は緩やかな傾斜になってこの墓道の上端に至っている。墓道の法面にあたる212.50～212.75m付近より上位のコンターラインが墳丘の形状を表していることから、この墓道が前庭部前面の墳丘裾部に取り付いていることが判る。一方の墳丘の西端は、213.00m付近のコンターラインの間隔が急に広がっていることから、この付近に求めることができる。また、墳形については、攪乱が少ない墳丘西側のコンターラインが円弧を描くことから、円墳であると判断できる。

以上の墳丘端の位置を基準にすれば、本墳は、直径17mの円墳であることが判る。

墳丘は、東側の斜面下端を含めて地山を削りだして成形した後、墓壙を穿って、そこに横穴式石室を構築しつつ、盛土によってこの石室を多し隠すようにして築造されるものである。盛土が墳丘内外のいずれの方から先に積まれるかとの規則性はあまり明確ではない。墓壙の高さまでが埋め戻された後は、石室石材の高さにしたがって墳丘も積まれていったのであろう。

巨勢山408号墳の築造時期については、後述する石室内出土の土器などによって知ることができる。それらは、MT15型式の中でも新しい段階に位置づけられるものである。同じMT15型式期でも、407号墳が先行し、これに引き続いて408号墳が築造されたと考えられる。

第2節 横穴式石室

巨勢山408号墳の主体部は、右片袖の横穴式石室である。石室の主軸はN-21度30分-Wに向け、石室の開口方向はおおよそ南南東になっている。羨道部も含めて石室の構築に用いられた石材の石種はいわゆる花崗岩で、丸味を持った自然石に近いものが多く用いられている点など、隣接して所在する巨勢山407号墳と同様である。このほか、408号墳の石室は、全体的な形状など、407号墳と共通することが多い。

石室内は盗掘などの影響で、玄室床面の中央付近は攪乱を受けていたが、奥壁・側壁近辺にはこのような攪乱が及んでおらず、副葬品なども埋葬時の状態を保って出土するほど良好な状態で遺存した。石室各壁の残存状態も比較的良好で、特に奥壁部の右側壁とのコーナー付近では高さ2.5mを検出でき、天井石についても、羨道部に玄室前壁になる1石のほか1石の、計2石が残っていた。その一方で、玄室の天井石はすべてを失っており、左側壁では高さ1.4m程しか残っていない箇所もあって、完存したと言うには及ばない状態である。

石室内の盗掘が比較的小規模なものに終わっている割に、天井石など石室構造の上位を失っているのは、この巨勢山古墳群の周囲においては、近代以降も水田造成に伴う石垣などの石材として花崗岩石が多く採取されたことに因すると思われる。このようなことで、巨勢山古墳群の横穴式石室は、副葬品に対する盗掘目的とは別に、天井石や壁面を構成する石材の多くを失っていることが多い。そのような中において、本墳が天井石2石を残していたのは、前述した巨勢山407号墳と共に、

むしろ希少な事例であった。

羨道部の前面についても、407号墳と同様に、前庭部を検出した。前庭部は、墓壙に引き続いて地山面から掘削されたものである。後述するように東側の掘り方には多少の変形があるかもしれないが、特に西側は、遺存状態は良好であった。羨道前面の地形が当初のものに近いとすれば、羨道部の、特に西側の面は、石積みそのものも大きな攪乱や破壊は及んでいないとみられる。羨道の西側基底石を基準にすれば、石室全長は6.3mを測る。

また、408号墳においては、後述するように、出土した須恵器の型式が1型式内に収まり、その他の追葬の痕跡がまったく認められなかった。さらに、玄室床面において木棺を緊結したとみられる鉄釘を多く検出したことから、408号墳は、組合せ式木棺を取めた単次葬墳であることが判った。

1. 墓壙

墓壙は、地山面から掘り込まれていた。墓壙の平面形は、石室の平面形状と同様におおよそ矩形を呈している。その幅は、奥壁部付近の上端間が4.3mを測り、玄室部の中央付近で4.8mとなる。羨道部分は幅約3.4mと狭くなり、その掘方は羨道の前面にある前庭部の掘方に繋がって、南方向に開いている。

深さは、奥壁部で1.2m、玄室中央付近では東側で0.9m、西側で1.4mである。墓壙法面の傾斜は、東側辺や西側辺では、比較的急で上端から下端まで直線的に掘っている。しかし、北側側辺、すなわち奥壁の背後では、地山である掘り込み面から84cmの深さで一端平坦面をもつ2段掘りになっている。石材を積み上げる際の便宜を図ったものと理解されるが、今次調査地では、墓壙の掘方としては、前述の巨勢山407号墳を含めても、上端から急な傾斜をもって直線的な法面であるのが一般で、このような2段掘の造作をするのは例外的である。

このような墓壙の形状の結果、玄室の東および西側壁の石材の玄室石材の後ろ側から墓壙斜面までの距離は狭いが、奥壁の背後には比較的広い空間がある。もっとも、奥壁側についても下段の下端が奥壁石材の背後に接している状態であることは、両側壁石材の状況と同様である。すなわち、特に両側壁の下半については石室の内側から石材を積み、その後裏込めの土を墓壙内に埋め戻した状況が明確である。なお、裏込めは土のみを用いており、石材はなかった。

また、石室基底石を据えるための据え付け穴は、概して10cm程度の浅いものであったが、地点によっては20cm強の深さのある箇所があった。

2. 玄室

玄室の床面の規模は、長さ3.87m、奥壁幅2.27m、最大幅2.65m、玄門部幅2.22mを測る。玄室の中央付近がやや膨らむ胴張り形を呈している。玄室部分は天井石が失われていたので、玄室の高さは不詳である。各壁面のうち最も高く残っていた箇所は、奥壁から右側壁にかけての部分であるが、

ここでの残存高2.5mを測るので、玄室の元の高さは少なくともこの高さ以上であったことが判る。

この残存箇所での最高所のレベルは標高215.6m付近である。一方、玄室前壁となる石材の残存部の最高所のレベルは215.05mで、その比高差は55cm程あって、現状での前壁の方が低い。この55cm程という長さは、残存した前壁の石材の厚みにはほぼ匹敵するものである。このことから、現状での奥壁から右側壁にかけての部分が高さの元の高さに近いものとするれば、玄室前壁には、残存した石材の上に同程度の大きさの石材が2段に積まれていたと考えられよう。

次に、玄室各壁の構築順序は、判然としない場合も多いが、基底石に関しては、奥壁基底石の両側に側壁基底石の側面があたっている状態なので、まず奥壁の基底を決めてから、側壁については奥側から並べ置いていったものと推定できる。袖部については、噛み合わせの具合からは、右側壁との先後関係が判りにくいが、奥壁と側壁の関係をこのように想定した場合、おそらく側壁の位置に合わせて袖石の位置を決めたものと思われる。

玄室の床面には特に置土などによる造作は認められず、玄室床は地山を平らに削って造り出したものである。ただ、羨道部分では、床面として黄褐色砂質土を敷いて貼床としており、レベルについても玄門から羨門部まで緩やかな傾斜面となって上がっている。なお、石室内には、排水溝などの特別な施設はまったく施されていないかった。

奥壁・側壁の石積みについては、巨勢山407号墳と同様に、大小の石材を適時取り混ぜながら構築しており、石積みの横方向のラインなどは整然としていない。したがって、各壁の段積みの数も合致しない。しかし、当然ながら、各壁の石積みはほぼ同様のペースで進められたに違いなく、一定の作業単位ごとに高さが大雑把ながらも揃えられたものと思われる。すなわち、奥壁と両側壁のコーナー部分を観察すると、各段において一方で大きな石材が使用され、他方で小さな石材が使用された場合には、小さい石材の方を2段に積んで高さを調節している部分が見受けられる。

また、このコーナー部分では石積みの上半部で、奥壁と側壁の両者に共有するように架けられている石材が観察された。具体的には、奥壁と左側壁のコーナーでは、下から3段目の石についてこのような使用法がなされている。ただ、これより上の2石はやや小さいながらそれぞれ奥壁・左側壁に明瞭に分かれている。これよりも上位は左側壁の石材が失われているため一見判りにくいが、残存している3石は奥壁と側壁を共有するように架けられたものである。この3石の下端のレベルは標高214.5m付近になる。奥壁と右側壁とのコーナーについても同様に、下半は奥壁と側壁に明瞭に分かれるが、やはりこの標高214.5m付近より上位の石材が奥壁と側壁を共有するように架けられている。

このように、奥壁部の側壁とのコーナーが上半部で不明瞭になる状況も巨勢山407号墳と同様であって、本墳の場合にも、元の天井石が構築された状態では、特に石室上半部の形状は窮窿式に近い外観を呈していたと思われる。

次に各部位ごとに石積みの特徴を記述する。

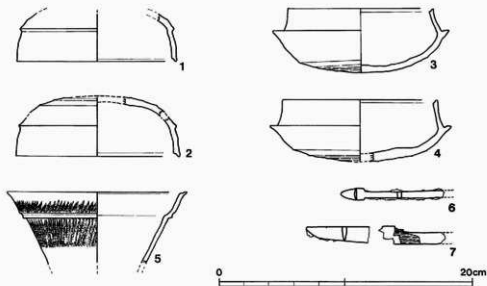


図66 巨勢山409号墳 主体部2 出土遺物 (S=1/3)

個体についてはいずれも小破片になっていた。一方、墓壇外の、墓壇掘り込み面の上面で検出した杯身(66-3)・(66-4)は、遺存状態が上の3個体とは異なっている。(66-4)は割れて破片になっていたが、それでも1/2近くまで接合復元できた。(66-3)は完形品である。

杯蓋の(66-1)・(66-2)では、僅かに細部の調整が異なっている。(66-1)は、口縁端部が面をなし、天井部と口縁部の境界の稜線は外方に突出しており、先端は比較的鋭い。(66-2)は、口縁端部の内面に段を有し、天井部と口縁部の境界は外方に突出するもののその先端は丸くなっている。なお(66-2)は、接合のできない口縁部と天井部の2片を、胎土・焼成・色調から同一個体と判断して図上復原したものである。

杯身(66-3)と(66-4)は口縁端部が内傾する面を成すなど調整技法においても共通するが、(66-3)の立ち上がりの方がやや内傾の度合いが大きい。底部の形状は、丸味をもってやや膨らんでいるが、主体部1出土のものと比較すると、全体にむしろ扁平な感じがする。

匙(66-5)は、口縁部の破片を検出したものである。口縁端部はやや内傾する面をなし、端面中央は凹線になって浅く窪んでいる。頭部の長さや太さは不明である。

これらの土器のうち、蓋杯については、細部の調整にやや差異があるが、より新しい特徴を採れば、MT15型式期に併行するものと思われる。

鉄鏃(66-6)は、鏃身部は三角形で片丸造りの長頸鏃である。茎を欠損している。

刀子(66-7)は刀身部と茎部が、比較的近い位置ではあったが、別々に出土した。接点を持たないため、接合できなかったが、出土位置などから同一個体と推定されるので、図上復原した。刀身部と茎の境界は背間を有するが、刃部側は腐食のため定かではない。関がないものかもしれない。茎に、僅かに把の木質が残っている。

①奥壁

奥壁に使用された石材は、大きいものは横50～80cm・縦50cm程度、小さいものは横40cm・縦20cm程度以下の大きさである。さらに極小のものが、石材の間に噛み合わせて隙間を埋めるのに使われている。

石積みは、下半をほぼ直立に立ち上げて、上半部は持ち送って前方にせり出すように積んでいる。その境界となる高さは、図40の側壁立面図中に示した、奥壁の中軸での断面図では下から6段目の石材の上端になり、7段目の石材より上位を持ち送っている。この6段目と7段目の石材の境界部のレベルは標高214.4m付近となって、先述の、奥壁と両側壁に共有して架けられる石材の下端の高さとはほぼ合致する。

すなわち、この巨勢山408号墳の奥壁も、直立した下位と持ち送りした上位の2段階に分かれ、また奥壁と両側壁のコーナー部分は、この上半部では石材が両壁に共有するように架けられていた。

玄室の高さは奥壁から右側壁にかけての部分が最もよく残っている。現状で標高215.6mのレベルにあたる最高所の地点は、床面からの高さ2.5mを測る。この高さ付近で右側壁と左側壁の距離、すなわち奥壁の幅は、左側壁の残存状況が悪いために判然としませんが、左側壁に共有するように架けられていたとみられる奥壁左端の石材を基準にしてみると、70cm程に縮まっている。これは後述するように、両側壁の石材も持ち送りによって上位が前方にせり出しているためであるが、この持ち送りの状態からすれば、これ以上壁面自体が高くなるとは考えにくい。奥壁から右側壁にかけて残存した最も高い位置は、元の玄室の高さに近いものであったと考えられる。

②右側壁

右側壁に用いられた石材も奥壁と同様に、大小を取り混ぜた状態である。

奥壁の状況と異なるのは、壁面の持ち送りのあり方である。すなわち、図40のc-d断面図およびe-f断面図や天井方向の見上げ図に示したように、右側壁の石積みは、基底石の上のせた2段目から上位を持ち送っている。このような石積みの方法は、次に記述する左側壁の状況とも共通している。ただし、c-d断面図に示した地点の右側壁の持ち送りは、特に上半部の傾斜角度が甚だしい。おそらくこの付近は、天井石が失われた後に後方からの土圧によって、迫り出してきたものと思われる。

③左側壁

左側壁に使用された石材に大小があることは、奥壁や右側壁と同様であるが、特に右側壁の袖石に対応する箇所では、基底石に横110cmの、2段目に横135cmの横方向に大きい扁平な石材を使っている。それより上位にも、3段目・4段目としてやはり同様に横方向に90～100cm大の扁平で横方向に大きい特徴的な石材が使われているが、その位置が2段目の真上ではなく、開口部側にややずれて積まれている。玄室前壁となる天井石は、この4段目石材に架けられている。

この位置の2段目と3段目の位置がずれていることは、石室の構築過程を考えるうえで興味深い。

つまり、この位置の石材は、他の部位より横方向に大きい特徴的なものであるが、これが右側壁の袖石に対応するものとして選定されていることは一目瞭然である。袖石と、左側壁のこの部位の石材には、玄室の前壁となる天井石が架けられることになるが、この位置で2段目まで積んだ時点で、袖石との位置が微妙にずれていることに気づかれたに違いない。このずれはすでに基底石の位置を決めた時に生じていたものであるが、その齟齬を解消するために、3段目の石材を開口部側にずらして積み上げたものと理解できる。

壁面の持ち送りは、右側壁と同様に基底石の上のせた2段目から行っている。

④袖部

袖部の基底石は、まず玄室右側壁面に対して、幅約25cm程の比較的小さな石を玄室内側方向に突出させておいて位置を決めている。これに幅約95cm・高さ50cmの扁平な石を並べおいて、この2石を袖部の基底石としている。2段目には幅105cmのやや大きな石材が1石で用いられ、3段目も幅90cmの石材が1石で用いられている。4段目は、やや小さな石材と組み合わせて2石を用いて積まれている。袖部の横幅が上に行くほど小さくなるのは、右側壁の持ち送りに合わせて、石材の幅を減じているためであるが、この袖石自体も2段目から上位を持ち送って羨道側にせり出した状態で積まれている。

玄室の前壁となる天井石は、袖石の4段目の上に積まれている。その際生じた隙間などは、人頭大の石を用いて埋めている。

3. 羨道

羨道は、基底部での長さを見れば、右側壁は2.43mある。玄門部での羨道の床面幅は1.06mである。天井石は、玄室の前壁となる1石のほか1石の、計2石が構築されている状態で検出した。また、羨道部の床面には、厚さ数cm程度の黄褐色砂質土が敷かれ貼床としていた。

羨道に主として用いられる石材の大きさは、玄室のそれとそれほど大きくは異ならない。ただし、右側壁の上半には、やや小振りな人頭大の石材が多用されている。羨道左側壁の基底石は、玄室の基底石を設置する作業に引き続いて行われたらしく、大きさにほとんど差はない。壁面を構成する石材についても、羨道右側壁ほど小さい石材は見られず、玄室のそれとほぼ同様か、むしろ大きい石材が使われている。

ただ、後述するように、羨道部の前面にある前庭部の東辺の掘方、すなわち羨道左側壁に連続している箇所は、西辺に比べ大きく開いておりやや不自然な感じがする。元の掘方が崩れた結果このような地形になったとすれば、その際羨道の左側壁の石積みも影響を受けている可能性がある。

実際、この壁面とは反対側の右側壁の石積みをよく観察すると、上半に積まれた石材は、必ずしも下の石材にうまく荷重がかけられているのではなく、不安定なものも多い。例えば、図40の左側壁立面図にも示しているように、羨道の最も外側の石は、下の石に支えられることなく浮いた状態

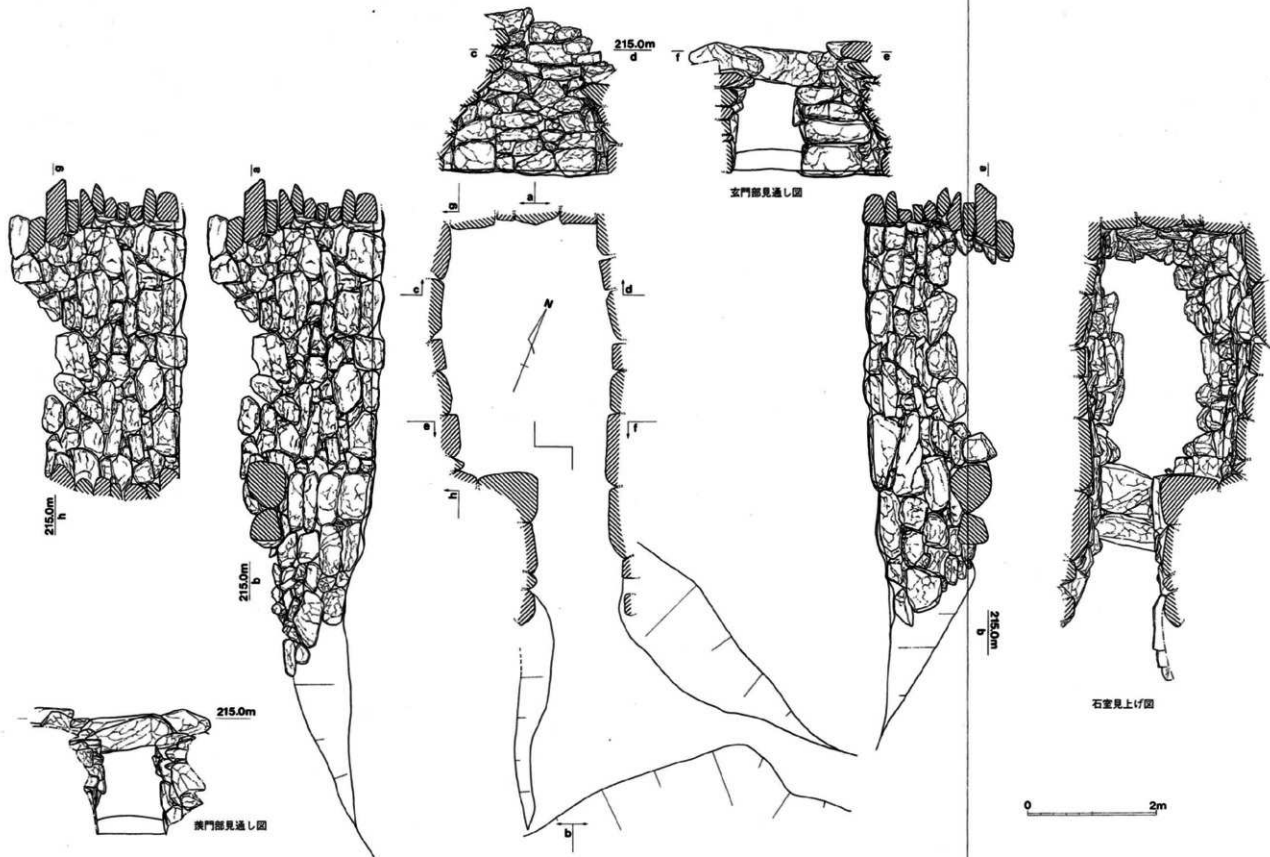


图40 巨勢山408号墳 横穴式石室 (S-1/80)

になっている。これは墓塚の掘方の法面に荷重をかけてこの位置に止まっているものであるが、元よりこのような積み方では、自然崩壊するのも当然のことである。

したがって、このような羨道部の石積みの手法が左右共に同様に行われていたとし、また、羨道左側壁側に何らかの擾乱が及んでいたとすれば、この壁面においても現状より以上に小形の石が使用されていたと考えられよう。逆に、羨道右側壁のあり方からは、前面の前庭部の掘方に擾乱などの痕跡がなく、比較的小形の石材もよく残存していることから、元の地形が大きく変わっているとは考えにくい。おそらく、羨道右側壁のこの部位は当初の羨門部の状況をよく残しているものと考えられる。

また、羨道部のこのような石積みのあり方から、特に羨門部に近い位置では天井石を支えることは不可能であると思われる。残存した天井石より外側には、石室の構築当初から天井石は架けられていなかったと考えられる。

4. 前庭部

巨勢山407号墳と同様に、石室羨道部の前面に造られた前庭部を検出した。前庭部の掘方の上端が墓塚の掘方の上端に繋がっており、両者は一連の作業工程として掘られたことも、407号墳と同様である。墳丘のこの部分を断面U字形に掘り込んで切り通しにして、墳丘の外側にまで延びない石室入り口と墳丘端とを繋ぐ役割を果たしている点も、共通している。ただし平面形態がやや407号墳のそれとは異なっている。

407号墳の場合には、前庭部の幅は羨道幅にほぼ等しく前方に延びていたが、408号墳では、特に東側辺が外側に向かうにつれて大きく広がっている。

現状では、これが当初の形態を保ったものであるのか、擾乱を被った結果なのか判断するのは難しい。図39に示したE-F断面図によれば、羨道から直線的に延びる西辺は、下端の位置も明瞭であるのに対して、東辺は傾斜が緩やかで下端のラインも不明瞭になっている。407号墳の事例をも参考にすれば、408号墳の前庭部の東辺のみが異様に広がっているのも不自然な感じがする。一方で、崖際でもないこの地点で大きく土砂が流出しているとも考えにくい。

このようなことから、前庭部の東側辺の現状は、元の形状を反映しつつも、多少の擾乱を受けて本来よりも法面の傾斜角度などが緩やかになっているものと考えられる。

先に、羨道部の右側壁と左側壁に使用された石材のあり方を比較すると、左側壁においてはより小さな石材が見られないことを挙げた。そして、このような前庭部の東側辺付近に何らかの擾乱があって、その影響が羨道の左側壁にも及んだと考えれば、石材使用法の違いを理解しやすいことは、前述のとおりである。

なお、この前庭部の南側は、尾根を横切って延びてくる墓道に繋がっている。前庭部の前面は、緩やかな傾斜になって下り、この墓道の上端に至る。石室の真正面では前庭部の平坦面と墓道底の

比高差は0.7~1m程度ある。墓道と前庭部平坦面の比高差をできるだけ小さくするには、一旦尾根の中央付近まで登ってから石室前面に廻り込む道程が考えられるが、その場合には、東に広がった前庭部の先端を通ることになる。前庭部が東に広がっている理由は、このような墓道と関係する可能性があるが、定かではない。

5. 閉塞施設

閉塞は、人頭大の石材を積むことによって行われている。石積みは、玄室側から見たときに、玄門部から開口部方向へ55cmの地点で、おおよそ主軸に直交して基底石を一列に並べている。羨道部においては、床面に黄褐色砂質土の貼床が行われていたが、閉塞石はその上に置かれていた。

石室壁面の石材と同様に、閉塞石に関しても石材の大きさが揃わないために1段目や2段目の上端のラインは必ずしも横方向に通らない。それでも残存した高さまででは、3段に積まれた状態が看取できるので、閉塞の作業手順としては下段から順次1段ずつ積まれていったことが判る。

閉塞石そのものは、当初天井石の高さまで積まれていたとすれば、現状では上半分を失っていることになる。おそらく石材とともに閉塞に用いられたであろう土の堆積についても、閉塞石より上位では原位置を保っていないのでその状態については不明な点が多い。ただし、図41-3層の黄褐色砂礫は、閉塞石の背後を裏込めのように埋められたものである。最終的な閉塞の姿を復原想定することは難しいが、このような土のあり方からすれば、閉塞の作業は、石材を玄門部より積み上げつつ、開口部側は土砂を埋めていって、天井石にまで至っているものと考えられる。

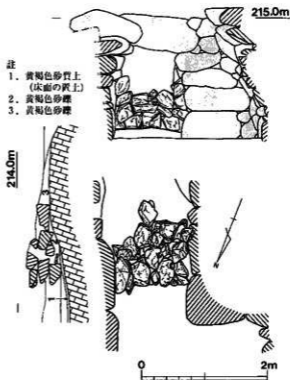


図41 巨勢山408号墳 閉塞石 (S.=1/60)

第3節 遺物出土状態

玄室床面は、中央部の一部を除いては攪乱を受けておらず、多くは自然堆積による土砂が床面を覆っている状態であった。このため、副葬品などの遺物が原位置を保った良好な状態で検出できた。

玄室内の遺物は、大きく分けると、奥壁付近出土の土器と馬具・左側壁の玄門部付近出土のミニチュア甕形土器など・玄室内西半を中心として出土した鉄釘がある。それらの出土位置の配置は、図42に示し、必要な場合には各々の拡大図を図43～45に示した。

1. 玄室床面 奥壁付近の土器 (図43)

奥壁付近の土器は、玄室幅の中央付近から西側にかけて須恵器・土師器は一塊になって出土した。

奥壁幅の中央付近に須恵器器台 (48-20) が置かれ、その上に同広口壺 (49-21) がのせられた状態で出土した。出土状態から埋葬時の器台と広口壺の使用のあり方が明確に判る、極めて希有な事例である。なおこの器台と壺の位置は奥壁付近の土器群の東端にあたる地点である。

これより西側に、杯蓋 (46-3) と杯身 (46-4) が、身に蓋を被せた状態で置かれ、続いてこれに接して、土師器壺 (49-22) と (49-23) が、横転した状態で出土した。土師器壺は元は正置されていたと思われるが、丸底の壺であるために流入土の土圧によって横転したものであろう。いずれも口縁部をおおむね東側に向けていた。土圧により、出土時は多数の破片になっていたが、その場で採取した破片を接合することで、ほぼ完形に復元することができた。

さらにこの西側に須恵器短頸壺の一群と、同壺杯が置かれていた。短頸壺は7個体が東西の2列に配列されて置かれているようであった。東側の列は、奥壁側から (47-11) ・ (47-9) ・ (47-13) ・ (47-19) であり、西側の列は、奥壁側から (47-17) ・ (47-15) ・ (47-7) である。それぞれには、壺が被せられたものと、壺が壺の肩部に立てかけられた状態のものおよび壺が近くにはないものがあった。すなわち、壺 (47-11) には壺 (47-10) が、壺 (47-15) には壺 (47-8) が被せられていた。また、壺 (47-9) には壺 (47-6) が、壺 (47-13) には壺 (47-

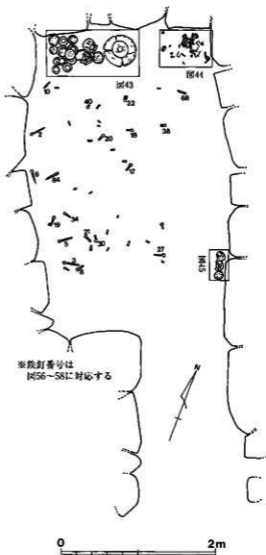


図42 巨勢山408号墳 石室床面の遺物出土状況 (S.=1/50)

213.5m

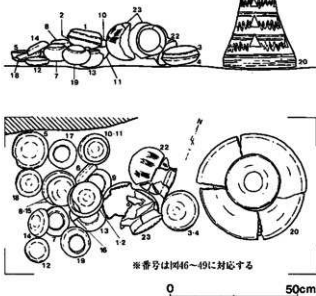


図43 巨勢山408号墳 玄室奥壁付近 遺物出土状態1 (S.=1/15)

態であつたらしく、すべての場合において蓋の口縁部の一部が壺の肩部に付着している。このことによってセットとして製作されたと識別できる蓋と壺を、図47に上下に配置して示した。これによれば、出土状態における蓋と壺のセット関係が、製作時のセット関係に一致したものは、(47-10)と(47-11)の場合のみであった。このことから、実際の使用時すなわち副葬時においては、製作時のセット関係は特に意識されていなかったと考えられる。ただ、蓋杯(46-1・2)と(46-3・4)は、出土時に蓋と身がセットになっていたもので、これらについては胎土や焼成のあり方、法量から見ても、セットとして製作されたとみられるものである。ここでは、短頸壺の壺と蓋の関係はあまり厳密ではなかったが、蓋杯に関しては製作時におけるセット関係が副葬時においても守られていたことになる。もっとも、このことは、蓋杯の方は、法量が少しでも異なると蓋と身がしっかりと重なり合わないのに対して、短頸壺とその蓋は、それらの形態から、同じ型式のものであれば多少法量が合致しなくても違和感なく使用できるということを示しているにすぎないであろう。

しかしながら同時にこのことは、墓所に持ち込まれる以前の、これら須恵器の保管と使用のあり方に、一定の示唆を与えている。このように、製作時のセット関係が多少崩れても使用に耐える短頸壺とその蓋でありながら、巨勢山408号墳からは7個体の壺と7個体のその蓋が出土し、それら

16)が、壺(47-7)には蓋(47-14)が、壺の肩部に蓋を立てかけるように置かれていた。蓋とはセットにならない状態で出土したのは、(47-17)と(47-19)で、これらに対応するとみられる蓋は、短頸壺の列の西側に接した位置で(47-18)と(47-12)が、口縁を上に向けた状態で置かれていた。

これらの他にも、壺(47-9)と(47-13)の上に重ねられて、杯蓋(46-1)と杯身(46-2)が身に蓋を被せた状態で置かれており、またこれら短頸壺などの須恵器一群の北西隅にあたる位置に杯蓋(46-5)が口縁を上に向けた状態で置かれていた。

ところで、上に述べた短頸壺とその蓋は、焼成時に蓋が被せられた状態

はセットとして製作されたことが明らかなものであった。すなわち、古墳に搬入される直前のこれらの甕とその蓋は、製作段階のセット関係が厳密に管理され、他のものが混入しない状態が保たれていたことを示している。

そうであるとすれば、何故にこのような厳密な管理がなされていたのであろうか。その理由を仮に考えるだけでも、いくつかの説明を想定することが可能である。1つはこれらの須恵器が、被葬者等の特別な愛用品であって、他と区別されて扱われていたというもの。今ひとつは、これらの須恵器は祭式の時に用いられる特別な道具類であって、それ故に他と区別されて管理されていたというものなどである。後者については、これらの須恵器が副葬に際して特別に調達されたものである可能性も考えることができる。

しかし、これら以外のものも含めて、そのいずれが実態に即した説明であるかを実証的に提示することは困難である。ただ、これらの短頸甕とその蓋が、日常の雑器としての用途がやや考えにくい器台・広口甕や、製作時のセット関係を保っていると思われる杯蓋・杯身と同様に扱われていたことから、これらについても、単なる日常の愛用品であった蓋然性は低いと思われる。一方、これらが巨勢山408号墳の副葬用の葬具として特別に調達されたものとするれば、副葬時は簡単に制作時のセット関係が崩れてしまっているにも関わらず、他のものが混入することがなかった理由を、入

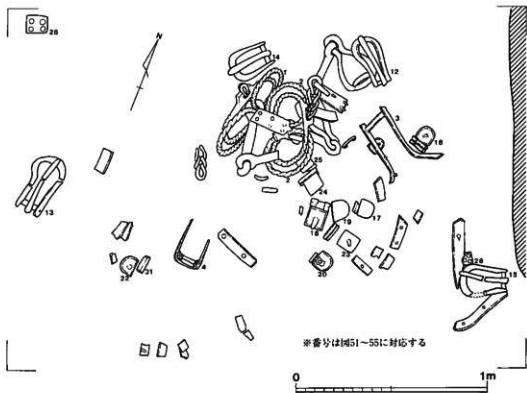


図44 巨勢山408号墳 玄室奥壁付近 遺物出土状態2 (S=1/5)

手時に使用の目的が明確で、入手から使用（副葬）までの期間も比較的短かったからであると考えられることができるかもしれない。ここではこれらの須恵器の入手と保管の事情について考察しうるこれ以上の状況証拠をも提示できる段階にないが、少なくともこれらの一群の須恵器が他と区別されて扱われていたことは確実で、このことに関する考察は、古墳時代における須恵器など物品の流通の問題にも絡んでおり、重要な課題であるといえよう。

2. 玄室床面 奥壁付近の馬具 (図44)

玄室の奥壁付近は、上記のように西半分は須恵器・土師器が置かれており、残る東半分のうち、南北55cm・東西65cm程の範囲に鉄製の馬具が副葬されていた。

奥壁と東側壁のコーナー付近で、複環式鏡板付轡が出土した。轡は、円環による各連結部で屈曲させて、全体をコンパクトに折り畳んだ状態で副葬されていた。鏡板には、銜・鉤金具に繋がる兵庫鎖・引手が連結された状態であった。また、引手には別造りの瓢形引手壺が連結しており、(51-2)に繋がる兵庫鎖の先端には、長方形の鉤金具が繋がった状態であった。ただし、銜の一方は、折れて切断されていた。また立閉に繋がる兵庫鎖は4連のものであるが、鏡板(51-1)に繋がるそれは、2連目ではずれて分離し、傍らに転がっている状態であった。

木心鉄板張輪鏝は、轡より南東側に置かれていたらしい。この部分も攪乱を受けていたわけではないが、鏝に使用された鉄板が薄かったためであろうか、断片化してこの付近に散らばっている状態であった。この際、腐食して消滅しているものも少なくなかった。ただ、柄部は、辛うじて残っており、(53-3)と(53-4)が轡の南側で東西に約25cm離れて出土した。

鏝の破片の分布範囲に重なって、辻金具などの方形ないし爪形の脚金具や、責金具が出土した。これらは別造りのもので、副葬時には革ベルトなどの結束や装飾に用いられて装着されていたのであろうが、有機質の腐朽・消滅に伴って、個々が散在しており、元の状態を推測することも困難な状態になっていた。

鉤具は4個体が出土した。馬具分布範囲の縁辺部にあたる位置にそれぞれ離れて個別に検出された状況である。辻金具などの脚金具や責金具と同様に、出土状態からは元の装着状態を推定することは困難である。

213.4m



※番号は図50に対応



0 50cm

3. 玄室床面 左側壁玄門付近の土器 (図45)

玄室左側の側壁際の、玄門部よりやや奥壁側に寄った地点で、ミニチュアの瓢形土器(50-25)・甕形土器(50-24)・鋗形土器(50-26)の3個体が、口縁部を上に向けた状態で並べ置

図45 巨勢山408号墳 玄門部付近 遺物出土状態 (S.1/15)

かれていた。いずれもほぼ完形品であるが、甗形土器の一方の把手は、出土した時点で既に剥離した状態であった。土器の出土状態からも明らかのように、周囲は攪乱の及んでいない箇所であるが、剥離した把手はついに検出することができなかった。この把手は、副葬後の土圧などによるのではなく、副葬までの段階に既に剥離していたものと考えられる。

さて、これらのミニチュア炊飯具形土器の一式のうち、甗形土器（50-24）は、鍋形（もしくは釜形）が造り付けられたものとなっている。その点で同時に出土した鍋形土器（50-26）は本来不要である。分量のうえでも、鍋形と甗形は組み合わせることが可能であるが、甗形はそれらより小さく、元よりセットになるものではない。

このことは、この種の上器の製作時の意識と、使用時すなわち副葬時の意識のギャップを示していると言えるかもしれない。少なくとも、ここで出土したミニチュア土器のセットは、特定の古墳への副葬を前提として製作されたものではなく、既製品の中から適当に三種類の土器が抽出された状況といえよう。そして、このようなミニチュア炊飯具形土器のあり方は、先に、奥壁付近で検出した須恵器について、他と区別されて管理され扱われていたと考えられた状況と際立って対照的である。

こうした差異は、大規模な登窯を要する須恵器と比較的簡便に製作可能な土師器の違いに由来する可能性が考えられよう。また、ミニチュア炊飯具形土器が、あまり一般的または普遍的な遺物ではなく、渡来系集団などの特定の人々の間で使用された器種であるとされることも関係しているのかもしれない。上のような副葬土器のあり方の違いから想定できる、古墳造営者がそれらの土器を入手した際の事情の違いには、当時における土器など物品の流通のあり方が反映されている可能性があり興味深い。

4. 玄室床面付近 西半の鉄釘（図42）

玄室の床面付近では西半部分を中心に、鉄釘が多く出土した。巨勢山408号墳の石室内外から出土した鉄釘については、図56-58に示しているが、「出土遺物」の項で後述するようにこれらは、身部の太いものと細いものに大別できる。玄室床面付近から出土した鉄釘はすべて身部が太いものである。

図42にも示したように、(57-27)・(57-38)・(57-68)などは、玄室の中軸を超えて東側にも飛び散っている状態であるが、多くは西半部分を中心に分布している。この範囲は、もと組合せ式木棺が置かれた場所に相当すると考えられる。鉄釘の分布範囲から考えれば、木棺の大きさは、長さ2.7m、幅1.5m程度のものを想定することが可能である。

5. 攪乱層その他の出土遺物

須恵器杯身（50-27）は、玄室内の流入土から出土した。調査を開始した初期段階で出土したも

ので、遺憾ながらその出土位置については、その後整理・記録した石室内流入土との層位的な対応関係が不明となってしまった。しかし、玄室内盗掘坑の比較的上位の位置にあたっていることは間違いなく、図39-4層であった可能性が高い。

土師器甕(50-28)は、南側の墳丘裾付近から出土した。口頸部の9割程が残っているが、体部は失われている。遺存した部分も割れて多くの破片になっていたが、近辺で検出したものを接合復元した。原位置を相当移動しているとみられ、元の副葬または供献の状態を推測することは難しい。

図56-58に掲げた鉄鏃の実測図のうち、(57-85-107)は身部が細いものである。これらは、玄室内から出土したものはなく、すべて墳丘西斜面の裾部付近から出土した。その出土状態は、1.5m四方程の範囲に集中して出土する状況であったので、木棺墓などの存在を予想し精査を繰り返したが、遺構を見いだすことはできなかった。しかし、鉄釘の出土のあり方が集中的であったので、墳丘西裾のごく近辺に、古墳築造後に造られた、組合せの木櫃ないしは木棺を伴う墓など、何らかの遺構が存在した可能性が高い。

第4節 出土遺物

1. 土器

巨勢山408号墳から出土した土器を、図46-50に掲げた。これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表(129-135頁)に記したので参照されたい。

図46-49に示したものは、奥壁付近西半部の床面上に置かれていたものである。蓋杯(46-1-5)のうち、出土時に(46-1-2)と(46-3-4)はセットになって身に蓋が被せられた状態で検出された。胎土や焼成のあり方、法量から見てもこれらの蓋杯はセットとして製作されたものとみられる。

これらの蓋杯の時期を示す特徴に注目してみると、まず、杯蓋に関しては口径が13.5-15.2cmと大きいこと、口縁端部の内面に段を有していること、天井部と口縁部の境界はあまり突出しない鈍い稜になっていることなどを挙げることができる。杯身は口縁のたちあがりやや内傾して内上方にのびており、端部は丸く仕上げられている。また、全体の形態は天井部と底部がそれぞれあまり膨らまないで、やや扁平な感じがすることや、(46-3)・(46-4)の内面の中央には同心円の当て具の痕跡が僅かに残っていることなども、時期比定するうえでは見逃せない。

このような特徴はMT15型式に該当しよう。ただし、杯身の端部調整が丸く収めている点などは、その中でも新しい要素と言えるかもしれない。この部分の床面上に攪乱が及んでいない状態で検出されたこれらの土器は、まさに本墳の築造時期を示している。なお、このことは隣接する巨勢山407号墳の築造期の土器が同じMT15型式の中でも古い段階に位置づけられたこととうまく符合する。すなわち、この2基の古墳は、僅かな時期差をもって隣接した地点に相次いで築造されたことが、出土土器からも窺える。

次に図47に須恵器短頸壺およびその蓋を示した。これらの土器は壺が7個体に対して蓋が7個体あって、数値のうえで対応している。しかしそれだけではなく、これらは焼成時に蓋が被せられた状態であったらしく、すべての場合において蓋の口縁部の一部が壺の肩部に付着している。このことによってセットとして製作された蓋と壺が容易に識別できたので、図47には、その関係を重視して上下に配置した。

しかし、実際の使用時すなわち副葬時においては、この関係は特に意識されていなかったらしい。「遺物出土状態」の項で記したように、これらの短頸壺は出土時に蓋が被せられていたものが2セット分があり、壺の肩部に蓋を立てかけるように添え置いていたものが3セットあった。蓋が被せられていた2セットは、(47-10・11)と(47-8・15)であった。(47-10・11)は製作時のセットに一致するが、(47-8・15)はこれには一致しない。その他の3セットは、(47-6・9)、(47-14・7)、(47-16・13)であったが、これらはいずれも製作時のセットには一致しない。(47-10・11)の一致はむしろ偶然と考えられる状況である。

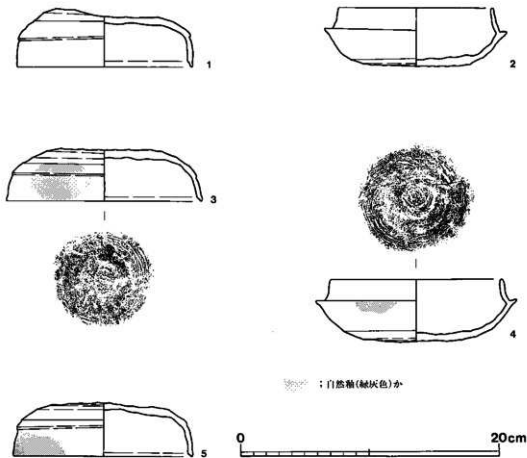


図46 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器1 (S=1/3)

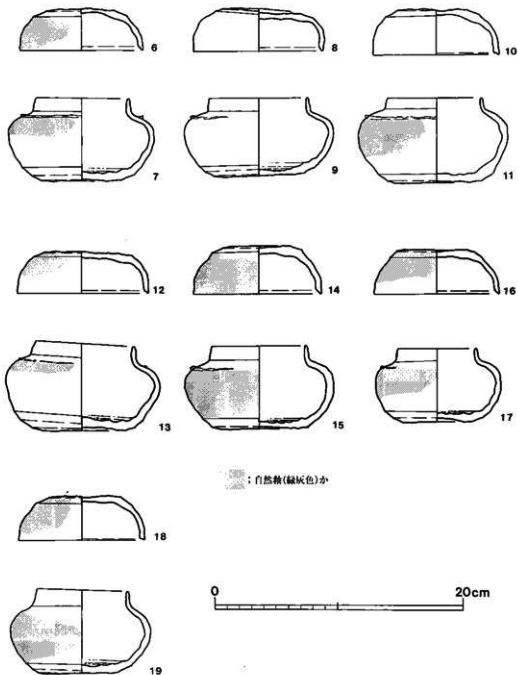


図47 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器2 (S=1/3)

図48・49に須恵器器台・広口壺および土師器壺を掲げた。

器台(48-20)は、いわゆる高杯形の器台で、杯部は口径の割に浅い。また脚部は、杯部との接合部の径が裾部径の割にあまり小さくなく、かつ長脚化の傾向にある。脚部の形態は上半部が彎曲

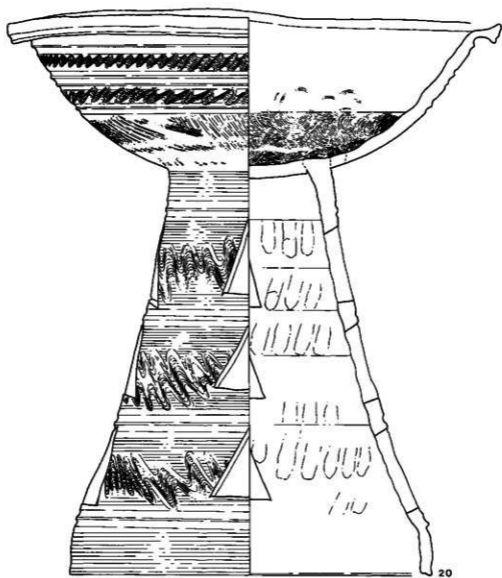


图48 巨势山408号墳 支室 床面出土土器3 (S.=1/3)

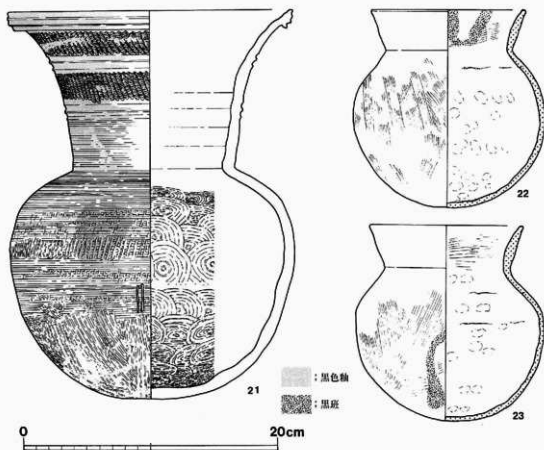


図49 巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器4 (S=1/3)

しないで直線的に裾部にまでのびている。

広口壺(49-21)は、丸底の体部にやや長頸化した頸部が付くものである。体部の最大径は、体部高の中央より上位にあり、頸部との接合部の径はその体部最大径の割に小さい。全体の器形は精美な印象を受けるものである。

土師器壺(49-22・23)は、いずれも丸底の体部に、外方に開く比較的短い口縁部をつけている。体部外面は全体にハケメ調整が行われており、比較的丁寧な作りとの印象を受ける。

以上の、奥壘付近で出土した土器は、極めて良好な一括資料として検出したことは既述のとおりである。このうち蓋杯はMT15型式に比定できるものであったが、その他の、短頸壺・器台・広口壺なども、従前の編年観に照らせば該期に併行すると考えられているもので、出土状態とも合致している。

図50の(50-24-26)は、玄室左側の側壁際の、玄門部よりやや奥壘側に寄った地点で出土した土師器ミニチュア炊飯具形土器の一式である。「遺物出土状態」の項でも既述したように、甕形土器(50-24)には、鍋形(もしくは釜形)が造り付けられているので、別の鍋形土器(50-26)は

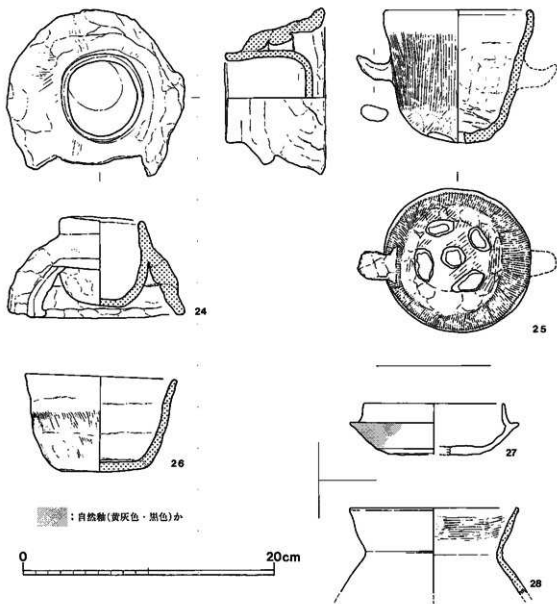


図50 巨勢山408号墳 支室 床面出土土器5ほか (S=1/3)

本来不要であるし、法量の点でも、甕形は、鍋形と甌形より小さくて、元よりセットになるものではない。ここでのミニチュア炊飯具形土器の3種は、既製品の中から適当に抽出された状況である。

2. 馬具

玄室北東隅の奥壁付近で一括で出土した馬具を、図51～55に示した。

図51の(51-1・2)は鉄製複環式鏡板である。出土状態で轡に組み付けられた状態であり、現

状でも鏡板本体に銜と引手が連結した状態であるが、ここには鏡板のみを抽出して図示した。図52にはそれが轡として組み合わせられた状態を、伸展して図化した。なお、この轡については現段階で保存処理を完了している。その際、出土時に分離していた兵庫鎖などは修復して復元した。しかし途中で折れていた銜に関しては、これを接合すると副葬時の不安定な形状になってしまい、保管のためには不適当であったので、接合していない。

さて、2個体で1セットになる鏡板(51-1)と(51-2)は基本的に同工・同大の製品である。共に、長方形の立間から左右に伸びる鉄棒を握って、それぞれを内側に小さい環、外側にそれよりやや大きい環の二重の環を作って巻き込んでいる。鏡板の中央で内側の環を接するようにして、この接点近くに、外側の環の先端も収束させてまとめている。このように立間の左右からのびてくる鉄棒の先端部は鏡板の中央で接することになるが、この部位の接合についてはその有無も含めて、肉眼や別に撮影したX線写真によっても判然としない。現状ではこの2本の先端部分が隙間のない状態で着いているので、鍛接技法によって接合されている可能性が考えられる。しかし、円環を描きながら曲げてきた鉄棒の最終的な硬度によっては、必ずしも鍛接などによる接合をしなくても、この形状を保っておいたかもしれない。また、この部分は、実際には銜先環に通されており、結果的にそれによって一つにまとめられることになっているので、その後の錆着によって現状のように隙間なく接合しているように見えるとも考えられる。

また鉄棒の握りについては、その螺旋を丹念に辿っていけば、2本置きのピッチで1回転していることが判る。すなわち、ここでは束ねられた3本の鉄棒が握られることで、鏡板の本体部分となる鉄棒が作られているかに見える。ただその場合には、先端の握りのない鉄棒部分との接合や立間部分の接合のあり方は、いずれにせよ丁寧な鍛接技法によると思われるが、その詳細が不明で、握り部分の構造もなおその実態は不明であると言わざるを得ない。

鏡板の上部に取り付く形態の立間には、幅10mm・高さ6mm程の不整形な方形の孔が開けられている。鉤金具には、この孔に付けられる4連の兵庫鎖を介して連結している。鉤金具は幅2cm・長さ5cm程の鉄製の方形板に、幅7mm・厚さ3mmの「J」字形に屈曲した鉄棒を鉤舌として鍛接したものである。兵庫鎖にこの鉤舌を引っ掛ける構造になっている。鉤金具の本体部分には、合計6個を2列に配列した鉄を打って、頭繁となる革ベルトに留めるものである。鉤舌は径5mmを測る。

その他鏡板の各部の寸法は、(51-1)の最大幅13.0cm、(51-2)の最大幅14.2cmを測る。立間は幅3.0~3.3cm、高さ0.9~1.0cmである。

このような鏡板に銜・引手を装着して轡としていた。その状態を伸展した状態で図化したものが図52である。

銜は2連式である。前述のように銜先環に鏡板の左右につくる環の接点を通して。銜先環にはさらに、鏡板の外側で、遊環を介して引手が連結されている。引手壺は別造りの瓢形のそれがつけられている。

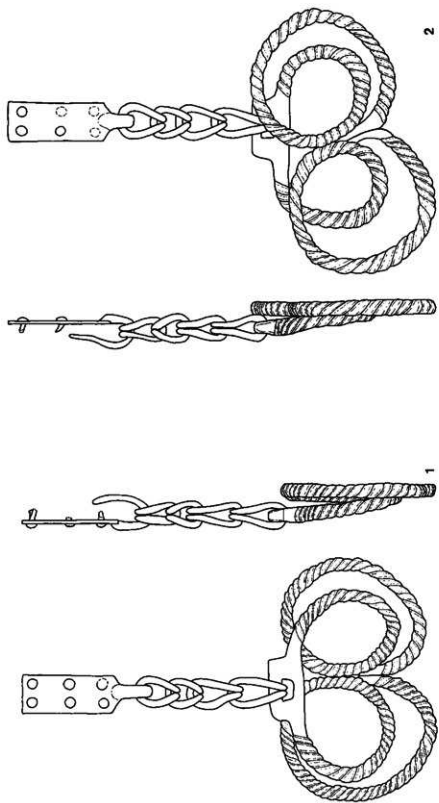


图51 广势山408号墓 女室 床面出土属具1 (S=1/2)

銜の鉄棒の断面形は、径1.2cmの円形で、噴金外径は2.5cm、銜先環の外径は3.3cmである。銜の環状部分を含めた長さは、図示状態右側は11.3cm、同左側は10.6cmである。銜先輪と噴金の方向について、同右側の銜は平行するが、同左側の銜は直交して取り付けられている。銜先環に付く遊環は長径3.3～3.6cm・短径2.5cmの長円形を呈する。

引手は、断面形が径1.0cmの円形の鉄棒で、両端に円環がつけられている。円環部分を含む長さは、図示状態右側が17.2cm、同左側が16.8cmを測る。引手壺は、断面径0.7cm程の鉄棒を屈曲して瓢形に造りだしている。先端部は、この鉄棒とは別につくった、手綱を取り付けるための円環を鍛接している。引手壺の大きさは、図示状態右側は長さ7.4cm・最大幅4.9cm、同左側は長さ8.1cm・最大幅5.1cmを測る。

ところで、図51の(51-1)と(51-2)では、図示状態で、鏡板の本体部分となる円環が、立開の前であるか後ろであるかの違いがある。このタイプの鏡板では本体の構造から裏表面を決めることはできないが、銜を装着した時点でどちらの面が外側になるかが決まる。検出した鏡板の場合、出土時に銜が途中で折れていたが、両鏡板に残った銜・引手の位置を検討すれば、鏡板の外側で遊環を介して銜と引手が連結することが判る。この位置関係から、図51に示した面が、いずれも鏡板の外側として使用されていたと判ったので、これを表面として図示したものである。この轡の製作時には、鏡板の表裏については意識されていなかったか、もしくは注意を怠ったものと理解される。

図53および図54は、木心鉄板張輪鏝である。図54に示したように、現状では木質部が腐朽して形状を残しておらず、脆弱な金具部分も断片化し、腐食して消滅していたものも少なくなかった。このため、全形に接合復元するには至らなかったが、この鏝は外面全体に黒漆が塗布されていることや、一定の幅を持った特徴的な鉄板であることから、これらが鏝の断片であることは容易に判断できた。また、柄部となる部分が2個体分存在したことから、元の数量については確実で、逆有のように2個体が1セットとして副葬されたことが判る。また、2個体分の破片が混在していることを前提にして、図54として全形の復原図を描いた。復原図の作成に際しては、各破片の内面に残る木質の木目方向を参考にして部位を一応決めていったが、元より確実なものではない。また横幅などの大きさについては、実用的な大きさであることを念頭に置いて、既出の類例を参考にする一方、遺存した鉄板の彎曲の度合いなどを考慮した。結果的に最大幅20.5cm程のものを想定した。

(53-3)・(53-4)はいずれも柄部にあたる。幅8～9mm・厚2mmの鉄板を屈曲させて、上部が閉じる「コ」字形の柄を作っている。柄の長さは8ないし8.5cm程で、側面に繋がるように曲げている。側面はこの柄部に残る部分からも、直線的ではなく丸味を持って彎曲していることが判る。柄部の幅は、(53-4)によれば3.7cmを測る。

柄部の頭部上端から1.2cmのところを中心にして、側面を貫通する径5mmの鉄棒が打たれている。鉄棒の両端は潰して固定しているらしい。木心がほとんど残っていないがこの横棒の直下に鏝受けの孔が開けられたとみられ、横棒は、特に力の掛かるこの部分の補強のために用いられたと考え

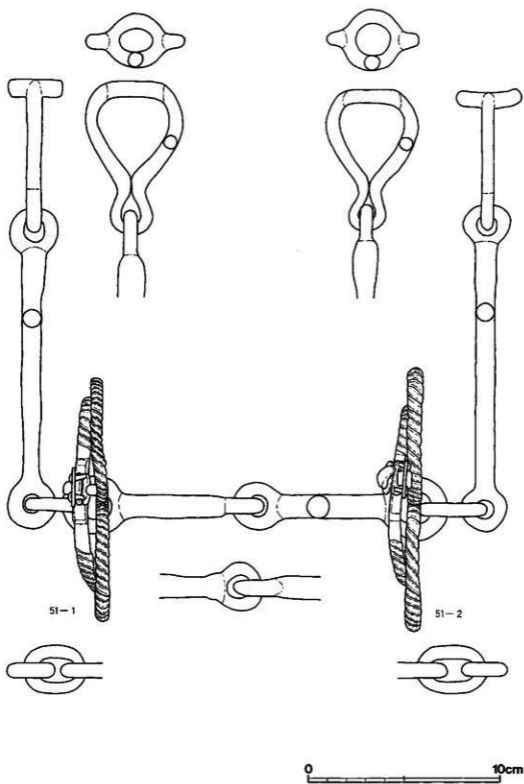


图52 巨勢山408号墳 玄室 床面出土馬具2 (S.=1/2)

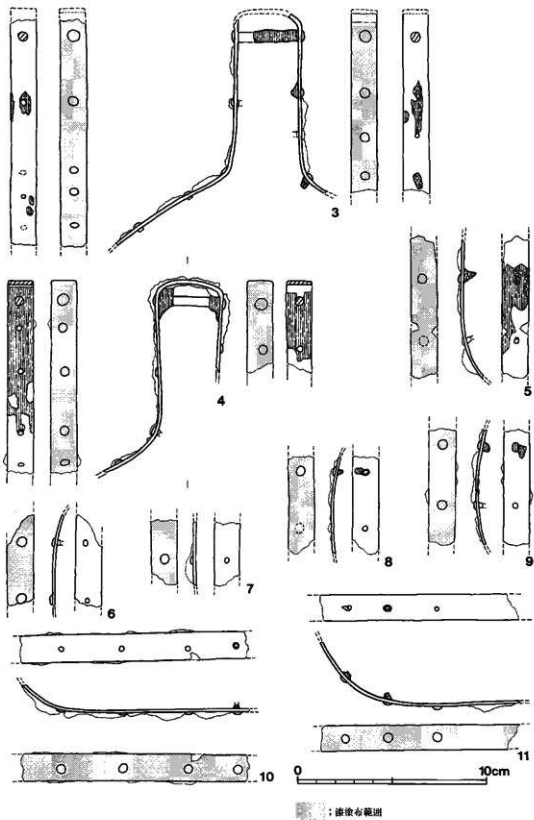


图53 巨势山408号墳 玄室 床面出土马具3 (S=1/2)

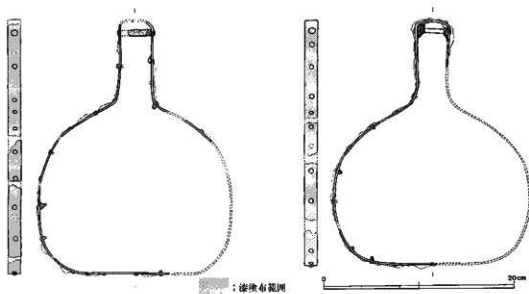


図54 巨勢山408号墳 出土鐘 復原図 (S=1/4)

られる。

図53に挙げたその他の破片は、いずれも輪鏡の側面ないしは踏込部の下部にあたとみられる。特に(53-10)・(53-11)は、彎曲した部分から直線的にのびる部位で、踏込部が直線的であるとすれば、まさに側面から踏込にかけての部位と考えることができる。これらの外面には、鉞頭径5mm程の鉞が、およそ2.5~3cm程の間隔で一列に配置され打たれている。

ところで、そのような鉞脚や鉄板の内面には、木質が僅かに残っており木目の方向を観察することができる。柄部(53-3・4)に残る木目方向は図示状態で縦方向になる。また踏込部の一部とみられた(53-10・11)の鉞脚に残る木目方向も縦方向すなわち鉞脚に対して平行方向である。これらに対して、(53-5・8・9)は、鉞脚に対して直交する方向に木目が残っている。

このように残存する木質の木目方向から、木心に用いられた木材の木取りについて推定することが可能である。すなわち本例の場合、図54として示した復原図の、図示状態で縦方向に木目のある木材の中央部が削り抜かれた一木が、木心として用いられたと考えられる。

図55-12~30として、その他の馬具を掲げた。

(55-12)~(55-15)は鉞具である。構造と形状によって2型式に分類できる。一つは(55-12)である。1本の鉄棒を屈曲させることによって、輪金と基部がつくられている。基部の一方の端部と輪金との接合は鍛接による。接合部付近の輪金の断面形が基部のそれよりも大きく、接合の様子が肉眼でもよく看取できる。刺金的一方の端を曲げて基部に巻き付けることで、回転方向の可動性を持たせつつ固定されている。長さ7.0cm・最大幅4.1cmを測る。

他方の鉞具(55-13~15)は輪金の構造が異なっている。基本的に「U」字形に曲げた鉄棒を輪金とし、その両端付近を延出してやや広く薄いものにして、ここに基部となる横棒を差し込んで固

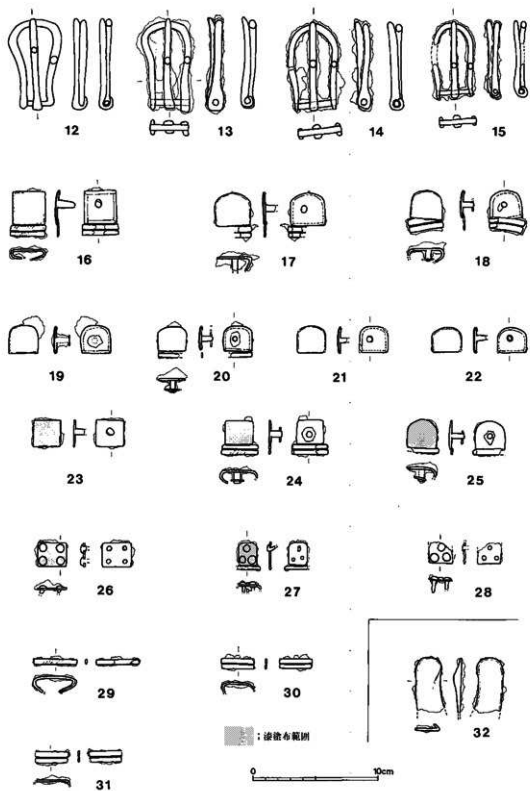


图55 巨勢山408号墳 玄室 床面出土馬具4ほか (S=1/3)

定されるものである。基部と刺金は一体構造ではないので、刺金の取り付け方法は(55-12)と同様に、刺金の一方向の端を曲げて基部に巻き付けて固定するものとなっている。

各部の寸法は、(55-13)は長さ7.0cm・最大幅4.0cm、(55-14)は長さ7.0cm・最大幅4.1cm、(55-15)は6.0cm・最大幅3.3cmである。

次に、(55-16)～(55-28)は辻金具などの脚金具である。

これらは、一見して形状や大きさにバラエティーがあるが、まず外面に施された装飾のあり方によって大別することができる。一つは、鉄地板に金銅装が施される(55-16～22)の7個体である。他方は、鉄地板に黒漆が塗布される(55-23～28)の6個体である。

しかし、そのように分類してもなお形状や大きさに差異があって、具体的に辻金具などの装着された状態を想定することは難しい。

金銅装が施されたものでは、(55-16)が方形でその他は爪形をしている。例えば(55-16)を中央の方形板としてその周囲に爪形の脚が配置されたとすれば、(55-17・18)は大きさが合うが、(55-19～22)はやや小さい。単純に一個の辻金具を想定することは、脚金具の数も合致しないことからも困難である。

黒漆が塗布されたものでは、(55-25)は爪形を呈し、その他は方形である。鉾の使い方についても相違があって、(55-26)は4鉾が、(55-27・28)は3鉾が外面から貫通している。(55-23～25)は、外面の漆のために観察が難しい側面もあるが、おそらく鉾脚の一端を裏面に鍛接して、鉾頭を外面には出さないものとみられる。

それぞれの寸法については下表にまとめた。なお表中、「長さ」は図示状態縦方向の最大長を、「幅」同じく横方向の最大幅を示している。

表2 巨勢山408号墳 出土脚金具計測表

番号	長mm	幅mm	番号	長mm	幅mm	番号	長mm	幅mm
(55-16)	26	26	(55-21)	21	23	(55-26)	20	23
(55-17)	23	25	(55-22)	20	23	(55-27)	19	15
(55-18)	23	25	(55-23)	22	21	(55-28)	—	18
(55-19)	22	23	(55-24)	19	23			
(55-20)	20	23	(55-25)	23	23			

(55-29・30・31)は黄金具である。単独になって出土したもので、本来どの金具に伴うものか不明である。(55-29)は肉眼でも刻み目らしきものが見える。刻み目は、(55-16)・(55-24)・(55-27)に伴う黄金具においても施されているらしい。

3. 不明鉄製品

図55中、(55-32)はその他の馬具とは出土位置も異なるもので、玄室の攪乱層から出土した。用途不明の鉄製品である。図示状態で上部は丸味を持った端部になっている。下部は欠損している。側面は一方の面に折り返えされて、立体的な側面観をなしている。

4. 鉄釘

図56に出土鉄釘のうち、図化可能であったものを掲げた。合計122片以上の鉄釘の破片が検出されたが、そのうち107片の実測図を示した。

これらの鉄釘を身部の太さで分類すると、断面の1辺が8～10mm角になる太いものと、6～7mmの細いものに分けることができる。また、全体が残っている個体から、それぞれの長さについてもある程度判る。太いものは、(56-5)が19.7cm、(56-6)が22.7cm、(56-7)が27.0cm、(56-8)が25.4cmである。一方、細いものは、(58-85)が全体が残っており、14.2cmを測る。このように出土した鉄釘は、その太さおよび長さにおいて、大きいものと小さいものに識別できるので、ここではそれぞれを「大形の鉄釘」・「小形の鉄釘」と呼んで記述を進める。

実測図で、大形の鉄釘は(56-1)～(58-84)であり、小形の鉄釘は(58-85)～(58-107)である。この鉄釘の形式の差は、それぞれの出土地点の差と対応している。すなわち、大形の鉄釘は、基本的に玄室内から出土している。「基本的に」と記すのは、(57-44)・(58-58)・(58-69)は墳丘の頂部付近から出土したためであるが、これらは玄室内から掻き出された土に混じっていたものと見られ、また図42に示した玄室床面付近から出土した鉄鏃は、すべてこの大形の鉄釘である。それら以外の大形の鉄釘は図39-6・7層を中心とする玄室内の攪乱層から出土した。

一方の小形の鉄釘は、墳丘西斜面の比較的狭い範囲に纏まって出土したものである。調査時においてもそのような出土状態が注意されたので精査したが、周辺は古墳の墳丘土に因する流入土が流れ込んで堆積している状態で、木棺やその他の施設を遺構として検出することはできなかった。ここで出土した鉄鏃を玄室内出土の鉄釘と比べると、その大きさ・太さは元より、先端を短く屈曲させて頭部とするものがあることなど、新しい要素を見て取れる。また、鉄釘に付着する木質が比較的多く残っていることも違いとして認識できる。

しかし、石室内出土の土器の型式がおおよそ1型式の範疇で捉えられて時期差がないことや、玄室床面に追葬の痕跡が認められないこと、小形の鉄釘が攪乱層を含めても石室内からは出土していないことから、小形の鉄釘が追葬棺に伴うとは考えられない。古墳築造後に、墳丘西斜面の一角に木棺もしくは木櫃をとまう何らかの施設が造られたと考えるのが妥当である。ただ、その時期については、これに関連する土器の出土がなかったために、ここでは明らかにしえない。

さて、大形の鉄鏃を見ると、頭部の形状がわかるものは43個体ある。頭部の上面から見た平面形は、長方形ないし正方形になる四角形が多く、その形状は、稜線が不明瞭ながら底面をそのような

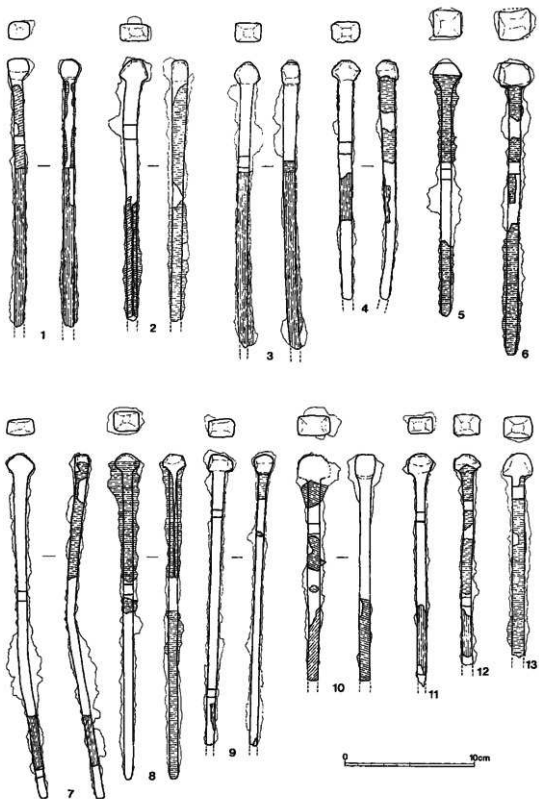


图56 巨势山408号墳 出土鉄釘 1 (S=1/3)

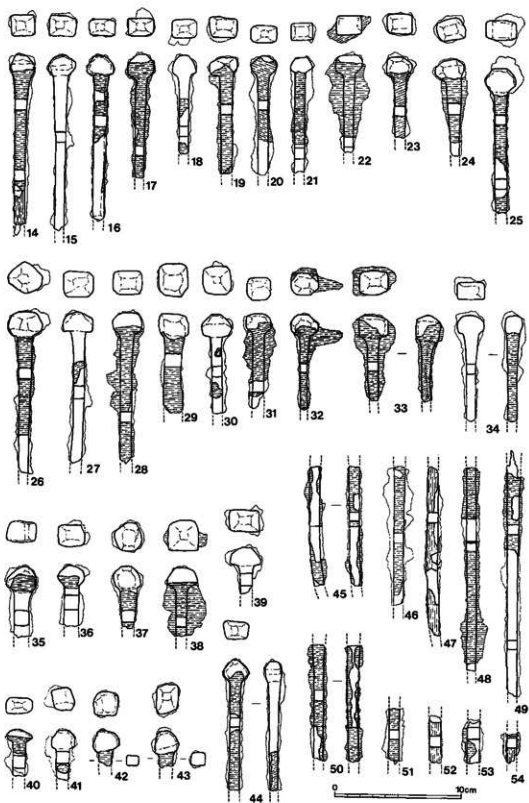


图57 巨势山408号墳 出土鉄釘 2 (S.=1/3)

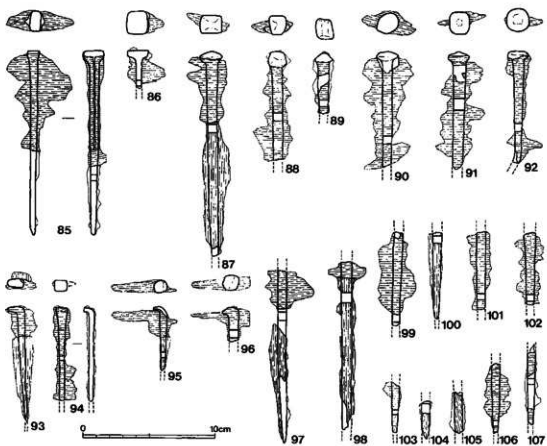
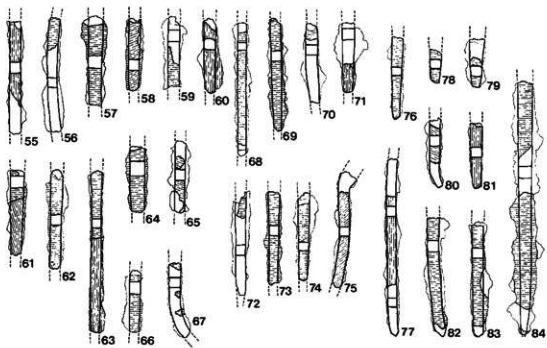


图58 巨勢山408号墳 出土鉄釘3 (S.-1/3)

四角形とする角錐台の形状になるものが多い。しかし、むしろ蒲葺形に近い(56-10)や不整形な一塊になっている(56-6)・(57-19・21・22・24・25・26・29・31・32・34・37・42)など、必ずしも齊一的ではない。頭部と身部の段も、前後左右にあるものと、左右にのみあるものが混在している。

次に身部を見ると、ここに木棺材に因する木質が残存しているものが少なからず存在した。このうち、身部の途中で木質の木目方向が変わるものがある。頭部が残っているものでみると、釘の軸方向に対して直交する方向に残っている木質の木目の方向が身部の途中で約90度振るもの(56-1・8など)と、釘の軸方向に対して頭部側は木目が直交方向であるが途中で平行方向に変わるもの(56-3・4・12・57-14など)がある。言うまでもなく、このことは木棺に使用された木材の木取りのあり方と、その組合せ木棺における鉄釘の使用された部位に関係している。しかし、全体として見れば必ずしも木質の遺存状態が良くない現状から、上に挙げた各個体の使用部位などを特定するには至らなかった。

なお、頭部と身部の境界付近から、木質の木目方向が変化するところまでの長さは、(56-1・3・4)は7.0~7.5cm程、(56-8)・(57-14)は9.0~9.5cm程、(56-12)は11.0cm程である。この長さは、棺材として用いられた木材の厚さを表していると考えられるが、計測値は必ずしも一律ではない。使用された部位によって木材の厚みに違いがあったのか、あるいは製材そのものが均一な厚みではない、やや粗い仕上げであったのかもしれない。

小形の鉄釘(58-85~107)には、頭部が残っているものが12個体あり、その形状によって分類が可能である。身部との境界に段を有して身部の太さより大きい頭部をつくり出しているものと、身部の先端を短く屈曲して頭部とするものである。前者は(58-85~92)がそれにあたり、後者は(58-93~96)がそれにあたる。ただ、前者の場合さらに頭部の形状に差異を見いだすことができる。すなわち、頭部と身部の境界の段が前後左右にあるものと左右にのみ認められるものがある。また、頭部の厚みは総体に扁平な感じがするが、(58-88)はやや厚みがある。

これらの小形の鉄釘は、前述のように遺構に伴って出土したものはないので、厳密には一括性が高いとは言えないが、墳丘西斜面の比較的狭い範囲で纏まって出土した点を考慮すれば、このような型式差のある鉄釘が同時に使用されていた可能性が高いと考えられる。

第5章 巨勢山409号墳

第1節 位置と墳丘

巨勢山409号墳は、巨勢山371号墳・407号墳・408号墳が所在する尾根の先端部に立地している。しかし、同一尾根上に所在するとはいえ、特に407号墳と408号墳は距離や立地する標高において至近の位置にあったが、409号墳は、408号墳からは直線距離で120m程離れており、基底の高さで見れば38m程の比高差がある（図2-左下 調査地位置図参照）。この間は、緩やかに繋がる尾根上の斜面となるが、ここに古墳が存在する兆候はまったくなかった。このようなことで、409号墳は、微視的には尾根の上方に位置している古墳とは地形的に隔絶しており、この観点からはいわゆる支群を形成するものではなく、単独で所在している感がある。

さて、409号墳が所在する地点は、東から西に下る尾根線上の斜面が、一旦その傾斜角度が緩やかになる傾斜変換点付近にあたっている。古墳は、東側の斜面に寄せて造られ、図59の墳丘測量図にも示したように、東側に立ち上がる斜面は、その下端をカットして、明確に墳丘の区画を行っている。図60の墳丘断面図にみえるように、この部分は古墳東側の割溝となる。一方の古墳西側の墳丘端は、図59の墳丘測量図をみると、標高174.25mと174.50mのコンターラインの間隔が広くなっており、この付近に求められることが判る。図60の墳丘断面図においても、この地点よりも上位が

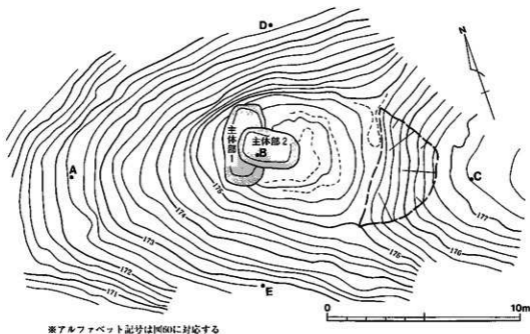


図59 巨勢山409号墳 墳丘 測量図 (S=1/200)

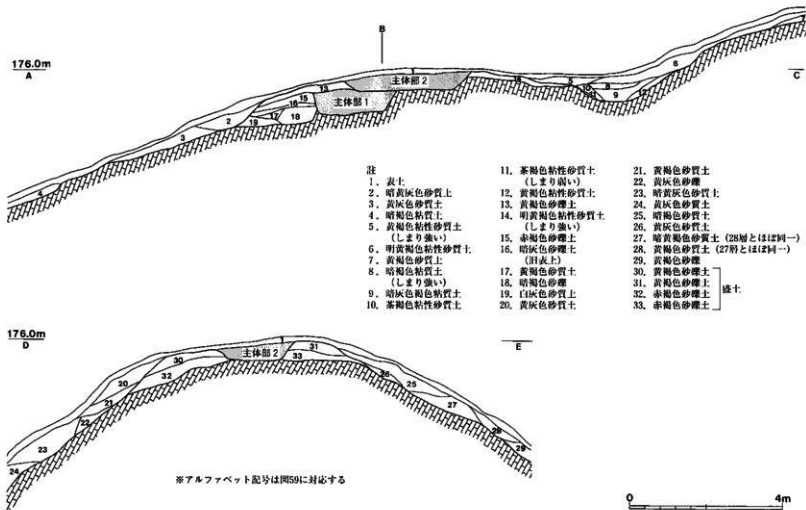


図60 巨勢山409号墳 墳丘 断面図 (S=1/100)

墳丘の盛土となり、下位は地山の削り出しになっている。これより下位の地山の傾斜は、傾斜角度が一定であることから、やはりこの地点に墳丘端を求めることが妥当である。

古墳の南北は、谷に下っていく斜面となって、ほかの調査地と同様に土砂の流出が著しかった。そのため、やはり墳丘南北の墳丘端が明瞭でないが、東西については、上記の2地点を基準に古墳の規模を測ることができる。これによれば、本墳は、径10mの円墳であることが判る。

さて本墳の地山の地形は、図60の墳丘断面図に示したように、元より東から西に下る尾根上に立地するため、西側が低いものである。本墳の場合、特に、周辺に古墳の基底となるべき平坦面に近い地形が得られなかったとみえ、墳頂部に平坦面を造るために、西側墳丘端付近には比較的厚い盛土を行っている。本墳の初葬の埋葬施設になる主体部1の「形状」の項でも後述するように、このような盛土を行った結果、主体部1の墓壇の掘り込み面は、基本的には地山面であるが、西側の一部はこの盛土の上面になっている。

墳丘は、その主体部1の墓壇を埋め戻した後、検出できた厚みでは20cm以上の盛土を行っている。追葬棺にあたる主体部2は、この盛土上面から墓壇を掘って造られたもので、これを埋め戻した高さが現状での墳頂部になっている。

巨勢山409号墳の築造時期は、初葬棺にあたる主体部1出土土器から、TK47型式期と考えられる。また、追葬の時期は主体部2に伴う土器からMT15型式期であることが判る。

第2節 主体部1

1. 形状

埋葬施設は、木棺直葬の主体部が2基検出された。その主軸は、初葬棺にあたる主体部1はおおむね南北に向け、追葬棺にあたる主体部2はおおむね東西に向けており、互いに直交している。

主体部1は、墳頂部上の西に偏った位置にあることから、主体部1が築かれた時点では追葬が予定されていたと考えられる。しかし、実際の追葬棺である主体部2は、かえって墳頂部中央よりやや西寄りに墓壇が掘られ、しかもその墓壇は、主軸の方向も主体部1とは直交する方向に向けられ、主体部1の東辺の一部を切っていた。主体部2が築かれた時には、当然それが追葬棺であることは意識されていたであろうが、先行する主体部の位置に関しては忘却されていたか、もしくはほとんど考慮されていなかったことが判る。

さて、本墳は、東から西に下る尾根上に立地するが、「位置と墳丘」の項でも述べたように、より低い西側に特に盛土を厚く行って墳丘の形態を整えている。主体部1の墓壇の掘り込み面は、基本的には地山面であるが、西側の一部はこの盛土の上面になっている。すなわち、主体部1の墓壇を掘る時点までに、地山を一定の高さに整え、西側の低い方には盛土を行って、一旦整地面を形成していたものである。

墓壇の規模は、それぞれ最大で、長さ4.08m・幅2.32m・深さ0.67mを測る。墓壇底のレベルは

175.5m

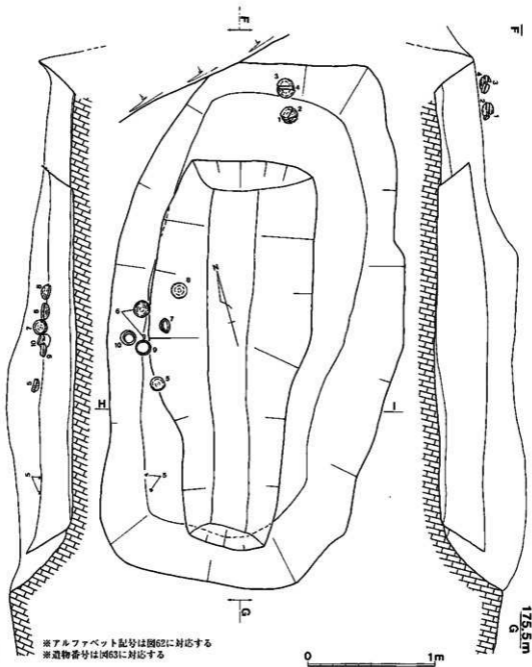


図61 巨勢山409号墳 主体部1 平面・立面図 (S=1/30)

南小口周辺の方が北小口周辺に対して約7cm高く、全体に南から北に緩やかに傾斜している。

棺は割竹形木棺を直葬したものとみられる。巨勢山古墳群においては割竹形木棺を用いることはあまり一般的ではないが、図62下半の横断面図に示したように、木棺痕跡の断面形態が円弧を描いていることから、割竹形と判断できる。なお、棺の上端は同図にもその一端を示したように、随所

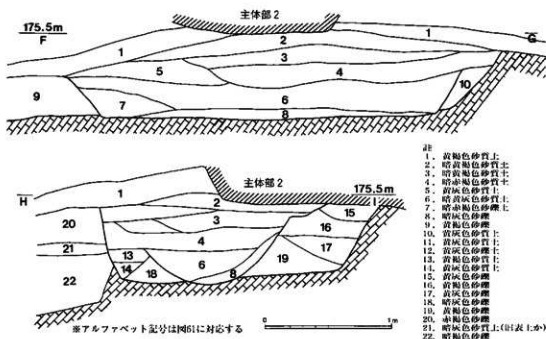


図62 巨勢山409号墳 主体部1 断面図 (S=1/30)

で崩れており検出できたレベルも一定ではなかった。しかし棺側の曲面は、このような断面だけではなく棺全体で面的に検出したものである。また、同図の縦断面図に示したように、木棺の小口部の形状は、ほぼ直線的に斜めに立ち上がるものであった。

棺の主軸は、棺底で採ればN-17度-Eに向いている。この方向は、尾根線に対しておおむね直交する方向になる。この主体部の軸方向は、周辺地形よりも方位を重視したかにみえる。

棺の規模は検出上端での長さ3.03mを測る。幅は、同じく検出上端で最大1.29mとなるが、棺の構造から上端は崩れやすく、この数値も当初の棺幅を正確に伝えるものではない。図62の横断面図に示した棺下半の円弧から、木棺に使用された木材の直径は1.03mと復元できるが、仮にそのような木材を用いたとしても、一木のどの部分までを棺身として利用したかによって、当初の棺幅は異なる。総合的に考えて、ここでは棺の上端の幅は1m程であったと推定する。なお、棺に使用された木材の直径をこのように復元した場合、棺蓋の断面形が同程度規模の円弧を描くものが用いられたとすれば、墓壙の深さが70cm程度しかないために、これを墓壙内に取めると上位の位置が墓壙の上端より高くなってしまふ。棺蓋についての痕跡がまったく残っていないためその形状を想定することは難しいが、このような条件を勘案して考えれば、棺蓋は丸太材を半裁した形状のものではなく、むしろ板材に近い形状のものが用いられたと思われる。

ところで、棺底がこのように丸味を持った形状であることから、棺を墓壙底に設置する際にはその安定を図るための工夫が必要である。図62の横断面図に示したように、墓壙底には、まずそれを

縦断する形でごく浅い溝が掘られていた。棺は、棺底の中心がこの溝にはまるように置かれ、さらに、その両脇に黄褐色ないし暗灰色砂礫土(図62-18・19層)が詰められて固定されていた。

主体部1の埋葬頭位については不明な点が多い。まず、棺内の幅は、木棺が割竹形であり、棺身の先端付近も随所で崩れているために明確ではない。下端のラインも棺の形状からすれば当然ながら不明瞭であったが、辛うじて変化点とみられるラインを見だし、図61の平面図にも示した。それによれば、北小口付近は幅37.5cm、南小口付近は30.0cmとなって、北側の方が若干広い。一方墓坑の底のレベルは、南小口付近の方が約7cm高くなっている。また、この主体部の場合、被葬者の頭位を直接的に示す副葬品も無かったことも、埋葬頭位を推定するのを困難にしている。墓坑底のレベルの違いについてはあまり顕著とは言えず、これが墓坑形成時の作業誤差の範疇に収まるとすれば、棺の幅が若干広い北側に頭位を向けていたとも思われるが、定かではない。

2. 遺物出土状態

棺内からの出土遺物はなかった。遺物は、墓坑を埋め戻していく最終段階に近い時点で取められたとみられる須恵器を検出した。木棺の西側辺の上部付近と北小口外側の上位付近の2箇所にそれぞれ置かれたものである。それらの出土位置のレベルからみて、2段階に分けて副葬行為が行われたようである。

まず棺を墓坑内に安置した後、土を埋め戻していき、木棺がほぼ見えなくなった時点で、棺の西側辺の上位付近に須恵器の一群が置かれた。杯蓋(63-5・6)・杯身(63-7~9)・短頸壺(63-10)がそれである。杯身(63-9)や短頸壺(63-10)のほか、杯蓋(63-5)・(63-6)も口縁部を上に向けた状態で出土した。杯身(63-7)は斜めに起きあがった状態になっており、杯身(63-8)は口縁部を下に向けて、すなわち伏せた状態で出土した。これらは、大きくは原位置を移動した状態ではないが、棺側辺の上位に置かれたことから、棺の腐朽に伴って若干棺の内側に崩れて流れていると思われる。杯身(63-7)が斜めに起きあがった不安定な状態で出土したのはそのためと考えられるが、杯身(63-8)は、正置されていたとすれば180度回転して天地が逆転したことになる。それほどの移動はやや考えにくい、棺の上端の形状から見ても西側付近は崩れ方が著しく、この(63-8)が他の土器からやや離れた位置にあることからみれば、元は他の土器と同様に、口縁を上に向けて置かれていた可能性も乏しくはない。

なお、杯蓋(63-5)に接合してきた小破片が、同じレベルで南に約70cmの地点で検出された。同様に杯蓋(63-6)の小破片も南に約15cmの地点で出土した。(63-5)も(63-6)も完形に近く、意識的に破砕された状況ではない。これらの小破片が、副葬時に誤って割ってしまった結果であるとすれば、この時に土器などがあまり丁寧に扱われていなかったことを示すのであろうか。

さて、このように棺の西側辺付近の上位に土器を置いた後、墓坑の埋め戻し作業が継続されるとみられる。ほぼ墓坑が土で埋め尽くされた時点で、北小口付近に2セットの蓋杯が置かれた。

杯身に杯蓋が被せられた状態で、南北に並んだ状態になっており、北側に(63-3・4)、南側に(63-1・2)を検出した。なお、この蓋と身のセットは、胎土や焼成、法量のうえでも合致しており、セットとして製作されたと考えられる。

3. 出土遺物

巨勢山409号墳主体部1の出土遺物はすべて棺外で検出した須恵器である。図63に実測図を掲げた。これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は観察表(136~138頁)に記したので参照されたい。

(63-1~4)の蓋杯は、墓壁の北小口付近に置かれていたもので、後述するその他の土器とは出土位置が異なっている。図示状態で上段に配置した(63-1・2)と(63-3・4)の杯蓋と杯身は、出土状態でもセットになって副葬されていた。これらは、胎土や焼成、法量のうえでも合致しており、セットとして製作されたと考えられる。

また、これら4個体の蓋杯はヘラ記号が刻まれている点でも共通している。しかし、(63-4)のみが「X」字状の記号であるのに対して、他の3個体は「く」字状を呈している点で違いもある。このことは、いわゆるヘラ記号の意味ないし機能に関わる問題を含むと考えられるが、ここでは、土器自体の観察と出土状態からセットとして製作されたとみられる蓋と身であってもヘラ記号のあり方が異なっている場合のあることが判る。

これらのほか、(63-9)までの9個体の蓋杯は、その形態的な特徴について、多少の細部の差異があるものの、それぞれに共通していることも多い。

杯蓋は、天井部と口縁部の境界になる稜線はおおむね外方に突出するが、その先端はやや丸味をもっているものが多い。天井部は上方にやや丸く膨らんでいる。口縁部は端部が面を成している。杯身は、たちあがり比較的長く、口縁端部は内傾する面を成している。底部は下方にやや丸く膨らんでいる。

このような蓋杯の諸特徴は、TK47型式に相当するものである。

第3節 主体部2

1. 形状

墳頂部に2基存在する主体部のうち、追葬棺にあたるものである。墳頂部では、まず地形の低い西側に盛土を行い、東側との地山面とのレベルを一定程度揃えてから、この整地面から主体部1が掘られ、さらにこの上位に墳丘を構成する盛土が行われている。主体部2の墓壁はこの盛土面に掘削される。これを元の高さまで埋め戻した状態が古墳の墳頂にあたっている。

主体部2の墓壁は、墳頂部のほぼ中央よりやや西に偏った位置に掘削され、主体部1の墓壁の東辺の一部を切っている。主体部1自体も墳頂部でも西に偏った位置に造られていることから、当初から追葬棺を予定していたとみられるが、主体部2は、主軸の向きも主体部1とは直交しているこ

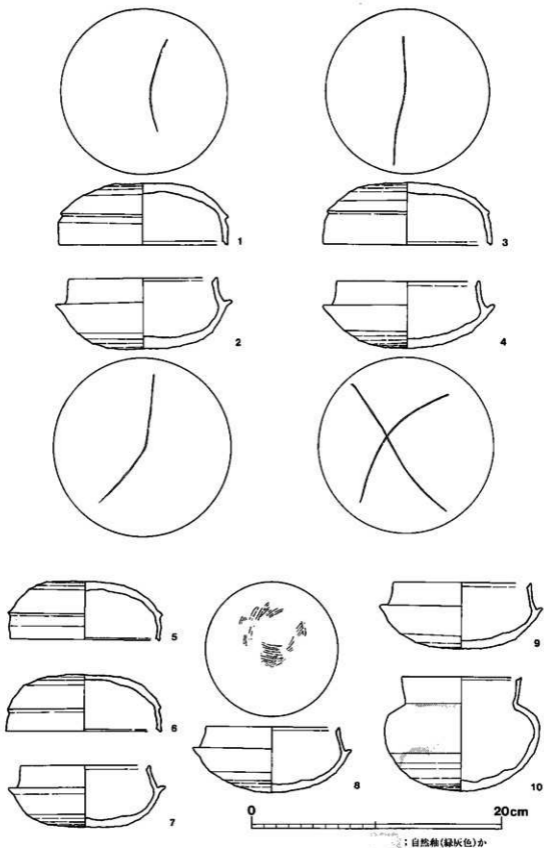


图63 巨勢山409号墳 主体部1 棺外出土土器 (S=1/3)

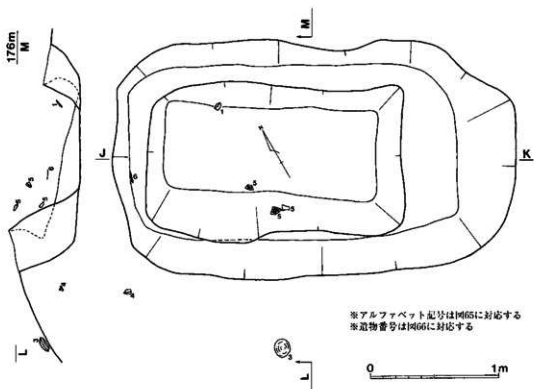


図64 巨勢山409号墳 主体部2 平面・立面図 (S.=1/30)

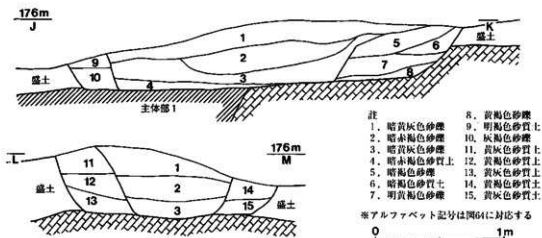


図65 巨勢山409号墳 主体部2 断面図 (S.=1/30)

とからも、その構築時には、先行する主体部1の位置は忘却されていたか、ないしはあまり考慮されなかったらしい。

墓床の規模は、それぞれ最大で長さ3.16m・幅1.87m・深さ0.55mを検出した。墓塚の規模はや

や小振りといえる。墓墳底のレベルは東小口付近が、西小口付近に比べて、約10cm高くなっている。つまり、東から西へ下るごく緩やかな傾斜面になっている。

棺は例抜き式の舟形木棺を直葬したものとみられる。棺の主軸は、棺底で探ればN-56度-Wに向けている。この方向は、この地点での尾根線の方に平行するものである。先行する主体部1においては、主軸の方向は地形よりも方位が重視されたとみられたが、主体部2の場合には、地形に合わせた状況が看取できる。

棺の規模は、検出上端での最大長さ2.02m・最大幅1.27mを測る。検出できた深さは、最大57cmである。棺底での規模は、長さ1.66m・東小口部幅0.72m・西北小口部幅0.69mを測る。

埋葬頭位については、頭部の位置を直接的に示す副葬品なども無かったために、推定が難しい。棺の幅は東西でほぼ同様であるが、墓墳底でのレベルが東側の方が約10cm高いので、頭位は東に向けていたとみられる。

2. 遺物出土状態

主体部から出土した遺物は、いずれも棺外遺物で棺内の底で検出されたものはない。棺内埋土に混じって出土した須恵器の破片があったが、それらは、当初棺上に置かれたものが棺蓋の腐朽に伴って棺内に落ち込んだものとみられる。

墓墳内棺外で出土した遺物として鉄鏃(66-6)があった。棺の西小口外側の墓墳埋土中位で出土した。棺を墓墳内に埋めていく過程で、完全には埋まりきらない段階でこの位置に置かれたものである。1個体だけの出土で東になっていた状態ではない。鋒を南に向け、棺の長軸方向とは直交する方向に置かれていた。

その他の遺物は、墓墳の外側か、ないしは墓墳を埋め戻した後にその上部に置かれたものとみられる。

ほぼ完形に近い状態で出土したものは、須恵器杯身(66-3)で、墓墳掘り込み面で、墓墳の上端より約50cm南側で、口縁部を下に向けた状態、すなわち伏せられた状態で検出された。近辺ではこれ以外に完形もしくはそれに近い状態で出土した遺物はなかった。図64の左側に示した見通し断面図にみられるように、傾斜がやや急な地点での出土であった。このため、あるいはこの付近に本来は複数の土器などが置かれていたが杯身(66-3)以外は斜面下に流出したとの可能性も考えられなくもないが、定かではない。このほか墓墳外出土の土器としては、墓墳の南西コーナーの外側で検出した杯身(66-4)がある。出土位置を図64に示し得たのは、1片だけであるが、棺の上面、墳丘南西区斜面、墳丘表土直下などとして取り上げた、合計10片の破片が互いに接合し全体の1/4程の大きさになった。

次に、棺内埋土中から出土したものは、当初は棺蓋の上面、またはさらに棺を埋め戻した後の墓墳上面に置かれたものが棺蓋の腐朽に伴って棺内に落ち込んだと考えられるものである。

平面的な位置を図64に記録しえなかったが、刀子(66-7)は棺埋土の最上層(図65-1層)で出土した。刀子は腐食が著しい状態で、大きくは、刀身部と基部に分離しており、接合もできなかったが、近辺で出土したもので、同一個体とみられる。棺を墓室内に安置した後に棺蓋上に置かれたものと考えられる。

杯蓋(66-1)は、棺埋土中、北西区の中位で出土した。口縁部の1/9程の小破片である。また接合はできなかったが、色調・胎土・調整から、この破片と同一個体と思われる杯蓋の破片が、墳丘の南西区の斜面から出土している。

甕(66-5)は、棺埋土中、南側辺付近で、中位から上位にかけての位置で出土した。棺内埋土中に混じて出土した破片は3辺であったが、これ以外に、主体部上面出土として取り上げた破片4片が互いに接合した。

以上のように、墓外で出土した須恵器は、ほぼ完形となる杯蓋(66-1)は別にして、いずれも細片化していたが、主体部の上面を中心として採集されたそれぞれの破片が接合するか、または同一個体と見なしうるものであった。このような状況から、これらの須恵器は、墓室内への棺の埋め戻しが終了した時点で、破砕されて主体部上面を中心にその破片が蒔かれるように置かれたものと理解される。

なお、主体部上面や表土直下出土として取り上げた遺物のなかには、復元図化にまでは至らなかったが、土師器の細片が20片程あった。ただし、そこには瓦器片が1片と土師皿の口縁部の一部1片が含まれていた。その他の土師器は時期の特定が型式学的には不可能な程細片化していたが、それらの中に古墳時代のもが含まれるとすれば、主体部上での土器の破砕行為は、須恵器だけではなく土師器についても行われたことになるが、実態は判らない。

また、東側周溝埋土中位から下位にかけての出土品に、古墳時代の土師器壺とみられるもの細片50片余りがあった。胎土の特徴からこれらは同一個体と見なしうるもので、元は多くの土器が供献されたという状況ではない。墳頂部近くから流出した土に含まれていたとすれば、主体部の上面での土器の破砕行為に関係した土器であった可能性がある。ただ、本墳の場合、このような土器の破砕行為を伴った主体部2に先行する、古墳築造期の主体部1が存在するので、この土師器壺はいずれの主体部の構築時期に帰属するのか、不明と言わざるをえない。

3. 出土遺物

巨勢山409号墳主体部2から出土した土器は、(66-1~5)である。これらの形態や調整・法量を始めとする詳細は、観察表(138~139頁)に記したので参照された。

これらの須恵器はいずれも棺内に副葬されたものではない。「遺物出土状態」の項でも記したように、(66-1)・(66-2)・(66-5)は棺の上面もしくは棺内に落ち込んだ埋土中で検出した。棺の埋め戻し後にその上部に置かれたものであるが、その際に土器を破砕したらしく、この3

第6章 まとめ

今次調査においては巨勢山371号墳・407号墳・408号墳・409号墳の発掘調査を行った。以下に各古墳の調査成果の要点をまとめる。

巨勢山371号墳は、径21mの円墳である。古墳の築造期は、MT15型式期の内でも比較的古い段階が想定される。

主体部は、墳頂部に、初葬棺にあたる主体部1と、追葬棺にあたる主体部2の2基の木棺直葬の施設が存在した。棺の形状は、いずれも巨勢山古墳群では通有の舟形木棺とみられる。

主体部1は、墓壙の規模は長さ4.30m・幅2.50m・深さ0.6mを測る。木棺の規模は、検出上端での長さ3.45m・同幅1.27mを測る。棺の主軸はN-21度-Eに向いている。埋葬頭位は、棺底の赤色顔料の分布範囲の位置などから、北向きであったとみられる。

主体部1に伴う遺物はすべて棺外で検出された。出土遺物の一覧は以下の通りである。

<棺外>

鉄鍬12以上、鉄鎌1・須恵器甕1（以上、検出した棺の上端に近い位置）

刀子1・砥石1・須恵器杯蓋3・杯身3（以上、墓壙の掘り込み面がそれよりやや上位）

主体部2は、墓壙の規模は長さ4.87m・幅3.22m・深さ0.7mを測る。木棺の規模は、検出上端での長さ3.60m・幅1.42mを測る。棺の主軸はN-24度-Eに向いている。埋葬頭位は、棺の形状や、ガラス玉などの頭部の位置を推定できる遺物の出土位置から、南向きであったとみられる。

主体部2に伴う遺物は、棺内遺物と棺外遺物に大別できる。以下に出土位置ごとに遺物の一覧を記す。

<棺内>

ガラス玉63 刀子1（以上、棺内底の中軸線上付近、中央寄り）

須恵器杯蓋5・同杯身4・馬具（鉄製素環鏡板付轡1・鉸具2・辻金具などの方形金具10）
（以上、棺内南小1付近）

<棺外>

須恵器甕1・高杯1（以上、棺上部）

馬具（円環状雲珠1・鞆2・鉸具1）（以上、墓壙上中央より東寄り）

主体部2に伴う遺物は、以上のほか、棺内埋土中から出土した須恵器高杯片があり、また、墳頂部表土直下から出土した多数の須恵器甕片（元は1個体か）も、主体部2に伴うものとみられる。

巨勢山407号墳は、径13mの円墳である。古墳の築造期はMT15型式とみられる。横穴式石室を

埋葬施設とする。また、初葬に用いられた棺は、鉄釘の存在から組合せ式木棺と考えられる。

横穴式石室は、主軸をN-10度-Eにとり、おおよそ南方向に開口している。石室の規模は、石室の全長5.62m・玄室長3.48m・奥壁幅1.78m・玄室最大幅1.95m・玄門部幅1.80mを測る。石室内は、大きく攪乱されていたが、奥壁付近に追葬面が残っていた。追葬の時期は飛鳥I期とみられる。

出土遺物は、従って古墳築造期に伴うものと追葬に伴うものに大別できる。以下にその一覧を記す。

<古墳築造期の遺物>

須恵器杯身5（以上、墳丘上、東周溝側付近）

飯飾り金具1・不明鉄製品1（以上、玄室内初葬面上）

須恵器杯蓋1・金銅装耳環1・馬具（鉄製素環鏡板付轡1・伏鉢状雲珠1・鞍2・鉸具2・脚金具4・留金具2・資金具5）・鉄織10以上・不明鉄製品3・鉄釘6以上（以上石室内攪乱層）

須恵器広口壺1（以上、墳丘東側周溝内埋土）

<追葬時の遺物>

土師器壺1（以上、奥壁付近追葬面東側）

須恵器杯身4・同杯蓋4・同高杯1・同長頸壺1・同台付長頸壺・土師器甕2（以上、奥壁付近追葬面西側）

鉄釘7以上（以上、石室内攪乱層）

以上のほか、巨勢山407号墳からは、古墳には直接関わらない、須恵器水甕1・土師器皿2などが出土している。これらは古墳に対する攪乱の時期を示すものと考えられる。

巨勢山408号墳は、径17mの円墳である。古墳の築造記はMT15型式期と考えられる。隣接する巨勢山407号墳も同じMT15型式期の築造と考えられるが、出土土器の比較からこの408号墳の方が後出すると位置づけられる。横穴式石室を埋葬施設とする。また、408号墳は初葬のみ行われた単次葬墳で、これに用いられた棺は、鉄釘の存在から組合せ式木棺と考えられる。

石室は主軸をN-21度30分-Wにとり、おおよそ南南西に開口している。石室の規模は、石室の全長6.30m・玄室長3.87m・奥壁幅2.27m・玄室最大幅2.65m・玄門部幅2.22mを測る。

玄室床面は、中央部の一部を除いては攪乱を受けておらず、このため副葬品などの遺物が原位置を保った良好な状態で検出できた。以下に出土遺物の一覧を記す。

<玄室床面>

須恵器杯身2・杯蓋3・同短頸壺7・同短頸壺蓋7・同器台1・同広口壺1・土師器壺2（以上、奥壁付近西半）

馬具（鉄製複環式鏡板付轡1・木心鉄板張輪轡2・鉸具4・脚金具13・資金具3）

（以上、奥壁付近東半）

ミニチュア甕形土器1・ミニチュア甌形土器1・ミニチュア鍋形土器1

(以上、左側壁支門付近)

鉄釘44以上(頭部の数による。玄室床面西半を中心とするが、攪乱層出土のものを含む)

出土遺物はこのほか、石室内攪乱層出土の須恵器杯身1・不明鉄製品1があり、墳丘東周溝埋土中からも土師器甕1が出土している。また、墳丘西斜面の一面から、鉄釘11個体以上が出土した。この鉄釘については、古墳築造後に木棺ないしは木櫃を伴う何らかの施設が存在した可能性が考えられるが詳細は明らかにならなかった。

巨勢山409号墳は、TK47型式期に築造された径10mの円墳である。

主体部は、墳頂部に、初葬棺にあたる主体部1と、追葬棺にあたる主体部2の2基の木棺直葬の施設が存在した。

主体部1は、墓竈の規模は長さ4.08m・幅2.32m・深さ0.67mを測る。木棺は、割竹形木棺が用いられたとみられる。棺の規模は検出上端での長さ3.02mを測る。棺幅は同じく検出上端での最大幅1.29mを測るが、元の棺身の上端の幅は1m程であったと推定される。棺の主軸はN-17度-Eに向けている。

主体部1に伴う遺物はすべて棺外で検出された。出土遺物の一覧は以下の通りである。

<棺外>

須恵器杯身3・同杯蓋2・同短頸壺1(以上、棺西長辺の上位)

須恵器杯身2・杯蓋2(以上、墓竈北小口埋土上面付近)

主体部2は、墓竈の規模は長さ3.16m・幅1.87m・深さ0.55mを測る。木棺は、舟形木棺が用いられたとみられる。木棺の規模は、検出上端での最大長2.02m・同幅1.27mを測る。棺の主軸はN-56度-Wに向けており、主体部1の主軸方向とは、ほぼ直交する関係にある。埋葬頭位は、棺底のレベルから、東向きであったとみられる。主体部2の構築時期は、以下の出土遺物からMT15型式期と考えられる。

主体部2に伴って出土した遺物は、いずれも棺外遺物で棺内の底で出土したものはない。以下に出土遺物の一覧を記す。

<墓竈内棺外>

鉄鍬1(西小口付近墓竈埋土中位)

<墓竈外>

須恵器杯身2・同杯蓋2・同甕1・刀子1(このうち、須恵器杯身1・甕・刀子は、棺内埋土中からの出土で、元は主体部上面にあったものが棺内に落ち込んだもの。)

以上が今次調査によって発掘調査した4基の古墳のあらましである。本書で報告した通り、それ

らはいずれも残存状況が良好で、例えば、408号墳では、横穴式石室墳でありながら、出土遺物の多くが副葬時の状態を保っており、内容においても比較的類例の少ない馬具が出土するなど注目すべきものがあった。巨勢山古墳群においては、近代以降も、良好な花崗岩材の採取地にもなってきた経緯があり、横穴式石室は石材採取の格好の標的とされ、石室石材の大半が抜き取られている場合も少なくない。そのような中で、今回調査した407号墳・408号墳は羨道部の天井石を残していたことは、むしろ希有な事例であった。

発掘調査終了後、現地は、文化財保護法第57条の2に基づく発掘届として提出された当初計画通り土砂採取地となって、古墳は消滅し、現在に至っている。

また、現地調査を平成10年に終えたが、その後は別の発掘調査を担当しつつ、整理作業はそれらの合間を見つけて少しずつではあるが進めてきた。しかしその間すでに6年の期間が経過してしまった。本書においては、事実報告の過程で気づいたことはその都度指摘したが、できるだけ、知り得た事実と観察結果の詳細を提示することに努め、特別な考察編を付さずに一書としたのは、このような期間の経過を考慮したことが一因である。なお不足の点はあろうが、言うまでもないことながら可能な限り早期に発掘調査によって知り得た事実を公に開示したいと考えた結果であることを諒とされたい。

文献註

- 木許 守2001 「鴨部波1号墳と鴨部波遺跡」【鴨部波1号墳調査概報】御所市教育委員会編 学生社
田中一広1984 「御所市巨勢山古墳群（タケノクチ支群）発掘調査概報」【奈良県遺跡調査概報（第2分冊）1983年度】
田辺昭三1966 「陶邑古窯址群Ⅰ」（『研究論集』第10号平安学園考古学クラブ）
永井正浩2002 「巨勢山75号墳の横穴式石室について」【奈良県御所市巨勢山古墳群Ⅳ－巨勢山74・75号墳の調査－】（『御所市文化財調査報告書』第26集）
西 弘海1986 「七世紀の土器の時期区分と型式変化」【土器様式の成立とその背景】 真陽社
松本洋明編1988 「十六面・薬王子遺跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第54冊）

表3 巨勢山371号墳 出土土器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
3-1 須忠器 甕 371号墳 埴壇	<p>甕体部の破片。全体の法度は知り得ない。内面の当て具痕跡の上からヨコナデが施されているが、それをすり消す程にはなされていない</p> <p>・ 外面 タタキ 内面 同心円の当て具痕跡の上からヨコナデ</p> <p>・</p>	直径2mm大のチャートを含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。	良好	<p>・ 淡青灰色 ・ 濃灰色 ・ および ・ 黄灰色 ・ 淡灰色</p>	3-2と同一個体と思われる。
3-2 須忠器 甕 371号墳 埴壇	<p>甕体部の破片。全体の法度は知り得ない。内面の当て具痕跡の上からヨコナデが施されているが、それをすり消す程にはなされていない</p> <p>・ 外面 タタキ 内面 同心円の当て具痕跡の上からヨコナデ</p> <p>・</p>	直径5mm大の花崗岩粒を含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。	良好	<p>・ 淡青灰色 ・ 濃灰色 ・ および ・ 黄灰色 ・ 淡灰色</p>	3-1と同一個体と思われる。
10-1 須忠器 杯蓋 371号墳 主体部1 棺外	<p>口径 13.8cm (口縁部を僅かに欠損) 器高 4.0cm</p> <p>口縁部は僅かに外反して下方にのびる。口縁部は丸みを帯びつつも突出し、内面に段をなす。天井部と口縁部の境界は、凹線となるがその上辺は丸みを帯びて鈍く突出気味になる。</p> <p>・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ 外面 ヨコナデおよび天井部2/3はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデおよび停止した後の不定方向ナデ</p> <p>・</p>	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。直径0.5mm以下の雲母若干を含む。直径0.5mm~1mmの黒色粒を多く含む。	良好	<p>・ 淡青灰色 ・ 淡黄灰色 ・ 淡青灰色</p>	焼成・胎土からみて10-4とセットになると思われる。ただし、口縁が必ずしもうまく合わない。焼け余みのためか。
10-2 須忠器 杯蓋 371号墳 主体部1 棺外	<p>口径 14.0cm (口縁部を僅かに欠損) 器高 4.1cm</p> <p>口縁部は、内側しつつ下がるが端部付近で外反して僅かに開く。端部は丸く収めており、丸みがあって鈍い感じがする。端部内面は段をなしている。天井は、歪に窪み高さも一定でなく傾斜している。天井部と口縁部の境界は、上下からのヨコナデによって接をつくるが、突出せず丸い。</p> <p>・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ 外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ</p> <p>・</p>	直径0.5mm大の石英・長石を含む。0.5mm以下の黒色粒を若干含む。	良好	<p>・ 淡青灰色 ・ 淡青灰色 ・ 淡青灰色</p>	焼成・胎土からみて10-5とセットになると思われるが、10-5は焼成前の型みが著しく、必ずしも口縁が合わない。
10-3 須忠器 杯蓋 371号墳 主体部1 棺外	<p>口径 14.0cm (口縁部の一部を欠損) 器高 4.8cm</p> <p>口縁部は、ほぼ直線的に下方に下がるが、端部付近で僅かに外反する。端部は丸いが、内面には僅かな段がある。天井部と口縁部の境界は、鈍く丸い接線となりその下側は凹線状にくぼむ。天井部はあまり膨らまず、頂部付近は平らになっている。</p> <p>・ 外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・ 外面 ヨコナデおよび天井部1/2はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ</p> <p>・</p>	直径0.5mm以下の長石を含む。0.2mm以下の石英・チャートを若干含む。	良好	<p>・ 淡青灰色 ・ 淡青灰色 ・ 暗赤紫色</p>	<p>焼成前の器形の歪みが生じており、口縁が正円にならない。</p> <p>焼成・胎土からみて10-6とセットになると思われるが、互いに嵌んでおり、口縁が合わない。</p>

図一遺物番号 器種 出土場所	形状と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成 色調・内面 ・外面	備考
10-4 須志器 杯身 371号墳 主体 部1 袖外	口径 12.2cm (口縁部を僅かに欠損) 器高 4.4cm たちあがりは内傾した後、中位でごく僅かに屈曲して上方にのびる。口縁部端部は丸く収めている。受け部はやや外上方に広がり、端部は丸い。たちあがりとの境界付近は凹線となって窪む。底部は扁平な感じに彫らまない。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。直径0.5mm以下の雲母若干含む。直径0.5mm~1mmの黒色粒を多く含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	焼成・胎土からみて10-1とセットになると思われる。ただし、口径が必ずしもうまく合わない。やけ歪みのためか。
10-5 須志器 杯身 371号墳 主体 部1 袖外	口径 12.2cm (口縁部を僅かに欠損) 器高 4.3cm たちあがりは、内傾して上方へのび端部は丸く収めている。受け部は外上方にのびて、上下からのヨコナデによって薄く仕上げられている。受け部とたちあがりの境界は爪先によって生じたとみられる幅の狭い凹線状の溝がついている。底部は扁平な感じに彫らまない。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデおよび静止した後の不定方向ナデ	直径0.5mm大の石英・長石を含む。0.5mm以下の黒色粒を若干含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	焼成前の器形の歪みが生じており口径が正円にならない。 焼成・胎土からみて10-2とセットになると思われるが、歪みのために必ずしも口径が合わない。
10-6 須志器 杯身 371号墳 主体 部1 袖外	口径 12.5cm 器高 4.7cm たちあがりは内傾した後、全体に彎曲して上方へのび端部は丸く収めている。受け部は外上方に開き端部は丸い。底部は扁平で彫らまない。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)後ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石を含む。0.2mm以下の長石・石英・チャートを若干含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・暗赤紫色	焼成前の器形の歪みが生じており、口径が正円にならない。 焼成・胎土からみて10-3とセットになると思われるが、互いに歪んでおり、口径が合わない。 体部外周の1/2に緑色釉、自然釉か。
10-7 須志器 甌 371号墳 主体 部1 袖外	体部最大径 10.5cm (残存1/2からの回転復原) 残存高 7.1cm 残存した胴部下端の前縁から、体部最大径に対して胴部径が比較的太いことが判る。体部上半に2条の凹線を描きその間に8条を1単位とする歯状列点文を施して文様帯とする。ここに径1.6cmの円孔を外側から穿っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ後ヨコナデ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径1mm大の石英・チャートを含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。	良好 ・濃灰色 ・濃灰色 および ・淡灰色 ・淡灰色	外面に黒色釉。
16-1 須志器 杯身 371号墳 主体 部2 袖内	口径 14.6cm (完形) 器高 4.5cm 口縁部は僅かに開きつつ下方に下る。口縁部端部は凹をなし、中央部は凹線状に窪む。天井部と口縁部の境界は凹線になるが、その上辺はごく僅かに鋭く突出する。天井部は扁平な感じにあまり彫らまない。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナデ	直径1~2mm大のチャートを含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。	良好 ・濃灰色 ・濃灰色 ・濃灰色	焼成・胎土からみて16-2とセットになる。口径も合致する。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	色調・内面 ・外面	備考
16-2 須忠器 杯身 371号墳 主体 部2 棺内	口径 12.8cm (完形) 器高 4.8cm たちあがりは、内傾して端部付近で僅かに屈曲して上方にのびる。口縁端部は面をなし、中央部は窪んでいる。端面の両辺の処理は比較的鋭い。受け部は外方に広がる。低いヨコナゲによって薄く仕上げられており、たちあがりとの境界は凹線状の溝になっている。底部は比較的扁平を感じする。ヘラケズリの及んでいない体部外面には、幅7mm単位の粘土縁巻き上げ痕が明瞭に観察できる。 ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲおよびヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナゲ	直径1~2mm大のチャートを含む。0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・濃灰色	焼成・胎土からみて16-1とセットになる。口縁も合致する。底部外面に、開器時に下にあった馬具の筋が付着している。
16-3 須忠器 杯蓋 371号墳 主体 部2 棺内	口径 15.2cm (口縁端部を僅かに欠損) 器高 4.9cm 口縁部はやや内傾しつつ下方に下がるが、端部付近で僅かに外反して開く。口縁端部は内傾する面をなし、中央部は凹線状に窪みに窪む。端部先端ははにぶく丸い。天井部と口縁部の境界は、僅かに突出する様になる。天井部は、やや高く頂部が膨らんだ感じがある。天井部外面のヘラケズリの及ばない部位には、幅5~6mm単位の粘土縁巻き上げ痕が残っている。 ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲおよび天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナゲ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。1~2mm大の石英・長石・チャートを含む。	やや軟	・青白灰色 ・青白灰色 ・青白灰色	焼成・胎土からみて16-4とセットになる。口縁も合致する。
16-4 須忠器 杯身 371号墳 主体 部2 棺内	口径 13.0cm (完形) 器高 5.2cm たちあがりは内傾して端部付近で僅かに上方に屈曲する。端部は面をなし中央は凹線状に窪んでいる。端面の両辺の処理は比較的はぶく、上端は特に丸い。受け部は外方に広がる。端部ははにぶく丸い。底部は平らであるが、その面積が狭いため、器高が高い印象を受ける。ヘラケズリの及んでいない体部外面には幅5~6mmの粘土縁巻き上げ痕が明瞭に残っている。 ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナゲ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートをかなり含む。1~2mm大の石英・長石・チャートを含む。	やや軟	・青白灰色 ・青白灰色 ・青白灰色	焼成・胎土からみて16-3とセットになる。口縁も合致する。
16-5 須忠器 杯蓋 371号墳 主体 部2 棺内	口径 15.4cm (完形) 器高 4.7cm 口縁部はごく僅かに開きつつ下方に下がる。口縁端部は面をなし中央部は凹線状に窪む。端面の外側面に当たる端部先端はやや丸く鋭いが、内側の辺は比較的明瞭な溝になっている。天井部と口縁部の境界は凹線状になってその上辺も突出しない。天井部はあまり膨らまないが、全体の形状はやや丸みを持っている。天井部外面のヘラケズリが及ばない部位には幅7mm単位の粘土縁巻き上げ痕が明瞭に残っている。 ・外面 ヨコナゲ ・内面 ヨコナゲ ・外面 ヨコナゲおよび天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナゲ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。1~2mm大の石英・長石・チャートを含む。	やや軟	・青白灰色 ・青白灰色 ・青白灰色	焼成・胎土からみて16-6とセットになる。口縁も合致する。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	外面 色調・内面 ・裏面	備考
16-6 須忠器 杯身 371号墳 主体 部2 楕円	口径 13.3cm (完形) 器高 5.6cm たちあがりは内傾して中位で上方にやや屈曲する。口縁端部は面をなし中央部は凹線状に僅かに窪む。端面の両辺はあまり狭くなく丸みを持っている。受け部は外上方に広がる。比較的厚みが均一、端部は丸い。たちあがりとの境界付近は凹線状の溝になっている。底部は丸くやや膨らんだ感じがする。ヘラケズリが及ばない体部外面は幅8~10mm単位の粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残っている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。1~2mm大の石英・長石・チャートを含む。	やや軟	・青白灰色 ・青白灰色 ・青白灰色	焼成・胎土からみて16-5とセットになる。口径も合致する。
16-7 須忠器 杯蓋 371号墳 主体	部2 楕円 口径 14.0cm (天井部を僅かに欠損) 器高 5.2cm 口縁部は僅かに内彎しつつ下方に下り、端部付近で強いヨコナデによってごく僅かに屈曲する。口縁端部は薄いが丸く、内面に波をなす。天井部と口縁部の境界は、浅い凹線になっている。天井部の頂部は平らであるがその面積が狭く、全体としては天井部が膨らんでいる印象を受ける。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の1/2ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の長石・石英・雲母をかなり含む。2~10mm大の花崗岩顆を僅かに含む。	良好	・暗青灰色 ・暗灰色 ・暗灰色	
16-8 須忠器 杯身 371号墳 主体 部2 楕円	口径 12.2cm (完形) 器高 5.5cm たちあがりは内傾し、端部付近で上方に屈曲する。口縁端部は内傾する面をなし、中央部は凹線状に僅かに窪む。端面の両辺は比較的鋭い稜をなす。受け部は外上方に広がり、やや厚みがあって端部は丸い。たちあがりとの境界は凹線状の溝になっている。底部はやや丸く膨らんでいる。ヘラケズリの及ばない体部外面には幅7mm単位の粘土紐の巻き上げ痕が残っている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・チャート・雲母をかなり含む。	良好	・濃灰色 ・濃青灰色 ・濃青灰色	底部外面に「X」字状のヘラ記号。 底部外面に、副葬時に下にあった馬具の筋が付着している。
16-9 須忠器 杯蓋 371号墳 主体 部2 楕円	口径 14.5cm (完形) 器高 4.6cm 口縁部は内彎しつつ下方に下り、端部付近で外反して屈曲する。口縁端部は外傾する面をなし、中央部は凹線状に窪む。端面の両辺は強いヨコナデによって仕上げられており、特に内側の辺は比較的鋭い稜をなす。天井部と口縁部の境界は凹線になっているが、部分的にその上辺が短かいながらも鋭い稜となって突出している。天井部は比較的扁平である。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の1/2ヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。1mm以上の石英・チャートを僅かに含む。	良好	・濃青灰色 ・濃青灰色 ・-	焼成前の器形の歪みが生じており、口縁部がやや正円にはならない。

同一遺物番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備 考
16-10 須恵器 杯身 371号墳 主体 部2 棺内	口径 12.8cm (口縁部を覆かに欠損) 器高 5.3cm たちあがりは、内傾して肩部付近で傾かに屈曲して上方にのびる。肩部は内傾する面をなし、中央部は窪んでいる。肩部の両側の処理は比較的短く、肩部先端は尖り気味になる。受け部は外上方にのびる。受け部はやや厚みがあり肩部は丸い。たちあがりとの境界は門縁状の幅の狭い溝になっている。底部は全体にやや丸く膨らんだ感じがする。ヘラケズリの及んでいない体部外面には、幅7mm単位の筋七線巻き上げ痕が明瞭に残っている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(口口回転方向左廻り) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。1mm大の長石・チャートを右下含む。1mm大の赤色粒を覆かに含む。	やや軟	・濃白灰色 ・淡白灰色 ・淡白灰色	
16-11 須恵器 杯身 371号墳 主体 部2 棺内	口径 13.7cm (完整) 器高 5.7cm たちあがりは、内傾して彎曲しつつ上方にのびる。口縁部は丸く内面に深い段をなす。受け部は外方に広がり、受け部上面は、たちあがりとの境界から先端まではほぼ水平面になっている。受け部先端は丸い。底部はあまり扁平な感じはないが、成形段階での器形の歪みがあり正置した時に口縁部が傾く。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(口口回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む。黒色粒を若干含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	受け部に、蓋口縁部の筋十線跡が残っている。焼成時または焼成時までに付着したものは、体部から底部にかけての外面に黒色軸。自然軸か。
17-12 須恵器 甕 371号墳 主体 部2 棺外	口径 13.6cm (口縁部を覆かに欠損) 器高 13.2cm 頸部は、体部最大径の割に比較的大く、外上方にのびる。頸部は比較的短い。頸部と口縁部の境界は、上下からつまみ出した尖帯風の段になっており、口縁部はここから内野気味に開いている。体部は、肩部が明瞭ではなく全体に丸い。 ・外面 ヨコナデ後、口縁部は3条を単位とする原体幅6mmの櫛歯波状文を施す。肩部は、5条を単位とする原体幅9mmとみられる櫛歯波状文を頸部の上下に施した後、改めてその中央部に重ねて行っている。波状文はいずれも規則的短い波文になっており、施文のあり方が丁寧な感じを受ける。 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ後、体部上下に2条の門縁文を施し、その間に櫛歯列点文を密に施す。その後、列点文上から径1.5cmの円孔を外側から穿っている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm大の石英・長石を含む。	良好	・濃青灰色 ・濃灰色 ・暗赤紫色	口縁部内面に黄褐色の異物が、同心円を築くように2列になって点々と付着している。一部は流れた状態で凝固しており、通常では自然軸となる物が劣化したものか。ただし、規則的な位置にそれが付着しているとするならば、意識的に付けた可能性もある。17-13杯底部内面にみられる物と同様。

図一器物番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口頸部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
17-13 須恵器 高杯 371号墳 主体 部2 棺外	口径 9.6cm（口縁部・脚部の一部を欠損） 脚高 10.2cm 杯部は、口径の割に比較的深い。口縁部は外上方にはほぼ直線的にのびる。端部は丸く収めている。杯部外面中央付近に2カ所の段があって、その段に伏まれる位置にヘラ縞波状文を施す。脚部は、脚部径や杯部との接合部の径の割に細く長い。柱状部下半から裾部にかけては外反しつつ緩やかに広がりながら下る。裾部との境界にあまり突出しないつまみ出し突帯を施し、脚部はここから下方に屈曲して端部は丸く収めている。スカシは1段の方形スカシを4方に配置している。 ・外面 ヨコナデ。下半はヨコナデ後1条のヘラ縞波状文。 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヘラケズリ（ロクロ回転方向左廻り）後ヨコナデ ・外面 ヨコナデ。スカシ穿孔後に面取をして切り口を削り取っている。 内面 ヨコナデ	直径1mm以下の長石をかなり含む。0.5mm以下の石英を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡灰色 ・暗赤紫色	杯底部内面の一面に黄褐色の異物が付着している。17-12口縁部の内面にみられる物と同様。
17-14 須恵器 高杯 371号墳 主体 部2 棺内埋 土	脚部径 9.4cm（残存1/3からの回転復原） 残存高 3.6cm 外下方に広がった脚柱状部は、段を伴って下方に屈曲して脚部となる。裾部外面にはやや弱いヨコナデによってつまみ出し突帯をつけ、裾端部は丸く収めている。脚部には、スカシを穿孔するが、残存部分から3スカシであったことが判る。 - - - - ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の長石・石英をかなり含む。3mm大の長石を粒かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	

表4 巨勢山407号墳 出土土器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成 色調・内面 ・断面	備 考
28-1 須恵器 杯身 407号墳 東側 講付部	口径 11.6cm (定形) 器高 5.4cm たちあがりは、ほぼ直線的に内上方にのびる。端部は内傾する面をなすが、その両側は鈍く丸みを持っている。端面の中央は凹線となって窪んでいる。受け部は外上方に開き、その上面はほぼ平ら。受け部端部は丸く収めている。底部は、受け部先端から丸く仕上げ、平らにはならないが、11径の側に器高は高くない。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 同心円の当て具痕跡の上からヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。1~3mm大の石英・チャートを僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・-	体部の外面の一部に黒色釉。自然釉か。底部内面に同心円の当て具痕跡が残る。
28-2 須恵器 杯身 407号墳 東側 講付部	口径 12.4cm (定形) 器高 5.1cm たちあがりは内上方にほぼ直線的にのびる。11径端部は丸く収めるが、端部内面に強いヨコナデによって生じた浅い凹線がついており、これによって内面に段が形成されている。受け部は外方に開き、その上面はほぼ平ら。受け部端部は丸いが、受け部の厚みはやや薄く仕上げられている。底部は丸みを持って仕上げられるが、あまり膨らまないで、ほぼ平らに近い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 同心円の当て具痕跡の上からヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを若干含む。1mm大の石英・チャートを僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	体部から底部にかけての一部に黒色釉。自然釉か。底部内面に同心円の当て具痕跡が残る。
28-3 須恵器 杯身 407号墳 東側 講付部407号墳	口径 10.8cm (定形) 器高 5.1cm たちあがりはごく僅かに内傾しつつ内上方にのびる。11径端部は丸く収められるが、端部内面に極浅い凹線がついている。受け部はほぼ水平に外方に広がり、受け部上面はほぼ平らである。受け部は上下からのヨコナデによって薄く仕上げられており、端部は丸いがやや鋭い。底部は全体に丸く仕上げられている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)後ヨコナデ 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径2~3mm大のチャート・石英・長石を含む。0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色	
28-4 須恵器 杯身 407号墳 東側 講付部	口径 11.4cm (定形) 器高 5.1cm たちあがりは内傾したのち僅かに屈曲して上方にのびる。11径端部は丸く収められている。受け部は外上方に開く。受け部の上面はほぼ平らになるが、たちあがりとの境界部に極浅い凹線状の溝がついている。底部は平らに近く膨らまない。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.2mm以下の長石をかなり含む。1mm大の石英を僅かに含む。0.5mm以下の黒色釉をかなり含む。	やや軟 ・白灰色 ・白灰色 ・-	直径2mm強の黒色粒状の異物が、3個付着している。焼成時の障灰などに関係するものか。

同一産物番号 器種 出土場所	形類と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	外面 色調・内面 ・断面	備考
28-5 須臾器 杯身 407号墳 東国 溝川部407号墳	口径 10.7cm (完形) 器高 5.3cm たちあがりは内傾したのち屈曲して上方にのびる。口縁部は丸く収めている。受け部は外上方に広がる。受け部とたちあがりの境界には、爪先によって生じたとみられる幅の狭い溝が一部についている。底部は丸く仕上げているが、あまり彫らまい。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の 石英・長石・チ ャートを含む。 4mm以下のチャート を僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 -	底部外面の2.5×1cm ほどの範囲に「X」字 状のヘラ記号。
29-1 須臾器 杯蓋 407号墳 石室 内腹瓦土 (四 24-2群)	口径 15.4cm (残存1/4からの回転複製) 器高 4.4cm 口縁部は、ややがりつつ下る。口縁部は丸く収めているが、肩部内面に極浅い凹線によって形成される弱い段がある。天井部と口縁部の境目は凹線になるが、その上辺は、丸みを持ってごく僅かに突出している。天井部は扁平で彫らまい。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよびヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ -	直径0.2mm以下の 長石・石英を若 干含む。	良好	・黄褐色 ・黄褐色 ・黄褐色	
29-2 須臾器 広口 冠 407号墳 東国 溝川土	口径 18.8cm (口縁部は完全に残存) 残存高 7.9cm 頸部上下以上が残存している。外上方に向かって僅かに外反つつく開口部は、1条のつまみ出し実帯を境に上方に屈曲して口縁部につながる。口縁部は強いヨコナデによってつまみ出されており、肩部先端は丸く収めている。頸部外面のうち、残存部分は、2条1単位とする凹線文によって文様帯が区画されている。文様帯には櫛形流状文が施されている。 ・外面 ヨコナデ。頸部外面には調整後、櫛形流状文。 内面 ヨコナデ。 - -	直径0.5mm以下の 長石をかなり含 む。0.5mm以下の 石英を含む。5mm 以上の花崗岩塊を 若干含む。	やや 軟	・濃灰色 ・濃灰色 ・白灰色	
30-1 須臾器 杯蓋 407号墳 支室 追分面	口径 11.2cm (内面のかえり径9.1cm・完形) 器高 3.2cm 口縁部は外下方に広がり口縁部は丸く収める。肩部内面に付くかえりは、口縁部よりも下方に突出している。天井部はやや丸く盛り上がり、頸部につまみが付く。つまみ下端の径は、つまみ中段にある最大径より小さくなっているが頸部が扁平で、宝珠形より孔眼形に近い。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部1/2をヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) 後ヨコナデ 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ -	直径0.2mm以下の 長石をかなり含 む。0.5mm以下の 長石・石英・チ ャートを若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 -	天井部外面に櫛形文 状のヘラ記号。 胎土・焼成・法京お よびヘラ記号のあり方 から、30-2とセットに なると思われる。
30-2 須臾器 杯身 407号墳 支室 追分面	口径 10.0cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部はやや外上方に直線的にのびる。口縁部は丸く収めている。底部はごく僅かに丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ただし、底部中央はヘラ切り未調整。 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.2mm以下の 長石を含む。石 英を若干含む。	良好	・淡青灰色 ・淡青灰色 -	底部外面に櫛形文状 のヘラ記号。 胎土・焼成・法京お よびヘラ記号のあり方 から、30-1とセットに なると思われる。

種別・遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成 色調・内面 ・外面	備 考
30-3 須臾器 杯蓋 407号墳 玄室 追葬面	口径 11.1cm (内面のかえり径9.5cm・完形) 器高 3.0cm 口縁部は外下方に広がり口縁端部は丸く収める。端部内面に付くかえりは、口縁端部よりも下方に突出している。天井部は僅かに丸く盛り上がり、頂部につまみが付く。つまみ下端の径は、つまみ中央にある鼓大頂より小さくなっているが頂部が扁平で、宝珠形より乳頭形に近い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデおよび天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転法右廻り)後ヨコナデ ・内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ ・-	直径0.2mm以下の長石を含む。石英を若干含む。1mm大のチャートを僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・-	天井部外面に刻文状のヘラ記号。 胎土・焼成・法量およびヘラ記号のあり方から、30-4とセットになると思われる。
30-4 須臾器 杯身 407号墳 玄室 追葬面	口径 10.2cm (完形) 器高 3.7cm 口縁部は外上方にはほぼ直線的に広がる。口縁部の厚みは比較的薄く仕上げ、口縁端部は丸く収める。底部は平らである。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.2mm以下の長石を含む。0.5~1mm大の石英・チャートを僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・-	底部外面に刻文状のヘラ記号。 胎土・焼成・法量およびヘラ記号のあり方から、30-3とセットになると思われる。
30-5 須臾器 杯蓋 407号墳 玄室 追葬面	口径 11.2cm (かえり径9.3cm・完形) 器高 3.1cm 口縁部は外下方に広がり口縁端部は丸く収める。端部内面に付くかえりは、口縁端部よりも下方に突出している。天井部は僅かに丸く盛り上がり、頂部に扁平な宝珠形つまみが付く。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ ・-	直径0.2mm以下の長石・石英を僅かに含む。	良好 ・濃灰色 および 白灰色 ・淡青灰色 ・-	天井部外面に焼成時の降灰とみられる異物が付着して、器壁が荒れている。天井部外面に直線文を不規則に重ねたヘラ記号。胎土・焼成およびヘラ記号のあり方から、30-6とセットになると思われる。
30-6 須臾器 杯身 407号墳 玄室 追葬面	口径 10.3cm 器高 3.7cm 口縁部はやや外上方にはほぼ直線的にのび、端部付近で僅かに外反して開く。口縁端部は丸く収めている。底部は平ら。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)ただし、底部中央はヘラ切り未調整。 ・内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.2mm以下の長石・石英を若干含む。2mm大のチャートを僅かに含む。	良好 ・濃青灰色 および 白灰色 ・淡青灰色 ・-	底部外面に直線文を不規則に重ねたヘラ記号。焼成前の器形の歪みが生じており、口縁部が正円にならない。胎土・焼成およびヘラ記号のあり方から、30-5とセットになると思われるが、口縁部の歪みのため、うまく合わない。 底部内面に7mm大の粘土粒が付着している。
30-7 須臾器 杯蓋 407号墳 玄室 追葬面	口径 10.6cm (かえり径9.0cm・完形) 器高 2.8cm 口縁部は外下方に広がって口縁端部は丸く収める。端部内面に付くかえりは、口縁端部よりも下方に突出している。天井部は僅かに丸く盛り上がり、頂部に扁平な宝珠形つまみが付く。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ ・-	直径0.2mm以下の長石・石英を若干含む。1mm大の石英を僅かに含む。	良好 ・濃灰色 および 白灰色 ・淡青灰色 ・-	天井部外面に焼成時の降灰とみられる異物が付着して、器壁が荒れている。天井部外面に直線文を不規則に重ねたヘラ記号。胎土・焼成・法量およびヘラ記号のあり方から、30-8とセットになると思われる。

同一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部 (脚部・高台)	胎 土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備 考
30-8 須恵器 杯身 407号墳 支室 道徳面	口径 10.1cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部はやや外上方にほぼ直線的にのび、端部付近で僅かに外反して開く。口縁端部は丸く収めている。底部は平ら。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (クロク回転方向右廻り) 後ヨコナデ 内面 ヨコナデおよび停止後の不定方向ナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・濃灰色 および 白灰色 ・淡青灰色 ・	口縁部および体部の一部に焼成時の降灰とみられる異物が付着して器壁が荒れている。一部は自然釉になっている。 底部外面に直線文を不規則に重ねたヘラ記号。胎土・焼成・法号およびヘラ記号のあり方から、30-7とセットになると思われる。
31-9 須恵器 高杯 407号墳 支室 道徳面	口径 7.5cm (口縁端部・裾端部を僅かに欠損) 器高 8.1cm 杯口縁部は、直線的に上方へのび、口縁端部は丸く収めている。平らな底部から体部への屈曲は明瞭で、その境界になる壁は一部僅かに突出している。体部と11縁部の境界は段をなしている。脚部は、裾部に向けてラッパ状に広がり、中位に1本の凹線文を施している。大きく広がった柱状部下端は、僅かに盛り上がった後、下方に屈曲して裾部となる。その境界は、強いヨコナデによって明瞭な壁がつくられている。裾端部は、やや薄く仕上げられており、先端は尖り気味になっている。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ。ただし柱状部上位にシボリメが残っている。	直径0.2mm以下の石英・長石・黒色粒を含む。	良好	・淡青灰色 および 白灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	杯部から脚部にかけての外面の方向および杯部内面の一部に、焼成時の降灰によるとみられる、白黄灰色の異物が付着しており、器壁が荒れている。
31-10 須恵器 長頸 407号墳 支室 道徳面	口径 6.3cm (完形) 器高 12.5cm 頸部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外上方に突きつづける。口縁端部は丸く収めている。頸部と体部の境界は彎曲して繋がり、壁をなさない。体部の最大径はほぼその中位にあり、脚部は張らずに不明瞭になっている。体部の上半に、径1~1.3cmの円形の窪みがある。蓋において穿孔される部位に当たるが、この場合は孔を開けていない。底部は、径3cmほどを平らに作り、正戻した時に傾かないようになっている。 ・外面 カキメ 内面 ヨコナデ ・外面 カキメ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	直径0.5~2mm大の長石をかなり含む。1mm大の石英・チャートを含む。	良好	・白灰色 ・白灰色 ・	焼成前の歪みが生じており、口縁が正円にならない。

四一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底面(脚部・高台)	胎 土	焼成	外面 色調・内面 ・断面	備 考
31-11 須忠器 台付 灰罌蓋 407号墳 玄室	遡草面 口径 5.1cm (完形) 器高 16.1cm 頸部は細く長い。頸部上半に一条の浅い凹線を画して口縁部との境界になっている。頸部から口縁部にかけては緩やかに屈曲して曲っている。口縁部は丸く収めている。体部は、その上半に最大径があって肩部になっている。肩部には一条の浅い凹線が画されるとともに、比較的明瞭に屈曲している。肩が張った感じがする。底部との境界付近にも同様の凹線が画られ、この凹線と肩部の凹線との間に、凹線を完結する飾線列点文が施されて文様帯となっている。脚台部は、柱状部の下平で大きく広がった後、凹線を境に下方に屈曲している。この凹線の上位はむしろつまみ出し突帯風にやや突出している。肩部は僅かに外反して広がり、脚部は水平に外方につまみ出されることで、先端部はやや尖り気味で、下縁は面を成している。 ・外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 肩部より下に二条の凹線に挟まれる飾線列点文の文様帯。文様は浅くあまり目立たない。ヨコナデ 内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ後、柱状部の下平に3方向に方形スカシを外側から穿つ。	内面 ヨコナデ。スカシ穿孔時に生じた粘土の盛り上がりが見える。直径0.5mm以下の長行を含む。	良好	・白灰色 ・白灰色 ・ ・肩部に、別個体のものと思われる、3mm×13mm大の粘土粒が付着している。	
31-12 土師器 甕 407号墳 玄室 追分面	口径 11.9cm (完形) 器高 13.7cm 体部から口縁部にかけては緩やかに屈曲し、口縁部は外上方にほぼ直線的にのびて開く。口縁部は丸く収めている。体部最大径がそのほぼ中位にあり底部も丸く、全体的に均整のとれた形態であるが、頸部に当たる加曲の角度が部位によって異なるなど、やや歪な感を否めない。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ナデ方向ハケのち一部ヨコ方向ハケ(8兼6cm) 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ	直径1-2mmの石英・長石をかなり含む。赤色粒を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	底部から体部にかけての一部に黒斑。
31-13 土師器 甕 407号墳 玄室 追草面	口径 12.2cm (完形) 器高 11.9cm 体部から口縁部にかけては極めて緩やかに屈曲し、口縁部は短く、外上方に開く。口縁部は丸く収めている。体部の最大径はそのほぼ中位にある。体部と口縁部の境界部の直径が、体部最大径の割合に大きい。底部は丸く膨らむ。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 斜め方向のヘラケズリ 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・外面 ヨコ方向のヘラケズリ 内面 ナデおよび指頭による押圧	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母をかなり含む。0.5mm大の赤色粒をかなり含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・	体部外面のヘラケズリは、磨止痕が明瞭に残っている。
31-14 土師器 甕 407号墳 玄室 追分面	口径 8.4cm (完形) 器高 11.8cm 口縁部はほぼ上方にのび、端部付近で僅かに屈曲して外反する。口縁部は丸く収めている。体部は、その最大径が下平にある。底部は丸くやや膨らむ。 ・外面 ナデ後ヨコ方向のヘラミガキ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ハケ後ナデ後やや粗いヘラミガキ 内面 ナデおよび指頭による押圧 ・外面 ヘラケズリ 内面 ナデおよび指頭による押圧	直径0.2mm以下の長石をかなり含む。0.2mm以下の石英を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・	底部外面の一部に黒斑。

図-遺物番号 器種 出土場所	形状と調査 ・口縁部 ・体部 ・底面(脚部・高台)	胎 土	焼成 色調・内面 ・断面	備 考
32-1 須志器 水甕 407号墳 石室 内覆瓦葺 図 24-7層	<p>口径 3.8cm (口縁部部の6割を欠損)</p> <p>器高 10.9cm</p> <p>頸部から口縁部にかけては緩やかに外反しながら開く。口縁部は面をなしている。端部の上下の拡張などはない。体部は最大径を上半に持ち、肩部はあまり張らないで緩やかなカーブを描く。器高の割に体部最大径が大きい。高内の下端部は、緩やかに外側が上方につまみ出されているが、むしろほぼ水平に近い。端部中央はごく僅かに窪んでいる。</p> <p>・外面 ヨコナデ</p> <p>内面 ヨコナデ</p> <p>・外面 上半はヨコナデ。下半はヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)後ヨコナデ</p> <p>内面 観察不能</p> <p>・外面 ヨコナデ</p> <p>内面 ヨコナデ</p>	直径1mm以下の長石・石英・チャートをかなり含む。2mm大のチャートを僅かに含む。	良好 ・淡灰色 ・濃灰色 ・白灰色	体部外面の一部に緑色釉。 体部の肘部付近に別個体の粘土が付着している。
32-2 土師器 皿 407号墳 東周 溝 埋土 図 24-28層	<p>口径 15.2cm (残存3/4以上)</p> <p>器高 2.8cm</p> <p>口縁部は平らな底部から緩やかに屈曲して外上方にのびる。口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。</p> <p>・外面 ヨコ方向ナデ</p> <p>内面 ヨコ方向ナデ</p> <p>・外面 ナデ</p> <p>内面 ナデおよび指頭による押圧</p> <p>・外面 ナデおよび指頭による押圧</p> <p>内面 ナデおよび指頭による押圧</p>	直径1.5mm以下の長石・長石・チャートをかなり含む。3mm大のチャートを僅かに含む。	やや 灰 ・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	
32-3 土師器 皿 407号墳 東周 溝 埋土 図 24-28層	<p>口径 15.6cm (残存1/4からの回転復元)</p> <p>残存高 2.2cm</p> <p>口縁部は、外上方に低くのびる体部から、外反して外方に屈曲している。端部は丸い。底部は欠損する。</p> <p>・外面 ヨコ方向ナデ</p> <p>内面 ヨコ方向ナデ</p> <p>・外面 ナデおよび指頭による押圧</p> <p>内面 ナデおよび指頭による押圧</p> <p>・</p>	直径0.5mm以下の長石・雲母をかなり含む。	良好 ・淡赤褐色 ・淡赤褐色 ・暗赤褐色	直径1mm以下の長石・石英・チャートをかなり含む。2mm大のチャートを僅かに含む。

表5 巨勢山408号墳 出土土器観察表

図-遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成 色調・内面 ・外面	備考
46-1 須臾器 杯蓋 408号墳 玄室 床面	口径 13.5cm (完形) 器高 4.5cm 口縁部は、ほぼ直線的に下方にのびる。口縁端部は丸く、端部内面に段を有する。天井部と口縁部の境界は、外方に突出するが、鈍く縁部は丸い。部位によっては全く突出しないところもある。天井部は扁平であるが、一部が歪に陥らんでいる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) 段 ヨコナデ ・内面 ヨコナデおよび脚止後の不定方向ナデ ・-	直径0.2mm以下の石英・長石を含む。3mm大の石英を僅かに含む。	良好 ・濃青灰色 ・濃灰色 ・濃灰色	出土状態で46-2とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。
46-2 須臾器 杯身 408号墳 玄室 床面	口径 11.7cm (完形) 器高 4.5cm たちあがりは内傾した後、中位で上方に屈曲してのびる。口縁端部は丸く取めている。受け部はほぼ水平に外方に広がり上面は平らに近い。受け部とたちあがりの境界は緩い凹線状の溝がついている。底部は扁平である。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石を含む。	良好 ・濃青灰色 ・濃灰色 ・濃青灰色	出土状態で46-1とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。
46-3 須臾器 杯蓋 408号墳 玄室 床面	口径 15.2cm (完形) 器高 3.9cm 口縁部は僅かに開きつつ下方に下る。口縁端部は丸く内面に段がある。天井部と口縁部の境界は鈍くほとんど外方に突出しない。部位によっては凹線になっている。天井部は扁平である。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の1/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 同心円の当て具痕跡のちヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石・黒色粒を含む。	良好 ・濃灰色 および ・黄灰色 ・濃青灰色	天井部全体に点々と濃緑色の釉がつく。一部は口縁部に及んでいる。出土状態で46-4とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。天井部内面に同心円の当て具痕跡が僅かに残る。
46-4 須臾器 杯身 408号墳 玄室 床面	口径 13.1cm (完形) 器高 4.8cm たちあがりは内傾した後、中位で上方に屈曲してのびる。口縁端部は丸く取れている。受け部はやや外方に広がる。受け部の厚みは比較的薄い。底部は扁平である。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 同心円の当て具痕跡のちヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・黒色粒を若干含む。	良好 ・濃灰色 ・濃青灰色 ・濃赤紫色	内面に黄灰色の異物が付着する。調査時の内容物の痕跡か。出土状態で46-3とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。天井部内面に同心円の当て具痕跡が僅かに残る。体部外面に1.5×2cm大の粘土粒付着。
46-5 須臾器 杯身 408号墳 玄室 床面	口径 13.6cm (完形) 器高 4.1cm 口縁部は僅かに開きつつ下方に伸びる。口縁端部は丸く内面に段がある。天井部と口縁部の境界は、極めて鈍い縁でほとんど外方に突出しない。部位によっては緩い凹線になっている。天井部は扁平である。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の全体をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.2mm以下の長石・石英を僅かに含む。	良好 ・濃灰色 ・淡青灰色 ・淡灰色	天井部および口縁部外面の一部に濃緑灰色釉。 一部に焼成面の窪みが生じており、口縁部が正円にならない。

同一遺物番号 器種 出土場所	形態と特徴 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部・台台)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
47-6 須恵器 短頸 蓋蓋 408号墳 玄室 床面	口径 9.8cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部は下方にほぼ直線的にのびる。口縁端部は丸く内面に段がある。天井部と口縁部の境界には、やや強いヨコナデによる帯状の縞染みがある。天井部は平らである。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。4mm大の石英を骨材に含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・濃赤紫色	外面に点々と濃緑灰色釉が付着する。 47-7とセットになった状態で焼成されている。口縁部の一部が47-7に付着している。
47-7 須恵器 短頸 蓋蓋 408号墳 玄室 床面	口径 7.3cm (完形) 器高 6.6cm 口縁部は、上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は強く張り出して緩やかに屈曲している。底部は平らであるが、僅かに上げ底状になって盛り上がっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・-	外面に点々と濃緑灰色釉が付着する。 47-6とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-6の口縁部の一部が付着している。
47-8 須恵器 短頸 蓋蓋 408号墳 玄室 床面	口径 10.3cm (完形) 器高 3.4cm 口縁部はやや内彎しつつ下方にのびる。口縁端部は丸く内面に段がある。天井部と口縁部の境界は緩やかに屈曲して繋がる。天井部は平らで中央部が張りに窪んでいる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。2mm大の石英を骨材に含む。	良好	・濃灰色 および 黄灰色 ・淡青灰色 ・-	天井部に外面に点々と黒色釉が付着する。 47-9とセットになった状態で焼成されている。口縁部の一部が47-9に付着している。
47-9 須恵器 短頸 蓋蓋 408号墳 玄室 床面 口径 8.1cm (完形)	器高 6.2cm 口縁部は、上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は比較的強く張っている。底部は平らである。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り)	内面 ヨコナデ 直径0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・-	47-8とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-8の口縁部の一部が付着している。
47-10 須恵器 短頸 蓋蓋 408号墳 玄室 床面	口径 10.0cm (完形) 器高 3.6cm 口縁部は下方にほぼ直線的にのびる。口縁端部は中央部が窪んだ面に近い。天井部と口縁部の境界は緩やかに屈曲して繋がる。天井部は平らである。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・濃灰色 および 黄灰色 ・淡青灰色 ・濃灰色	外面の一部に濃緑灰色釉。 47-11とセットになった状態で焼成されている。焼成時に口縁部が47-11に付着し、引き割がすために一部を打ち欠いている。

同一器物番号 器種 出土場所	形態と調査 ・口部部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	色調・内面 ・外面 ・断面	備 考
47-11 須恵器 須恵 器 408号墳 支室 床面	口径 7.6cm (完形) 器高 6.6cm 口縁部は、上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は強く張らないで緩やかに屈曲している。底部は平らである。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・ -	肩部の一部に濃緑灰色釉。 47-10とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-10の口縁部の一部が付着している。 底部および体部に焼台と思しき物の一部が付着している。
47-12 須恵器 須恵 器 408号墳 支室 床面	口径 10.6cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部は下方にはほぼ直線的のびる。口縁端部は中央部が窪んだ面に近い。天井部と口縁部の境界は緩やかに屈曲して繋がる。天井部は平らであるが、やや凹みがある。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・ -	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。4mm大の花崗岩片を僅かに含む。	良好	・濃灰色 および 淡青灰色	・淡青灰色 ・新灰色 天井部外面に点々と濃緑灰色釉が付着する。 47-13とセットになった状態で焼成されている。口縁部の一部が47-13に付着している。
47-13 須恵器 須恵 器 408号墳 支室 床面	口径 7.8cm (完形) 器高 7.1cm 口縁部は、ごく僅かに内傾しつつ上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は強く張らないで緩やかに屈曲している。底部は平らであるが、中央部が緩かに盛り上がり上げ底風になっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。2mm大の石英を若干含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・ -	肩部の一部に濃緑灰色釉。 47-12とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-12の口縁部の一部が付着している。
47-14 須恵器 須恵 器 408号墳 支室 床面	口径 9.8cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部は下方にはほぼ直線的のびる。口縁端部は中央部が窪んだ面に近い。天井部と口縁部の境界には、やや強いヨコナデによる帯状の横波い窪みがある。天井部は平らであるが、中央部がやや窪んでいる。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・ -	直径0.5mm以下の石英・長石を若干含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・濃赤紫色	口縁部外面の一部に濃緑灰色釉が付着する。 47-15とセットになった状態で焼成されている。口縁部の一部が47-15に付着している。
47-15 須恵器 須恵 器 408号墳 支室 床面	口径 7.8cm (完形) 器高 6.5cm 口縁部は、ごく僅かに内傾して上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は強く張らないで緩やかに屈曲している。底部は平らであるが、中央部がごく僅かに盛り上がり上げ底風になっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。4mm大の石英を若干含む。	良好	・濃灰色 および 淡青灰色 ・淡青灰色 ・ -	肩部の一部に濃緑灰色釉。 47-14とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-14の口縁部の一部が付着している。 底部外面に玄ね焼きによる割割体の粘土粒が付着している。焼台の痕跡か。

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底面(脚部・高台)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
47-16 須忠器 短頸 蓋 408号墳 女室 床面	口径 9.8cm (完形) 器高 3.3cm 口縁部は下方にはほぼ直線的にのび、肩部付近で僅かに外反する。口縁端部は中央部が僅んだ面に近い。天井部と口縁部の境界には、やや強いヨコナデによる帯状の浅い窪みがある。天井部は平らであるが、中央部が僅かに窪む。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を若干含む。	良好	・濃灰色 および 黄灰色 ・淡青灰色 ・濃灰色	外面に点々と濃緑灰色釉が付着する。 47-17とセットになった状態で焼成されている。 内面に黄褐色の異物が付着している。
47-17 須忠器 短頸 蓋 408号墳 女室 床面	口径 6.1cm (完形) 器高 5.8cm 口縁部は、上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は強く張らないで緩やかに屈曲している。底面は平らであるが、中央部がごく僅かに盛り上がり上げ底面になっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。2mm大の石英を若干含む。	良好	・濃灰色 および 淡青灰色	・淡青灰色 ・淡赤紫色 47-16とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-16の口縁部の一部が付着している。
47-18 須忠器 短頸 蓋 408号墳 女室 床面	口径 10.5cm (完形) 器高 7.7cm 口縁部は下方にはほぼ直線的にのびる。口縁端部は中央部が僅んだ面に近い。天井部と口縁部の境界には、緩やかに屈曲して繋がる。天井部は平らであるが一部が僅かに窪む。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。2mm大の石英を若干含む。4mm大のチャートを僅かに含む。	良好	・濃灰色 ・淡青灰色 ・淡赤紫色	天井部外面に濃緑灰色釉。 47-19とセットになった状態で焼成されている。口縁部の一部が47-19に付着している。
47-19 須忠器 短頸 蓋 408号墳 女室 床面	口径 7.8cm (完形) 器高 7.1cm 口縁部は、上方に短く立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。体部最大径はその上半にあって、肩部となっている。肩部は比較的張った感じがする。底面は平らであるが、中央部がごく僅かに盛り上がり上げ底面になっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。2mm大の石英・チャートを若干含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・淡赤紫色	色釉。 47-18とセットになった状態で焼成されている。肩部に47-18の口縁部の一部が付着している。

国一産物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備 考
48-20 須恵器 器台 408号墳 玄室 床面	口径 38.4cm (完形) 器高 44.5cm 杯口縁部は、体部から大きく屈曲して外方に開く。肩部は上下に隆起して仕上げられており、肩部外面の下部はこの時の生じた凹線が残る。体部と口縁部の境界に1条のつまみ出し突帯を巡らせ、体部上半には2条1単位の花もみ出し突帯が、体部と底部の境界には1条の凹線が巡っている。体部はそれらの突帯ないし凹線によって、2段に区分され、それぞれに櫛歯状文を施して文様帯とする。 脚柱状部は2条1単位とする凹線を3箇所にて設定し柱状部を4段に分けている。柱状部は下方に緩やかに広がり、裾部との境界にはつまみ出し突帯を設けている。その際突帯の下端は凹線となっている。裾部は下方に屈曲して、裾端部は中央部が窪む面をなしている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 杯体部は突帯・凹線による各区画に櫛歯状文(10条1単位・原形幅1.5cm)。杯底部は平行タタキのちヨコナデ。 内面 杯体部上半はヨコナデ。下半および底部は同心円の当て具痕の上からヨコナデ。 ・外面 柱状部は4段の区画の下3段は、カキメ後櫛歯状文。のち二角形スカシを四方に、1列に配置して穿孔する。上1段および裾部は横方向のカキメ。 内面 ヨコナデ。	直径0.5mm以下の石英・長石を含む。チャートを若干含む。3mm大の石英・チャートを若干含む。	良好	・濃青灰色 および 白灰色 ・濃灰色(杯部内面) および 淡青灰色 (脚部内面) ・濃灰色	脚部に焼きむらがあり、一部が白灰色をしている。 脚部と杯部の接合は、円盤状填法であることが、接合痕跡から明確である。なお、杯底部内面の同心円の当て具痕跡はその中央部にまで及ぶが、この部分の外面からはタタキが行われていない。つまり、杯部内面の当て具痕跡は文様を意図しているとはみられず、同心円文もしくは青濁線紋と呼んでもよい。ただしその文様はやはりヨコナデによって消されていることもあり、文様としての意識はあまり明確ではない。
49-22 須恵器 広口 壺 408号墳 玄室 床面	口径 22.2cm (完形) 器高 30.1cm 頸部はやや傾斜してちあがり半で外反して広がり口縁部に繋がる。頸部外面には2条1単位とする凹線が2箇所施されている。この凹線は上下を同時に施しており、つまみ出し突帯の技法に近いが、中央の突出度があるかないものである。この凹線による3段の区画のうち上2段には櫛歯状文を施している。頸部と口縁部の境界は下方に突出するつまみ出し突帯とし、口縁部は上方に隆起する。口縁部は丸く収めている。体部はその最大径を上半にもち、肩部はあまり歪らず緩やかに屈曲する。底部は下方にやや膨らむ丸底である。 ・外面 口縁部外面はヨコナデ。頸部外面は、3段区画の上2段に櫛歯状文(11条1cm)。下半は横方向のカキメ(8条1cm)。 内面 ヨコナデ ・外面 上半はヨコ方向のカキメ。下半は平行タタキのちカキメ。 内面 上半はヨコナデ。下半は同心円の当て具痕跡の上からヨコナデ。 ・外面 平行タタキのちナデ 同心円の当て具痕の上からヨコナデ。	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを若干含む。3mm大の石英・チャートを若干含む。	良好	・濃青灰色 および 濃灰色 ・濃灰色(頸部内面) および 淡青灰色 (体部内面)	口縁部および頸部外面の約1/2に黒色釉がみられる。体部外面の一部にも同様のものがあるが、頸部のそれが及ぶ範囲の境界が、体部との接合部に一致していることから、意識的な釉である可能性が高い。 体部外面中央に長さ2.5cmの2条のヘラ先などによる溝状の痕跡がある。記号であるか傷であるか断定し難いが、2条を1単位としていることから、意識的なものと判断した。
49-22 土師器 壺 408号墳 玄室 床面	口径 11.5cm (完形) 器高 15.1cm 口縁部は外上方に広がり、直線的にのびる。口縁部は丸いが、ごく僅かに肥厚する。体部の最大径はほぼ中位にあり、体部は全体に球形に近い形状をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ハケのちナデ ・外面 ナメ方向ハケ 内面 ナデおよび頸部による押圧 ・外面 ハケのちナデ 内面 ナデおよび頸部による押圧	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母を含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	

図一遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備考
49-23 土師器 壺 408号墳 支室 床面	口径 11.4cm (変形) 器高 14.9cm 口縁部は外上方に広がり、直線的にのびる。口縁端部は丸いが、ごく僅かに肥厚する。体部の最大径はほぼ中位にあり、体部は全体に球形に近い形状をなす。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ハケのちナデ ・外面 タテ方向ハケ 内面 ナデおよび指痕による押圧 ・外面 ハケのちナデ 内面 ナデおよび指痕による押圧	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母・チャートをかなり含む。	良好	・暗赤褐色 ・暗赤褐色 ・暗赤褐色	
50-24 土師器 ミニ チュア 甕形土 器 408号墳 支室 床面	口径 6.2cm (口縁部の大部分欠損、残存した体部からの復原推) 器高 7.8cm 釜形土器を造りつけた一体構造になっている。口縁部は短く立ち上がる。体部は大きく下方に広がって全体を支える。体部内面は粘土接合痕が明瞭に残り仕上げは丁寧ではない。ただし造りつけた釜形土器は比較的丁寧にナデ調整している。焚き口部の底の表現はない。 ・外面 ナデ 内面 ナデ ・外面 ハケのちナデ 内面 ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデ	直径0.5mm以下の長石・雲母・チャートをかなり含む。石英を含む。	赤色	黒粒を僅かに含む。 良好 ・明赤褐色 ・赤灰色 ・赤褐色	
50-25 土師器 ミニ チュア 甕形土 器 408号墳 支室 床面	口径 11.0cm (変形) 器高 10.3cm 体部は外上方に緩やかに広がり、口縁部はやや屈曲して上方にのびる。端部は丸く収めるが、部位によってはやや内側に丸く肥厚している。底部は下方に膨らんでおりやや丸い。底部中央に円形の穿孔を行い、その周囲の四方に指形穿孔を行っている。穿孔はいずれも外面から行っており、内面には穿孔の際生じた粘土の盛り上がりが残っている。体部中央の二方に上向きに屈曲する把手が付けられている。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ハケ 内面 ナデおよび指痕による押圧 ・外面 ハケのちナデ 内面 ナデおよび指痕による押圧	直径0.5mm以下の長石・石英・雲母をかなり含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤灰色	
50-26 土師器 ミニ チュア 釜形土 器	408号墳 支室床面 口径 11.7cm (変形) 器高 7.4cm 口縁部は僅かに外方に屈曲するが、体部から口縁部にかけては概ね直線的にのび、外上方に広がる。口縁端部は丸く収める。底部は体部から緩やかに屈曲して平らになる。 ・外面 ヨコ方向ナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 タテ方向ナデのちナデ 内面 ヨコ方向ナデ ・外面 ナデ 内面 ナデおよび指痕による押圧	直径0.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母をかなり含む。	良好	・黄赤褐色 ・赤褐色 ・黄赤褐色	

図-遺物番号 器種 出土場所	形態と調整 ・口部部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	點 土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備 考
50-27 須恵器 杯身 408号墳 石室 内流入土	口径 11.0cm (残存1/4からの回転複製) 器高 4.0cm たががりは上方にはほぼ直線的にのびる。口縁端部はごく僅かに内傾する面が意識されるが基本的には無い。受け部はほぼ水平方向に広がる。受け部上面は平らな面になる。底部は扁平である。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロケロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・チャートを含む。	良好	・淡灰色 および 暗灰色 ・淡青灰色 ・濃灰色 および 淡灰色	
50-28 土師器 甕 407号墳 東周 溝埋土	口径 12.8cm (口部部の約9割が残存している) 残存高 6.5cm 口縁部は、緩やかに屈曲して外上方に開く。端部はごく僅かに上方に突出し、部位によっては不明確な外傾する面を有する。 ・外面 ヨコ方向ナデ ・内面 ヨコ方向ハケ ・外面 ナデか (残存部分が極小で観察不能) ・内面 ナデか (残存部分が極小で観察不能)	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む。	良好	・赤褐色 ・赤褐色 ・赤褐色	

表6 巨勢山409号墳 出土土器観察表

図一遺物番号 器種 出土場所	形造と調整 ・口縁部 ・体部 ・底蓋(胴部・高台)	胎土	焼成	色調・内面 ・外面 ・断面	備考
63-1 須志器 杯蓋 409号墳 主体 部1 北棺外	口径 13.1cm (完形) 器高 4.7cm 口縁部は、ほぼ直線的に下方にのびる。口縁部は外傾する面をなす。天井部と口縁部の境界は、外方に突出しその傾斜は比較的鋭い。縁部の下端は凹線状に窪む。天井部はやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母を含む。2~3mm大の石英を含む。5mm大の花崗岩礫を僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	出土状態で63-2とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。 天井部外面に「く」字形のヘラ記号。
63-2 須志器 杯身 409号墳 主体 部1 北棺外	口径 11.7cm (完形) 器高 5.4cm たちあがりは内傾した後、中位で上方に屈曲してのびる。口縁部は丸く内面に段がある。受け部はほぼ水平に外方に広がり上面は平らに近い。底部はやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母を含む。2mm大の石英を僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡灰色 ・淡灰色	出土状態で63-1とセットになっていた。胎土・焼成・法量からもこの2者はセットになる。 底部外面に「く」字形のヘラ記号。
63-3 須志器 杯蓋 409号墳 主体 部1 北棺外	口径 13.1cm (完形) 器高 4.8cm 口縁部は、やや圓きながら下方にのびる。口縁部は外傾する面をなすが、内面の縁は鈍くやや丸い。天井部と口縁部の境界は、外方に突出するがその傾斜もやや鈍く丸みを持っている。天井部は僅かに膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の1/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む。5mm大の花崗岩礫を僅かに含む。	良好	・淡青灰色 ・淡褐色 ・淡灰色	出土状態で63-4とセットになっていた。しかしこの2者は、胎土がやや異なり、法量は杯身がやや小さい。また成形時のロクロ回転方向が逆である。 天井部外面に直線的なヘラ記号があり、これも63-4とは異なっている。
63-4 須志器 杯身 409号墳 主体 部1 北棺外	口径 11.1cm (完形) 器高 5.2cm たちあがりはほぼ直線的に内上方にのびる。口縁部は丸く内面に段があるが、段の縁は鈍く丸い。段は部位によっては底部内面の凹線に見えるところもある。受け部は外上方に広がり、断面は比較的厚い。縁部は丸い。底部はやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母を含む。	やや軟	・淡青灰色 ・白灰色 ・白灰色	出土状態で63-3とセットになっていた。しかし、この2者は胎土がやや異なり、法量は杯身がやや小さい。また成形時のロクロ回転方向が逆である。 底部外面に「x」字形のヘラ記号があり、これも63-3とは異なっている。
63-5 須志器 杯蓋 409号墳 主体 部1 西棺外	口径 11.5cm (完形) 器高 4.8cm 口縁部は、中位でやや屈曲して内下方にのびる。口縁部は外傾する面をなすが、強いヨコナデによってその中央が溝状に窪み先端部がむしろ丸みを持っている。天井部と口縁部の境界は、外方に突出する傾斜になっている。天井部は、頂部が平らながら全体としてはやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の1/2をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・-	直径1~5mm大の石英を僅かに含む。0.2mm以下の石英・長石・雲母を含む。黒色粒を含む。	良好	・淡青灰色 ・淡灰色 ・-	

同一遺物番号 器種 出土場所	形態と高さ ・口頸部 ・体部 ・底部(脚部・高台)	胎 土	焼成	・外面 色調・内面 ・断面	備 考
63-6 須忠器 杯重 409号墳 主体 部1 西棺外	口径 12.2cm (完形) 器高 4.3cm 口縁部は、ほぼ直線的に下方にのびる。口縁端部は外傾する面をなすが、両端部は鋭くやや丸い。断面の中央は凹線となって窪んでいる。天井部と口縁部の境界は、外方に突出する接線になっているが、突出の度合いが比較的鈍くまた接線も鈍い。天井部は、僅かに膨らみや丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 天井部の2/3をヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ ・	直径0.5mm以下の長石・石英・チャートを含む。3~5mm大のチャートを若干含む。	良好	・淡青灰色 ・および ・黄灰色 ・濃青灰色 ・	
63-7 須忠器 杯身 409号墳 主体 部1 西棺外	口径 10.1cm (完形) 器高 4.8cm たちあがりはほぼ直線的に内上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなすが、その両端部は丸くやや鋭い。断面の中央は凹線になって窪んでいる。受け部は外や上方に広がり、断面は比較的深く端部は尖った感じがする。底部はやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・雲母・チャートを含む。5mm大の石英・花崗岩塵を僅かに含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・	
63-8 須忠器 杯身 409号墳 主体 部1 西棺外	口径 10.5cm (口縁部を僅かに欠損) 器高 4.8cm たちあがりはほぼ直線的に内上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなすが、特に内面の端部は丸くやや鋭い。断面の中央は凹線になって深く窪んでいる。受け部はほぼ水平に広がり、断面は比較的薄い。端部は丸く収めている。底部はやや膨らみ丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・チャートを含む。	良好	・濃青灰色 ・淡青灰色 ・濃灰色	内面に同心円の当て具軌跡。
63-9 須忠器 杯身 409号墳 主体 部1 西棺外	口径 10.6cm (口縁部の一部を欠損) 器高 5.1cm たちあがりはほぼ直線的に内上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなすが、その両端部はやや鋭い。断面の中央は凹線になって深く窪んでいる。受け部はほぼ水平に広がり、上面がやや丸みを持っている。端部は深くやや尖った感じがする。底部は僅かに膨らみや丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ(ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.2mm以下の石英・長石・チャートを含む。	良好	・濃灰色 ・濃灰色 ・淡灰色	

同一遺物番号 母体 出土場所	形態と調整 ・口縁部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	胎 土	焼成 色調・内面 ・外面	備 考
63-10 須恵器 短頸 409号墳 主体 部1 西柏外	口径 9.3 (口縁端部を僅かに欠損) 器高 8.9cm 口縁部は僅かに内彎しつづ上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなし、端面の中央は凹線になって深く窪んでいる。口縁部と体部の境界は明瞭に屈曲する。体部最大径はその上半にあって肩になっている。肩は緩やかに屈曲してあまり張った感じがない。底部は下方に膨らんで丸くなっている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) のちヨコナデ ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・チャートを含む。	良好 ・白灰色 ・白灰色 ・淡青灰色	体部外面の一部に濃緑灰色釉。自然離か。口縁部・肩部・底部の各1箇所ずつに1~1.5cm大の、別面体の粘土粒が付着している。
66-1 須恵器 杯蓋 409号墳 主体 部2 棺北西 区埋土	口径 12.4cm (残存1/9からの回転復原) 残存高 3.8cm 口縁部は、ごく僅かに内彎しつづも僅かに外方に開きながら下方にのびる。口縁部は外傾する面をなすが、両端は鈍く丸い。端面の中央はごく浅い凹線となって窪んでいる。天井部と口縁部の境界の稜線は外方に突出しており先端は比較的鋭い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・ ・	直径0.2mm以下の長石・石英を僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡灰色	
66-2 須恵器 杯蓋 409号墳 主体 部2 棺北西 区上面	口径 13.0cm (残存1/8からの回転復原) 残存高 3.2cm 口縁部は、ごく僅かに内彎しつづも僅かに外方に開きながら下方にのびる。口縁部は丸く、内面に段を有する。天井部と口縁部の境界の稜線はやや外方に突出するが先端は丸い。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・ ・	直径0.2mm以下の長石・石英を僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・淡青灰色 ・淡青灰色	胎土・焼成および調整のあり方から、同一個体と思われる破片が、墳丘の南西区斜面で出土している。天井部のそれについては、図上復元して示した。
66-3 須恵器 杯身 409号墳 主体 部2 墓域外 (南)	口径 11.3cm (完形・受け部先端を僅かに欠損) 器高 4.9cm 口縁部はほぼ直線的に内上方にのびる。口縁端部は内傾する面をなし、受け部はやや外上方に開く。受け部の上面はやや丸みを持っているが、比較的薄く先端は尖り気味になる。底部は僅かに膨らんでやや丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向左廻り) ・内面 ヨコナデのち磨止後の不定方向ナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母をかなり含む。3~5mm大の石英を含む。	良好 ・淡灰色 ・濃灰色 ・淡灰色	口縁部が引んでおり、楕円形を呈する。最大径11.5cm・最小径10.9cm。
66-4 須恵器 杯身 409号墳 主体 部2 墓域外 (南西)・墳丘 南西区斜面・ 墳頂表土直下	口径 12.0cm (残存1/3からの回転復元) 器高 4.8cm 口縁部はほぼ直線的に内上方にのびる。口縁部は内傾する面をなし、端面の中央は凹線となって窪む。受け部はやや外方に開く。受け部の上面はほぼ平らで、先端は僅かに膨らんでやや丸みを持っている。 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・外面 ヘラケズリ (ロクロ回転方向右廻り) ・内面 ヨコナデ	直径0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む。5mm大の花崗岩粒を僅かに含む。	良好 ・淡青灰色 ・濃青灰色 ・濃青灰色	墓域外(南西)・墳丘南西区斜面・墳頂表土直下出土の各破片が接合した。

図一遺物番号 部種 出土場所	形状と調整 ・口頸部 ・体部 ・底部（脚部・高台）	胎土	焼成 色調・内面 ・断面	備考
66-5 須恵窑 Ⅷ 409号墳 主体 部上層・植溝 区埋土	口径 14.2cm（残存1/3からの回転複製） 残存高 5.63cm 頸部と口縁部の境界は下方にやや突出するつまみ出し突帯を もって段をなし、口縁部は外上方に大きく開く。口縁端部はや や内傾する面をなし、端面中央は凹線となって狭く窪む。 ・外面 口縁部はヨコナアのち鰐楯波状文（6条1単位・原体 幅6mm）。頸部はヨコナアのち鰐楯波状文（18条1単 位・8条/cm） 内面 ヨコナア ・ - ・ -	直径0.1mm以下 の長石・石英を僅 かに含む。	良好 ・ 濃灰色 ・ 白灰色 ・ 淡灰色	口縁部・頸部外面に 黒色軸。

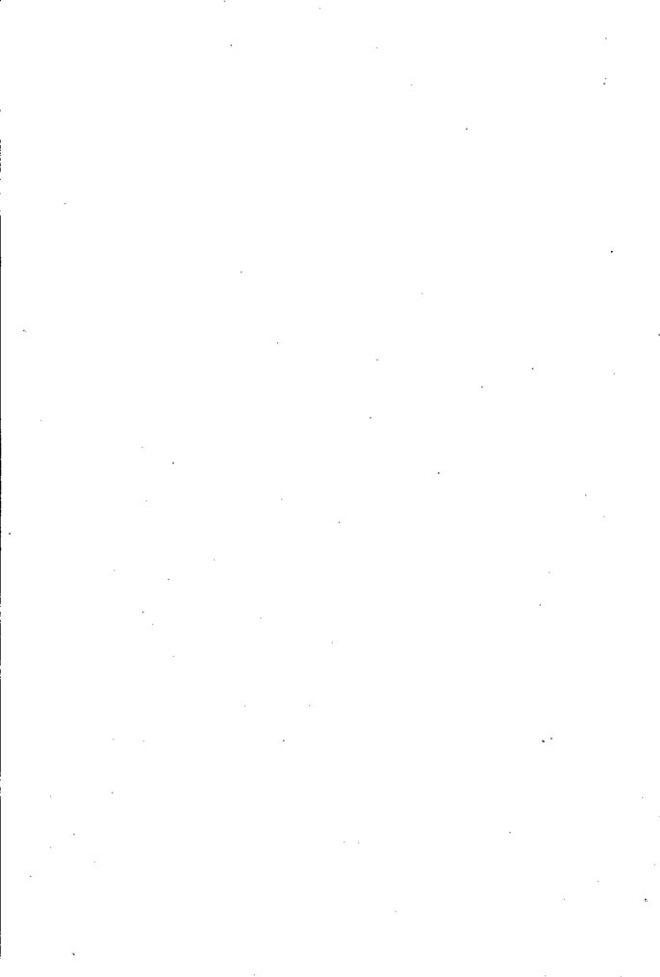
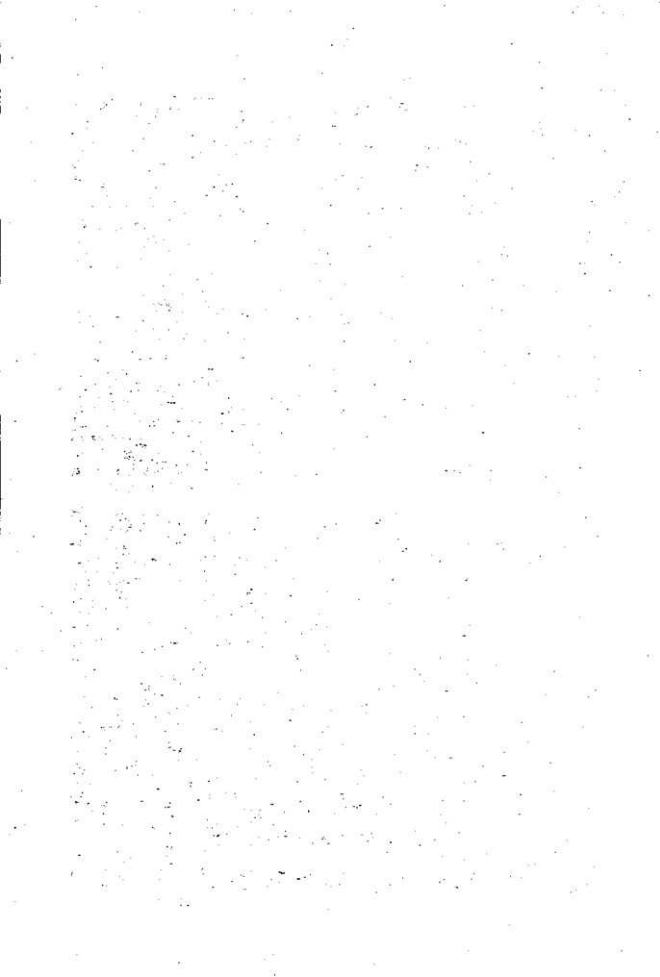


图 版





巨勢山371号墳ほか 航空写真（東上空から）



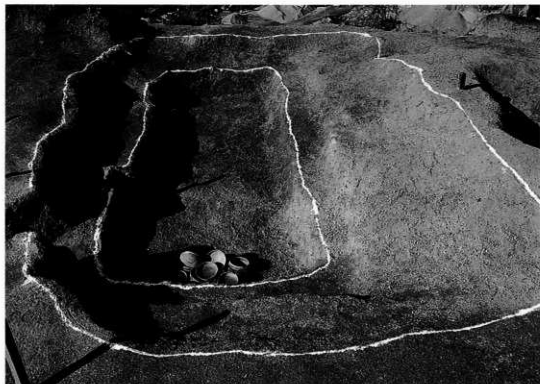
巨勢山371号墳 主体部1（南から）



巨勢山371号墳 主体部1 棺外遺物（須恵器）出土状態



巨勢山371号墳 主体部1 棺外遺物（鉄鏃）出土状態



巨勢山371号墳 主体部2 (南から)



巨勢山371号墳 主体部2 棺内遺物(ガラス玉)出土状態



巨勢山371号墳 主体部2 棺内遺物（馬具・須惠器）出土状態



巨勢山371号墳 主体部2 棺外遺物（馬具・須惠器）出土状態



巨勢山371号墳 主体部2 棺外遺物(馬具)出土状態



370号地点東 墓道の堆積土



巨勢山407号墳（手前）と巨勢山408号墳



巨勢山407号墳 石室（羨道側から）



巨勢山407号墳 石室（奥壁）



巨勢山407号墳 石室（玄門部）



巨勢山407号墳 石室（玄室左側壁）



巨勢山407号墳 石室（玄室右側壁）



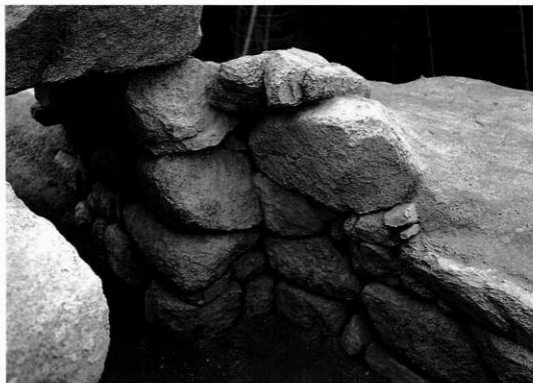
巨勢山407号墳 石室（奥壁と右側壁のコーナー部分）



巨勢山407号墳 石室（奥壁と左側壁のコーナー部分）



巨勢山407号墳 石室（袖石と玄室前壁）



巨勢山407号墳 石室（袖石と右側壁のコーナー部分）



巨勢山407号墳 墳丘東周溝肩部の遺物（須恵器）出土状態 1



巨勢山407号墳 墳丘東周溝肩部の遺物（須恵器）出土状態 2



巨勢山407号墳 石室内追葬面遺物出土状態



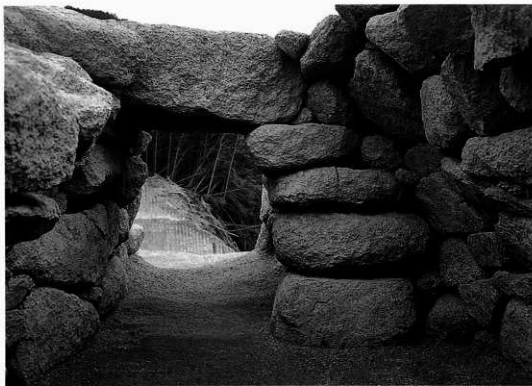
巨勢山407号墳 石室内追葬面遺物出土状態 (右側壁付近)



巨勢山408号墳 石室（羨道側から）と奥壁付近の出土遺物



巨勢山408号墳 石室（奥壁）



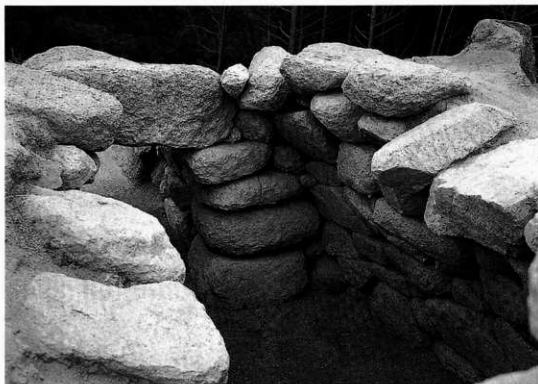
巨勢山408号墳 石室（玄門部）



巨勢山408号墳 石室（奥壁と左側壁のコーナー部分）



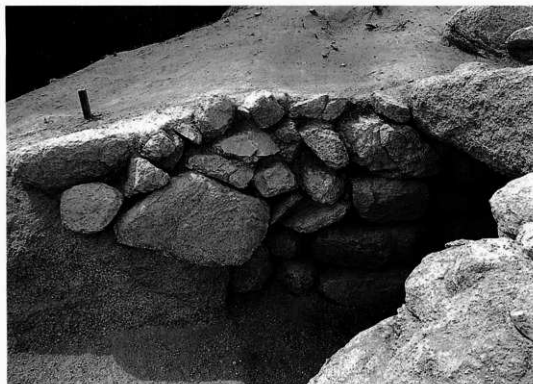
巨勢山408号墳 石室（奥壁と右側壁のコーナー部分）



巨勢山408号墳 石室（袖石と右側壁のコーナー部分）



巨勢山408号墳 石室（女室右側壁）



巨勢山408号墳 石室（羨道右側壁）



巨勢山408号墳 石室（羨道左側壁）



巨勢山408号墳 閉塞石（玄室内から）



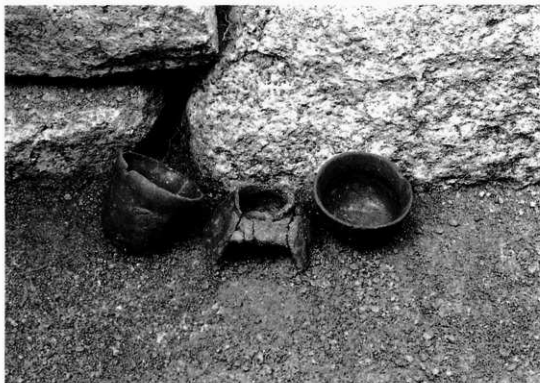
巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物出土状態



巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物（須恵器）出土状態



巨勢山408号墳 石室内奥壁付近の遺物（馬具）出土状態



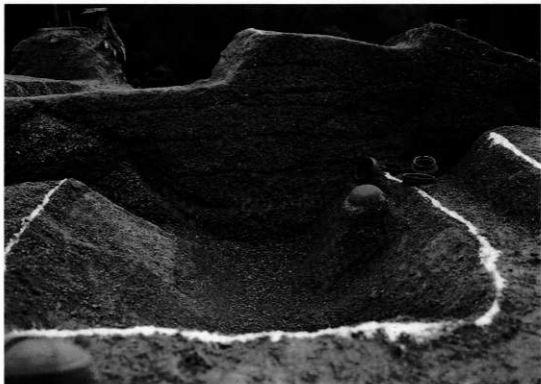
巨勢山408号墳 石室内玄門部付近の遺物（土師器）出土状態



巨勢山409号墳 全景（東から）



巨勢山409号墳 主体部1（南から）



巨勢山409号墳 主体部1 土層断面と遺物出土状態



巨勢山409号墳 主体部1 (北から)



巨勢山409号墳 主体部1 墓室完掘状態（東から）



巨勢山409号墳 主体部2（東から）



3-1



3-2

巨勢山371号墳 墳頂部出土土器 (S.与 1/3)



10-1



10-2



10-3



10-4



10-5

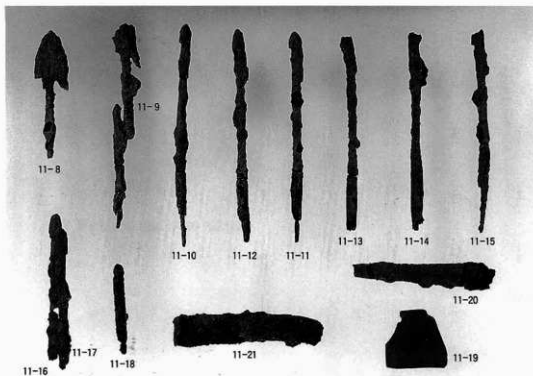


10-6



10-7

巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土土器 (S.与 1/3)



巨勢山371号墳 主体部1 棺外出土鉄器・石製品 (S. 1/3)



16-1



16-2



16-3



16-4

巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土土器 (S. 1/3)



16-5



16-6



16-7



16-8



16-9



16-10



16-11



17-12

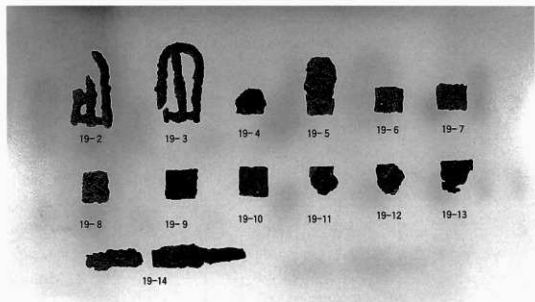


17-13

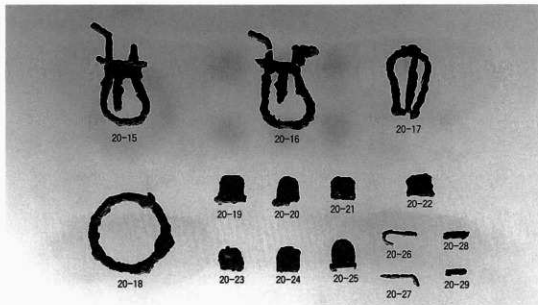


17-14

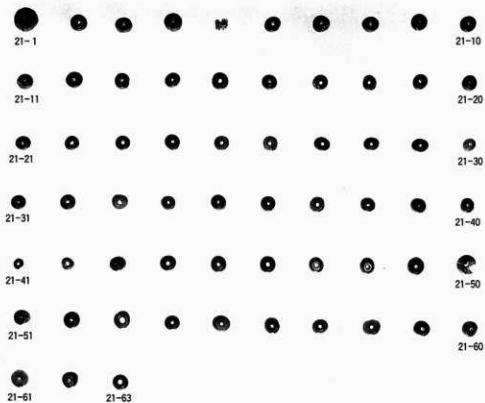
巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土土器2 (S. 1/3)



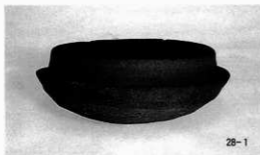
巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土馬具・鉄器 (S. ㉮ 1/3)



巨勢山371号墳 主体部2 棺外出土馬具 (S. ㉿ 1 / 3)



巨勢山371号墳 主体部2 棺内出土ガラス玉 (S. ㉿ 1 / 2)



巨勢山407号墳 墳丘 出土土器 (S.与 1/3)



巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土土器 (S.与 1/3)



30-1



30-3



30-2



30-4



30-5



30-7



30-6



30-8



31-9



31-10



31-11

巨勢山407号墳 石室内 追葬面出土土器1 (S.与1/3)



31-12



31-13



31-14

巨勢山407号墳 石室内 追葬面出土土器 2 (S. 号 1/3)



32-1

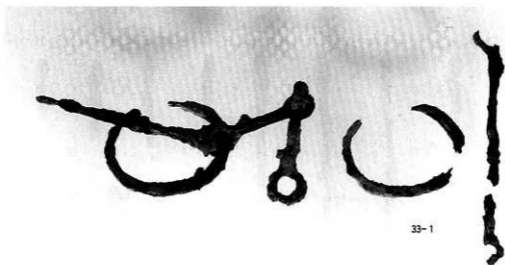


32-2

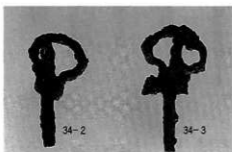


32-3

巨勢山407号墳 石室内擾乱層・東周溝出土土器 (S. 号 1/3)

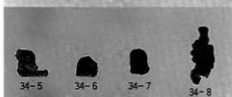


33-1



34-2

34-3

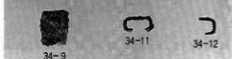


34-5

34-6

34-7

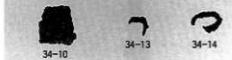
34-8



34-9

34-11

34-12



34-10

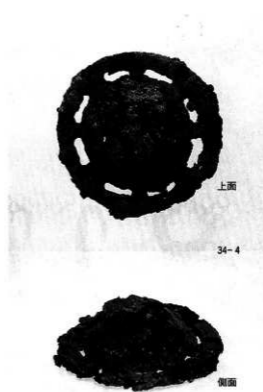
34-13

34-14



34-15

34-16

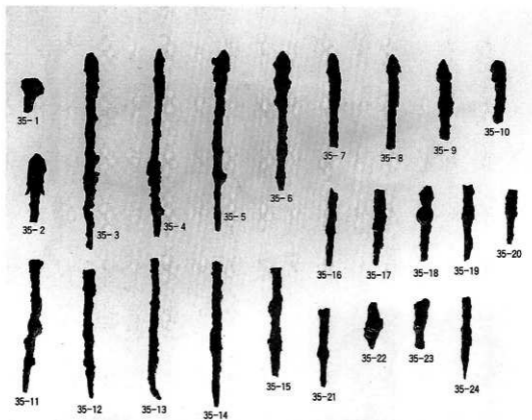


上面

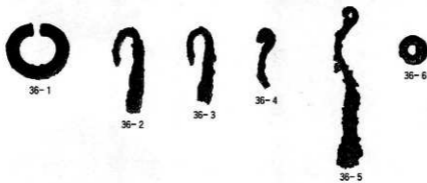
34-4

側面

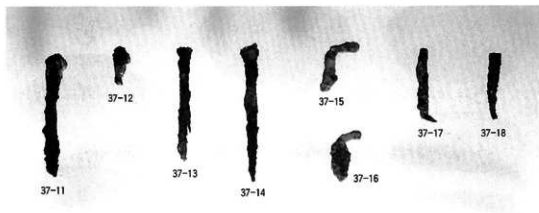
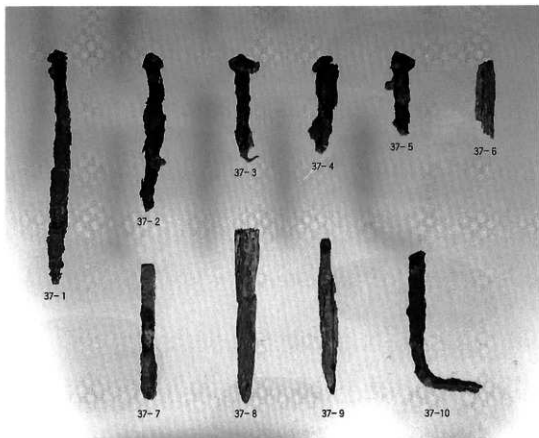
巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土馬具 (S. $\frac{1}{3}$ 。ただし34-4は約 $\frac{1}{2}$)



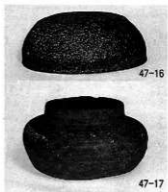
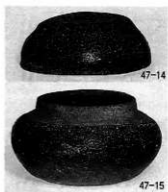
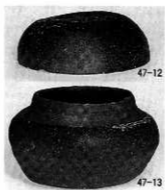
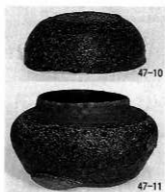
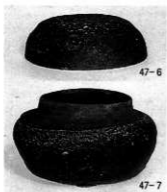
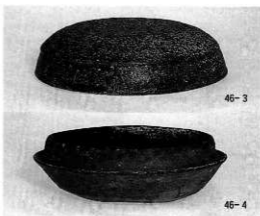
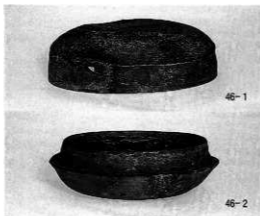
巨勢山407号墳 石室内 攪乱層出土鉄鎌 (S. ㄱ 1/3)



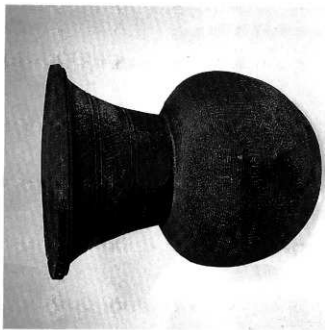
巨勢山407号墳 石室内 初葬面・攪乱層 出土鉄器・銀製品など (S. ㄱ 1/2)



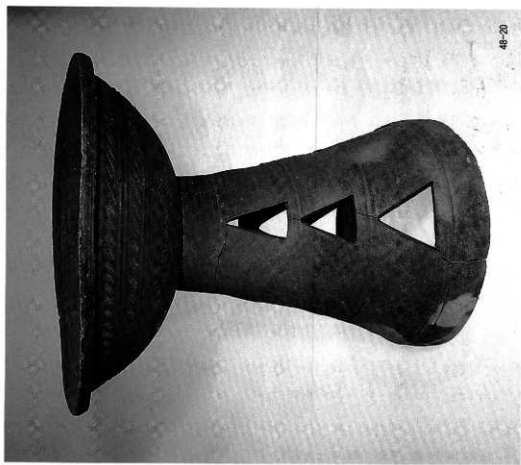
巨勢山407号墳 石室内 搜乱層出土鉄釘 (S.与1/3)



巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器1 (S.与1/3)



49-21

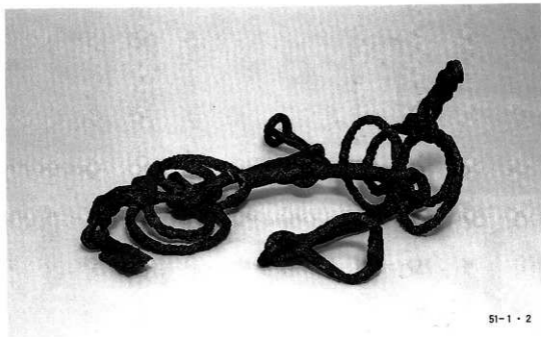


48-20

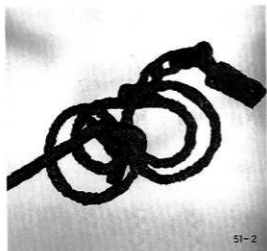
巨勢山408号墳 文室 床面出土土器2 (S.寺1/4)



巨勢山408号墳 玄室 床面出土土器 3
(S. 与 1/3)



51-1・2

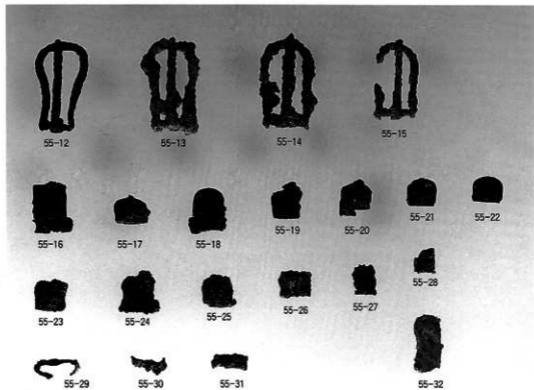
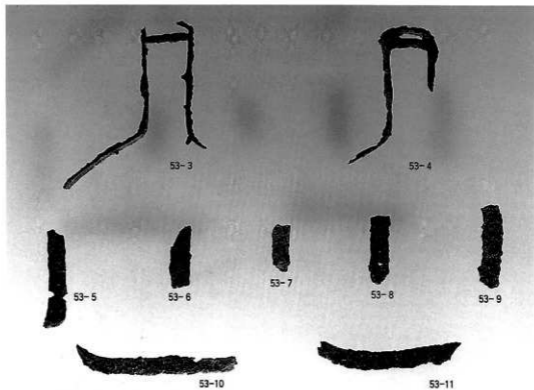


51-2

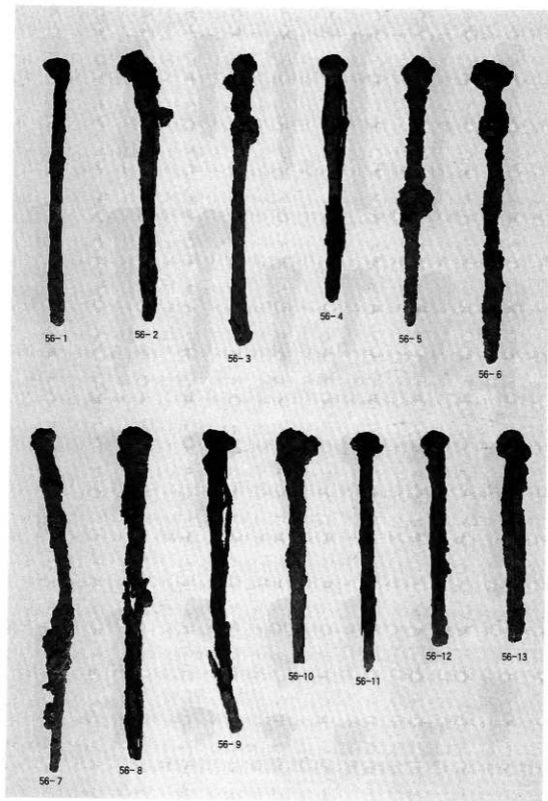


51-1

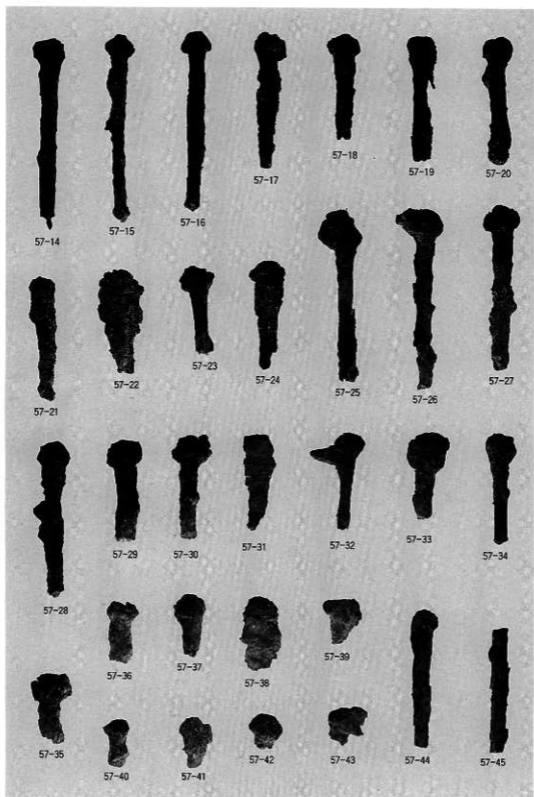
巨勢山408号墳 女室 床面出土馬具1 (S. 1/3)



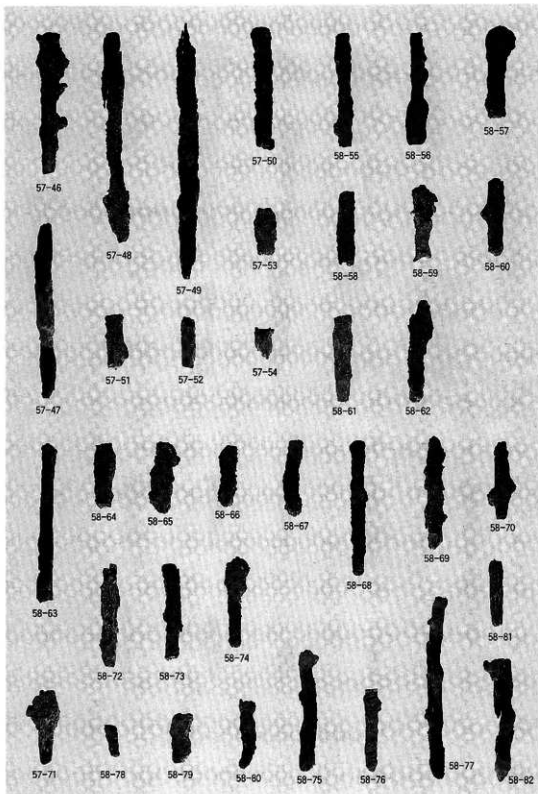
巨勢山408号墳 玄室 床面出土馬具2ほか (S. 1/3)



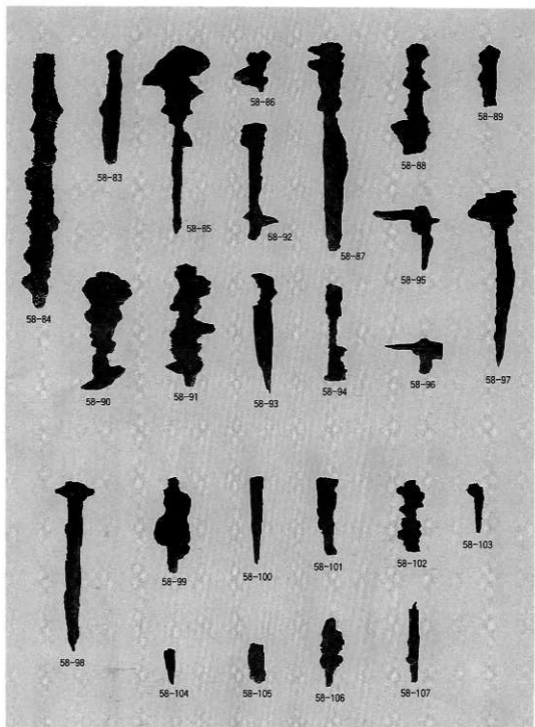
巨勢山408号墳 出土鉄釘 1 (S. ≙ 1/3)



巨勢山408号墳 出土鉄釘 2 (S. 1/3)



巨勢山408号墳 出土鉄鏃 3 (S.4 1/3)



巨勢山408号墳 出土鉄釘4 (S. 1/3)



63-1



63-3



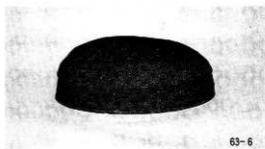
63-2



63-4



63-5



63-6



63-7



63-8

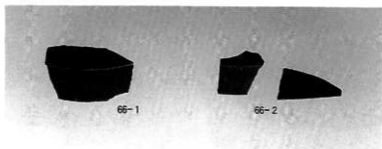


63-9



63-10

巨勢山409号墳 主体部1 棺外出土土器 (S. 1/3)



巨勢山409号墳 主体部2 出土遺物 (S. 1/3)

報告書抄録

ふりがな	こせやまこふんぐん5							
書名	巨勢山古墳群V							
副書名								
巻次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第28集							
編著者名	木許 守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL0745-62-3001							
発行年月日	西暦2005年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
巨勢山371・407・408・409号墳	奈良県御所市大字堂・西等山	29208		34度 26分 6秒	135度 43分 47秒	19971015～ 19980331 19981012～ 19981201	2,000 (古墳4基)	開発行為に伴う事前発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
巨勢山371号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(木棺直葬2基)		須恵器・鉄鏃・鉄鎌・刀子・砥石・ガラス玉・馬具(轡・雲珠・鉸具・辻金具)			
巨勢山407号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)		須恵器・土師器・馬具(轡・雲珠・鞍・鉸具など)・金銅装耳環・鉄飾金具・鉄釘			
巨勢山408号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(横穴式石室)		須恵器・土師器・馬具(轡・鉸・鉸具など)・ミニチュア甕形土器・同甕形土器・同鍋形土器・鉄釘			
巨勢山409号墳	古墳	古墳時代後期	埋葬施設(木棺直葬2基)		須恵器・鉄鏃・刀子			

奈良県御所市

巨勢山古墳群 V

御所市文化財調査報告書 第28集

平成17年(2005年)1月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市1-3

印刷 橋本印刷株式会社
葛城市竹内365番地1